

富士宮市文化財調査報告書第 49 集

山宮浅間神社遺跡

—史跡「富士山」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第49集

山宮浅間神社遺跡

—史跡「富士山」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

富士宮市教育委員会

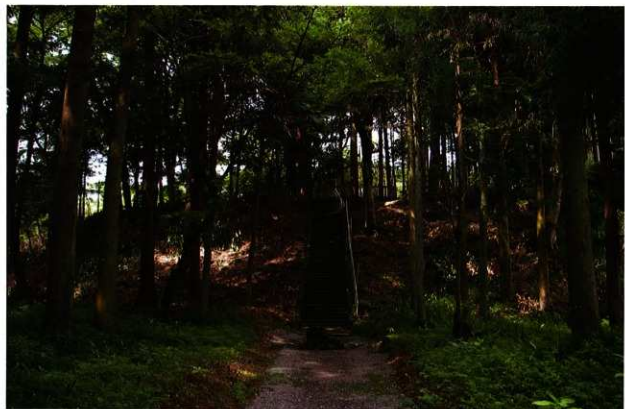


山宮浅間神社遺跡（中央下）航空写真

巻頭図版 2



遥拝所



参道と遥拝所

例 言

1 本書は、史跡「富士山」である山宮浅間神社の史跡整備事業に先立ち、平成24年度と平成25年度に富士宮市教育委員会が実施した山宮浅間神社遺跡における史跡範囲内容確認調査の報告書である。

2 本事業の調査体制は次のとおりである。

平成24年度	教育長	池谷眞徳
	富士山文化課	課長 渡井一信
	〃	主幹兼学術文化財係長 伊藤昌光
	〃	主任学芸員 渡井英誉（世界遺産推進室）
	〃	主査 保竹貴幸
	〃	主査 小泉工
	〃	学芸員 松本将太
	〃	嘱託学芸員 佐野恵里
	〃	調査補助員 石川眞・井出奉光・渋谷政夫・ 松野秀一・山田泰三・渡邊剛

平成25年度	教育長	池谷眞徳
(※) 富士山世界遺産課		課長 渡井一信
	〃	主幹兼学術文化財係長 伊藤昌光
	〃	主査 保竹貴幸
	〃	学芸員 松本将太
	〃	嘱託学芸員 馬飼野行雄・五味奈々子
	〃	調査補助員 渋谷政夫・古郡善明・山田泰三・ 渡井利夫

※ 平成25年9月までは富士山文化課

平成26年度	教育長	池谷眞徳
	文化課	課長 小田剛男
	〃	参事兼埋蔵文化財センター所長 伊藤昌光
	〃	学芸員 保竹貴幸・梶山沙織・永田悠記
	〃	嘱託学芸員 馬飼野行雄・五味奈々子・細田和代
	〃	臨時職員 渡辺真紀子・渡辺麻里

3 本書の執筆は以下のとおりである。

保竹貴幸 第1章～第3章2、第4章

永田悠記 第3章3

梶山沙織 附編

4 写真撮影は、現場写真を保竹・佐野が、遺物写真を馬飼野が担当した。

5 発掘調査及び本書の刊行に関する事務は、富士宮市教育委員会文化課が行った。

6 本事業に関するすべての資料は、富士宮市教育委員会が保管している。

7 本事業の実施にあたっては、次の方々からのご協力を得た。記して感謝する。（順不同、敬称略。）

池谷初恵・勝又直人・河合修・北垣俊明・坂詰秀一・鈴木敏則・篠ヶ谷路人・

澁谷昌彦・中野晴久・藤澤良祐・堀内秀樹・増山禎之・溝口彰啓

富士山本宮浅間大社・山宮浅間神社・民有地地権者

目 次

例言

第I章 調査の経緯と経過

- 1 調査の経緯・・・・・・・・・・ 1
- 2 調査方法と経過・・・・・・・・ 1

第II章 遺跡の位置と環境

- 1 地理的環境・・・・・・・・・・ 5
- 2 歴史的環境・・・・・・・・・・ 7

第III章 調査の成果

- 1 層序・・・・・・・・・・ 9
- 2 遺構・・・・・・・・・・ 9
 - (1) 遙拝所周辺
 - ① SX1・SX2・・・・・・・・ 11
 - ② SS1・・・・・・・・ 14
 - ③ SS2・・・・・・・・ 14
 - ④ SS3・・・・・・・・ 18
 - ⑤ その他・・・・・・・・ 18
 - (2) 石塁外側
 - ① SS4・・・・・・・・ 19
 - ② SS5・・・・・・・・ 19
 - ③ SS6・・・・・・・・ 19
 - ④ その他・・・・・・・・ 24
 - (3) 遙拝所南側境内地
 - ① SS7・・・・・・・・ 25
 - ② SA1・・・・・・・・ 25
 - ③ SF1・・・・・・・・ 28
 - ④ SS8・SD1・・・・・・・・ 28
 - ⑤ SS9・・・・・・・・ 34
 - ⑥ SD2・・・・・・・・ 34
 - ⑦ その他・・・・・・・・ 34

- 3 遺物・・・・・・・・・・ 37
 - (1) 遙拝所周辺地区出土遺物・ 38
 - (2) 遙拝所前地区出土遺物・ 40
 - (3) 斜面地区出土遺物・ 43
 - (4) A地区平坦面出土遺物・ 46
 - (5) B地区平坦面出土遺物・ 52
 - (6) C地区平坦面出土遺物・ 60

第IV章 調査のまとめ・・・・・・・・ 72

- 附編 昭和初期における山宮神社境内
の造営について・・・・・・・・ 76

報告書抄録

図版目次

図1	調査地地形図	3	図23	SA1実測図 (Tr36)	30
図2	調査トレンチ配置図	4	図24	SA1実測図 (Tr38)	31
図3	富士宮市位置図	5	図25	SF1実測図 (Tr39)	31
図4	遺跡位置図	6	図26	SF1実測図 (Tr41)	32
図5	遺跡周辺地質図	8	図27	SF1実測図 (Tr42)	32
図6	調査地内遺構分布図	10	図28	SS8・SD1実測図 (Tr7)	33
図7	25-Tr5-1実測図	12	図29	SS9実測図 (Tr11)	33
図8	25-Tr5-2実測図	13	図30	SD2実測図 (Tr24)	35
図9	SX1推定図	15	図31	出土遺物(1)	39
図10	SX2推定図	16	図32	出土遺物(2)	41
図11	SS1・SS2実測図	17	図33	出土遺物(3)	44
図12	SS3実測図	17	図34	出土遺物(4)	45
図13	SS4・SS5・SS6実測図 (25-Tr4)	20	図35	出土遺物(5)	47
図14	SS5実測図	21	図36	出土遺物(6)	49
図15	SS6実測図 (25-Tr1)	21	図37	出土遺物(7)	51
図16	SS6実測図 (25-Tr3)	22	図38	出土遺物(8)	55
図17	SS6実測図 (Tr2)	23	図39	出土遺物(9)	57
図18	SS6実測図 (Tr3)	23	図40	出土遺物(10)	59
図19	SS7実測図 (Tr45)	26	図41	出土遺物(11)	61
図20	SA1実測図 (Tr28)	29	図42	出土遺物(12)	63
図21	SA1実測図 (Tr32)	29	図43	遷葬所石列比較図	73
図22	SA1実測図 (Tr35)	30			

挿表目次

表1	土器・陶磁器観察表	64	表5	銭貨計測表	71
表2	土器・陶磁器出土表	70	表6	山宮浅間神社 神社運営関係資料目録	78
表3	和釘計測表	71			
表4	砥石計測表	71			

写真図版目次

- | | | | |
|--------|--|-------|---|
| 巻頭図版 1 | 山宮浅間神社遺跡航空写真 | 図版 14 | 出土遺物 3
Tr45(4)、Tr45(5)、Tr45(6)、
Tr45(7)、Tr45(8)、Tr45(9)、
階段東表採 |
| 巻頭図版 2 | 1. 遥拝所
2. 参道と遥拝所 | 図版 15 | 出土遺物 4
Tr 6 (1)、Tr 6 (2)、Tr 7 (1)、
Tr 7 (2)、Tr 8 (1)、Tr 8 (2)、
Tr 9、Tr10 |
| 図版 1 | 1. 遥拝所から富士山を望む
2. 昭和3～4年頃の遥拝所 | 図版 16 | 出土遺物 5
Tr11、Tr12(1)、Tr12(2)、Tr13、
Tr14(1)、Tr14(2)、Tr15(1) |
| 図版 2 | 1. 昭和6年築造の鳥居
2. 「拝殿」新築記念写真 | 図版 17 | 出土遺物 6
Tr15(2)、Tr16(1)、Tr16(2)、
Tr16(3)、Tr17(1)、Tr17(2)、
Tr18(1) |
| 図版 3 | 1. 着手前(遥拝所前平場)
2. 25 - Tr 5 - 1 全体 | 図版 18 | 出土遺物 7
Tr18(2)、Tr18(3)、籠屋表採、
Tr19、Tr20、Tr21、Tr22、Tr23、
Tr24、Tr25(1)、Tr25(2)、Tr26 |
| 図版 4 | 1. 25 - Tr 5 - 1 A - A' 断面
2. 25 - Tr 5 - 2 全体 | 図版 19 | 出土遺物 8
Tr27、Tr28、Tr29、Tr30、Tr31、
Tr32、Tr33、Tr34(1)、Tr34(2)、
Tr35 |
| 図版 5 | 1. S S 1・S S 2
2. S S 1 玉垣下南北列 | 図版 20 | 出土遺物 9
Tr36、Tr37、Tr38、Tr39(1)、
Tr39(2)、Tr40、Tr41、Tr42、
Tr43、Tr44 |
| 図版 6 | 1. S S 3
2. S S 4・S S 6・25 - Tr 4 全体 | 図版 21 | 出土遺物 10
砥石、石臼、銭貨、釘、
泥面子、鉛玉、文鎮、
玩具類 |
| 図版 7 | 1. S S 5
2. S S 6・25 - Tr 1 全体 | | |
| 図版 8 | 1. S S 6・25 - Tr 3 西側
2. S S 7・Tr45 全体 | | |
| 図版 9 | 1. S S 7・Tr45 北側
2. S A 1・Tr28 西側 | | |
| 図版 10 | 1. S F 1・Tr42 中央
2. S S 8・S D 1・Tr 7 全体 | | |
| 図版 11 | 1. S S 9・Tr11 全体
2. S D 2・Tr34 全体 | | |
| 図版 12 | 出土遺物 1
25 - Tr 1、25 - Tr 2、Tr 1、
25 - Tr 3、25 - Tr 4、石壘、
遥拝所表採、25 - Tr 5 - 1(1)、
25 - Tr 5 - 1(2)、25 - Tr 5 - 2(1) | | |
| 図版 13 | 出土遺物 2
25 - Tr 5 - 2(2)、25 - Tr 5 - 2(3)
25 - Tr 5 - 2(4)、25 - Tr 5 - 2(5)
Tr45(1)、Tr45(2)、Tr45(3) | | |

第 I 章 調査の経緯と経過

1 調査の経緯

山宮浅間神社遺跡は神社祭祀に関連した土器類が表採されている山宮浅間神社の境内地を中心とした遺跡である。山宮浅間神社は史跡「富士山」に含まれ、世界遺産「富士山」の構成資産にもなっている。世界遺産の構成資産に選定され史跡となったことを契機としてその保存・活用のため、史跡整備の実施が検討されていた。しかし、発掘調査の実施例が少なくその内容については不明な点もあった。そのため、史跡整備事業の実施に先駆け、史跡としての範囲・内容を確認し整備事業の参考とすることを目的として調査を行うことになった。調査は平成 24・25 年度に現地調査を行い、平成 26 年度に資料整理作業を行い調査報告書を刊行する計画を立てた。

平成 24 年度の調査は境内地全域にトレンチ 45 箇所を設定し、合計 438 m²を対象とする範囲内容確認調査を実施することにした。対象地は史跡の範囲が含まれているため、文化財保護法に基づき史跡の現状変更に関する手続きを行い文化庁長官より許可を受けた。調査は国庫・県費補助金を受けて実施することとなり、補助金等に係る予算執行の適正化に関する法律等に基づき補助金の申請を行い補助金の交付決定を受けた。

平成 25 年度における当初の調査計画は、選拝所の内容を把握するため、選拝所及びその周辺について土層帯を残し全面的に表土を除去し調査するもので、約 1,900 m²を対象としたものであった。調査は国庫・県費補助金を受けて実施することとなり、補助金等に係る予算執行の適正化に関する法律等に基づき補助金の申請を行った。その後、文化庁の指示により史跡整備に必要な最小限の調査を行うよう計画を変更し、展望所設置予定地である選拝所手前の平場にトレンチ 1ヶ所及び石塁の周辺にトレンチ 4ヶ所を設定し、約 200 m²を調査することとなった。対象地は史跡の範囲が含まれているため、文化財保護法に基づき史跡の現状変更に関する手続きを行い文化庁長官より許可を受けた。それを受け、補助金の計画変更承認申請を行い、補助金の交付決定を受けた。また、発掘調査地は砂防指定地であるため、静岡県砂防指定地管理条例に基づき静岡県知事に許可申請を行い同意を得た。

以上の諸手続きを完了し、現地調査及び資料整理作業に着手した。

なお、本報告書におけるトレンチ名については、平成 24 年度は通し番号で Tr1～45 とし、平成 25 年度はそれぞれのトレンチ名の前に年号を付して 25-Tr1～5 としている。

2 調査方法と経過

平成 24 年度の現地調査は 7 月から 9 月にかけて準備作業を行い、平成 24 年 10 月 1 日に着手した。基準点測量・地形測量を含む測量支援業務と航空写真撮影業務を㈱フジヤマ富士営業所に委託して実施した。トレンチ配置図及び遺構図は一部を除き測量支援業務として行った。コンテナハウスは太陽建機レンタル㈱富士宮支店より借り上げた。Tr42 を除き、

基準点を基に参道方向を軸として方向を合わせてトレンチを設定した。遙拝所北側の石塁外側に東より Tr1～3、東側の石塁外側に北から Tr4～5、遙拝所南側の平地に東～西へ Tr6～8、南側の籠屋までの間へ同様に Tr9～18、籠屋南側の平地の北側鳥居までの間に Tr19～38、南側の鳥居までの間に Tr39～44 までを設定し、最後に遙拝所の斜面上に Tr45 を設定し順に調査した。トレンチの掘削はすべて人力で行い、測量終了後に人力で埋め戻し、平成 25 年 1 月 29 日に現地作業を終了した。その後、現地調査結果の取りまとめと整理を行い、3 月 22 日に事業を終了した。調査前の平成 24 年 9 月 25 日には富士宮市「史跡富士山」整備委員会委員長である坂詰秀一氏に現地視察を依頼し調査指導を受けた。出土品については、遺失物法等に基づき富士宮警察署長へ発見届を提出し、同時に静岡県教育委員会教育長へ保管証を提出し、埋蔵文化財の認定を受けた。また、文化財保護法に基づき史跡の現状変更に伴う完了報告を行った。

平成 25 年度の現地調査は 9 月から 11 月にかけて準備作業を行った。平成 25 年 11 月 11 日からは調査中に倒壊する危険がある樹木の伐採を佃坪井組に委託して実施し、安全対策のために遮断フェンスを設置した。11 月 18 日に太陽建機レンタル(株)富士宮支店より借り上げたコンテナハウスを設置し、平成 24 年度に設定した基準点を利用して遙拝所手前西側に 25-Tr5-1 を設定し、翌日より現地調査を開始した。トレンチの掘削はすべて人力で行い、測量終了後に人力で埋め戻した。測量は一部を除きトータルステーションを使用して行った。平面図・遺構図の一部は写真測量により行った。12 月 2 日には遙拝所北側の石塁北西角外側に 25-Tr1 を、北側の平地に 25-Tr2 を設定し順次調査を開始した。12 月 11 日には石塁東側の地権者と協議の上で石塁北東角外側に 25-Tr3 を、石塁東側に 25-Tr4 を設定し順次調査を開始した。12 月 25 日に 25-Tr2 を、平成 26 年 2 月 12 日に 25-Tr5-1 を埋め戻した。2 月 13 日にフェンスの付け替えを始め、2 月 18 日に遙拝所手前東側に 25-Tr5-2 を設定し調査を開始した。3 月 3 日に 25-Tr1 と 25-Tr3 を埋戻し、3 月 7 日に 25-Tr4 を埋め戻した。3 月 19 日に 25-Tr5-2 を埋戻し、3 月 20 日にフェンスを撤去して現地作業を終了した。現地調査結果の取りまとめと整理は現地作業と並行して 3 月 20 日まで行い、事業を終了した。調査中、12 月 11 日に平成 24 年度に引き続き坂詰秀一氏に現地視察を依頼し調査指導・助言を受け、3 月 17 日に奇石博物館副館長・富士宮市文化財保護審議会委員の北垣俊明氏に調査地に見られる溶岩流について助言を受けた。出土品については、遺失物法等に基づき富士宮警察署長へ発見届を提出し、同時に静岡県教育委員会教育長へ保管証を提出し、埋蔵文化財の認定を受けた。また、文化財保護法に基づき史跡の現状変更に伴う完了報告を行い、静岡県砂防指定地管理条例に基づき静岡県知事に終了届を提出した。

資料整理作業は細かい遺物の出土量が多く洗浄・注記に時間がかかることが予想されたため、計画より前倒しして平成 26 年 4 月 1 日より実施し、遺物の洗浄・注記・分類・実測・トレース・図版貼り込みなどの報告書の作成作業及び写真撮影等を行い、平成 27 年 3 月 20 日の調査報告書刊行をもって一連の作業を終了した。

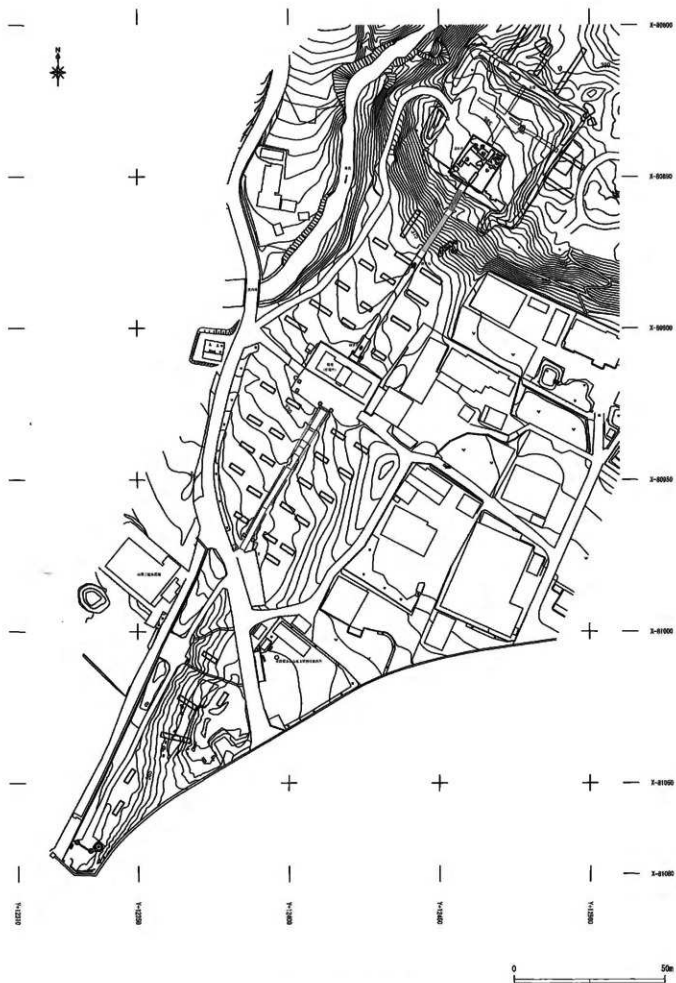


图 1 調查地地形图

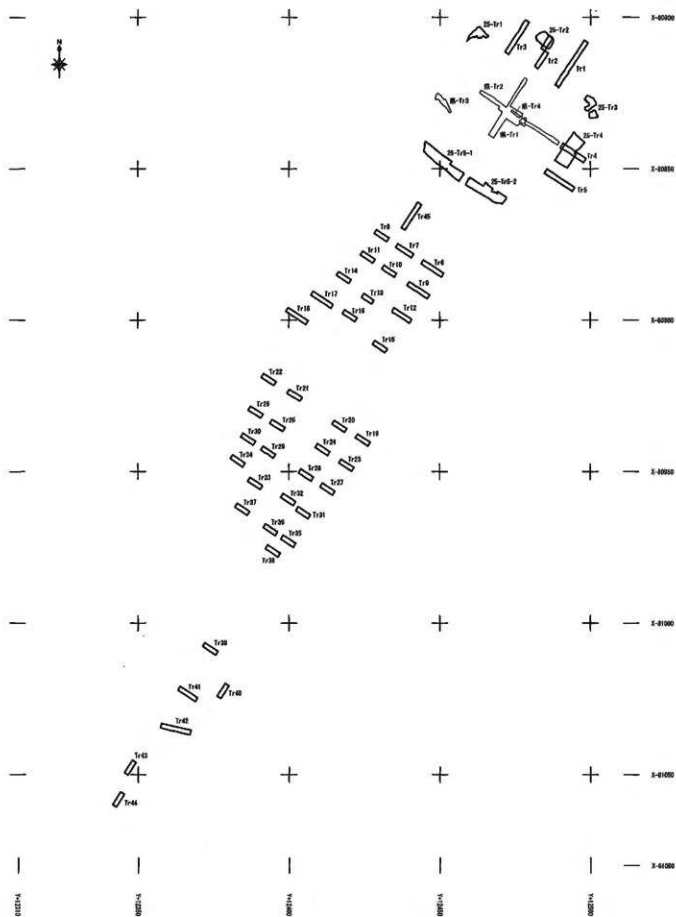


図2 調査トレンチ配置図

第二章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

山宮浅間神社は富士宮市の市街地北東の富士山麓に位置し、富士山への登山道である県道富士宮富士公園線が東側に接している。富士山体そのものを祭祀の対象とする神社であり、「富士本宮浅間社記」では富士山本宮浅間大社（以下「浅間大社」という。）の故地とされ、里宮である浅間大社に対する山宮とされている。現在でもこの付近から富士山頂側では住宅地が少なくなっており、古代から里と山との境となっていたことが想像できる。境内地は西南～北東にかけて50m×300mほどの細長い敷地を占め、中央に参道が南西～北東に向かって伸びており、参道を南から進み2個所の鳥居と籠屋を抜けると、富士山方向を向く建造物のない石組で構築される遥拝所に達する。遥拝所は参道のある南側を除く3方がそれぞれ45m程度の長さの溶岩礫を積み上げた石塁で囲まれている。境内地の標高は360～390mほどで、全体的には北東から南西に向かって流れる濁れ沢の青沢に向けて緩やかに傾斜している。遥拝所は丘陵状の台地先端にあり、籠屋付近や県道富士宮富士公園線に接する最南端の鳥居付近には平坦地が確認できる。

富士宮市はほぼ全域に富士山起源の火山噴出物が堆積しており、山宮浅間神社では溶岩流の上に他の溶岩流が乗りかかるように堆積している2枚の溶岩流が確認されている（図5）。遥拝所より南側は北山（外神）溶岩流Ⅱを地盤としており、遥拝所はその溶岩流を覆う約2,000年前に山頂火口から流出したといわれている青沢溶岩流の末端の高台上にあり、その西側は青沢に向かって落ち込む急傾斜の崖となっている。現在、遥拝所から南方を眺めても社叢に阻まれて山麓の景色は見えないが、遥拝所の高台に続く東側の台地上からは市街地や遙か遠方には駿河湾を望むことができる。

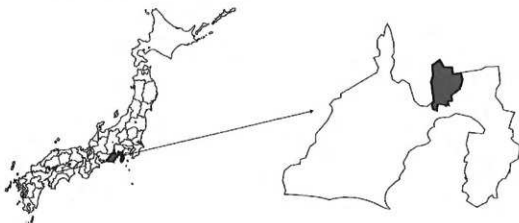


図3 富士宮市位置図

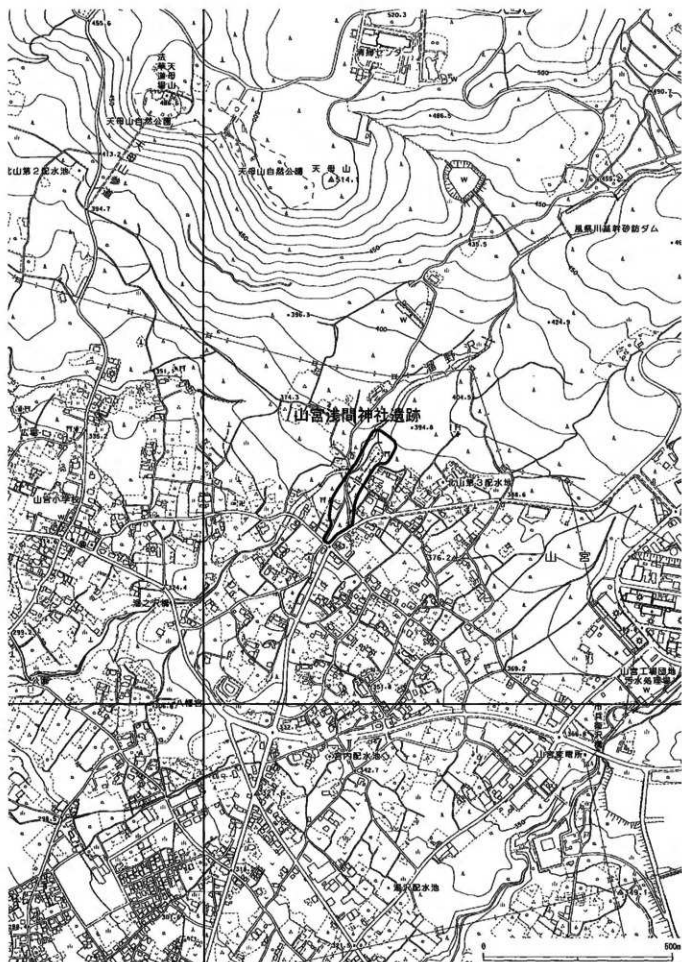


図4 遺跡位置図

2 歴史的環境

山宮浅間神社は富士山を神体とする神体山信仰の祖形が偲ばれるとして昭和60年3月に富士宮市の史跡となり、祭事に使われた土器類が境内地を含む周辺より発見されたため、平成12年には山宮浅間神社遺跡として埋蔵文化財包蔵地となった。その後、日本の山岳信仰のあり方を考える上で重要であるとして、平成23年2月に史跡「富士山」が指定され、山宮浅間神社はその範囲に含まれることになった。富士山は、平成25年6月に「富士山・信仰の対象と芸術の源泉」として世界遺産に登録され、山宮浅間神社はその構成資産となった。

山宮浅間神社は富士山の溶岩流上に存在する。富士山の溶岩流末端には浅間大社の湧玉池に代表される湧水が数多く見られる。山宮浅間神社の東方約5kmに位置する村山浅間神社には湧水があり境内地からは縄文時代の土器が出土しており、この付近を流れる川沿いにも縄文時代以降の遺跡が数多く存在する。しかし、山宮浅間神社周辺に湧水は存在せず、西側に涸れ沢が存在するのみである。その影響か、周辺では山宮浅間神社遺跡以外の遺跡は発見されていない。

山宮浅間神社は「富士本宮浅間社記」によれば景行天皇の治世に日本武尊が「山足之地」に鎮座していた浅間大神を遷してこの地に祭ったとされている。その後、平城天皇の治世の大同年元(806)に坂上田村麻呂によって大宮へと遷宮されたとあり、浅間大社の故地とされている。

文献上で最初に山宮が現われるのは天文20年(1551)の今川義元朱印状であり「富士大宮山宮太夫」という職名が見える。天正5年(1577)作成の「富士大宮御神事帳」には「山宮之神事」とあり、同文書にはほかにも随所で山宮の記載が確認でき、この時期には富士大宮(現浅間大社)と深い関係を持つ山宮の存在が確認できる。起源は明らかではないが江戸時代には山宮と浅間大社との間で「山宮御神幸」と呼ばれる神事があり、明治初年まで行われていたといわれている。また、明治10年には浅間大社の摂社から外れ、この時期には御神幸も行われなくなったと考えられる。なお、現在は、地元の氏子等により日常の管理が行われている。

山宮浅間神社には本殿の建物がなく、本殿に相当する位置には石の並ぶ遥拝所と呼ばれる施設がある。江戸時代の地誌『駿河記』(文政3年(1820)完成)等には、共に社殿がなく石壇・礎石のみがあると記述されており、近世には建物が存在しなかったことがわかる。このような祭祀形態は、富士山信仰の原初的形態と考えられている。

山宮浅間神社は「富士山」の世界遺産登録を機に、遥拝所から神体である富士山を遠く望むことのできる神聖な場所として人気を集めている。反面、観光客の増加に伴い史跡の価値を形成する遺構等の保護が懸念されており、史跡整備による適切な保存と活用が検討課題となっている。

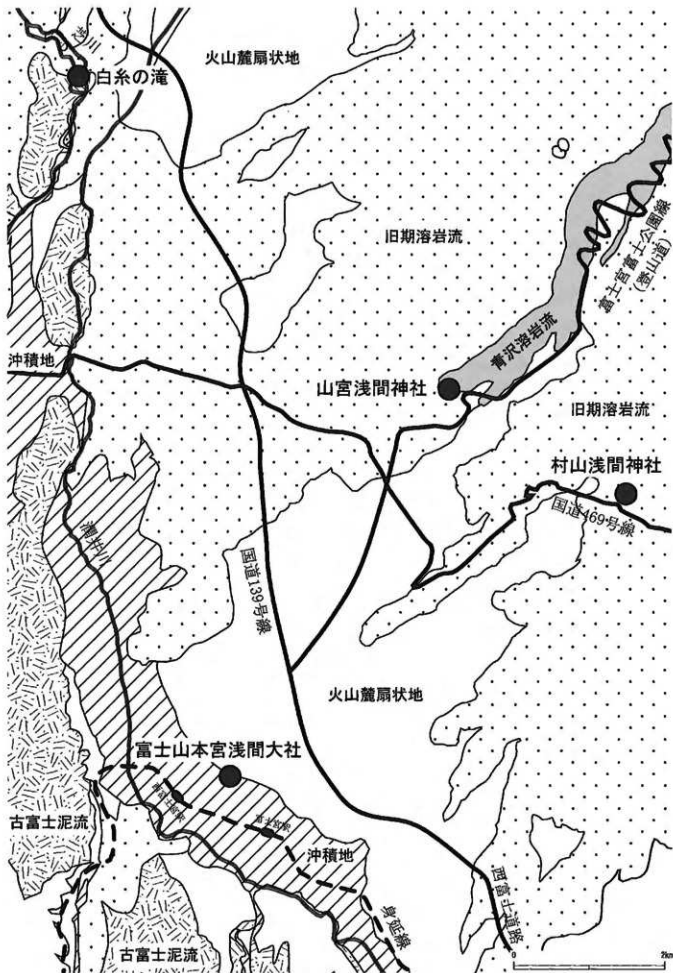


図5 遺跡周辺地質図

第三章 調査の成果

1 層序

対象地は全体的には北東から南西へと緩やかに傾斜する土地であるが、溶岩流の堆積や雨水の流入により地形の起伏がある。傾斜に伴い雨水が流下していたようで、西側のトレンチには自然流路となっている層も確認できる。また、籠屋東南側では東側の崖地から流入したと思われる土が厚く堆積して地盤まで確認できなかったトレンチもある。また、神社の改修等に伴う人為的な作れも及んでおり、遺跡内における標準的な土層堆積を挙げることは難しい。

各トレンチとも基本的な層序としては、溶岩流上層の火山噴出物を地盤とし、土師器を包含する黒褐色土層や暗褐色土層がこれを覆う。多くの遺構はその中間層に形成されている。表土には土師器のほかに現代の銭貨や陶器を含む。

遺拝所内では石塁に遮られるためか土層の堆積が薄く、籠屋南側では流入土が厚く堆積しているトレンチもある。遺拝所内の地盤は赤色砂礫土で大型の溶岩が混入し、遺拝所南側の地盤は黄褐色土または灰黄褐色土で小さな溶岩礫が混入する。これはそれぞれの地盤を構成する溶岩流の違いによるものと考えられる。地盤より上層にはほぼすべての層から土師器が出土している。層によって混入の割合が異なることもあるが、土師器の年代にはあまり差がなく、堆積土から年代を特定することは難しい。

よって、基本層序を示せず、各トレンチで個別に層序を記載することとする。

2 遺構

今回の山宮浅間神社遺跡の調査においては、平成24年度に遺拝所のある平場を囲む石塁の外側と遺拝所南側の参道沿いの平坦な境内地の遺構の有無について、トレンチ45箇所を設定し調査した。次いで、整備工事の事前調査として、平成25年度に遺拝所前の平場における遺構の有無の確認と、平成24年度に検出された石塁外側の遺構の詳細分布調査を行うため、トレンチ5ヶ所を設定し調査した。トレンチ名を通し番号にしなかったために重複しているため、平成24年度調査分をTr1からTr45とし、平成25年度調査分を25-Tr1から25-Tr5とした。

報告の区分は、地形の相違及び遺構・遺物の出土状況から、(1)遺拝所周辺(石塁内)、(2)石塁外側、(3)遺拝所南側境内地に分けて報告している。

また、遺構名は、遺拝所の造成跡をSX1・SX2、遺拝所南側の石列をSS1・SS2・SS3、敷石状の遺構をSS4、石組遺構をSS5、石塁をSS6、階段状の積石遺構をSS7、土塁状の遺構をSA1、道状の遺構をSF1、参道の縁石をSS8、排水溝をSD1、集石遺構をSS9、溝状遺構をSD2とする。

なお、調査範囲は史跡指定地であるため極力現状を変更しないようにした。遺構はなる

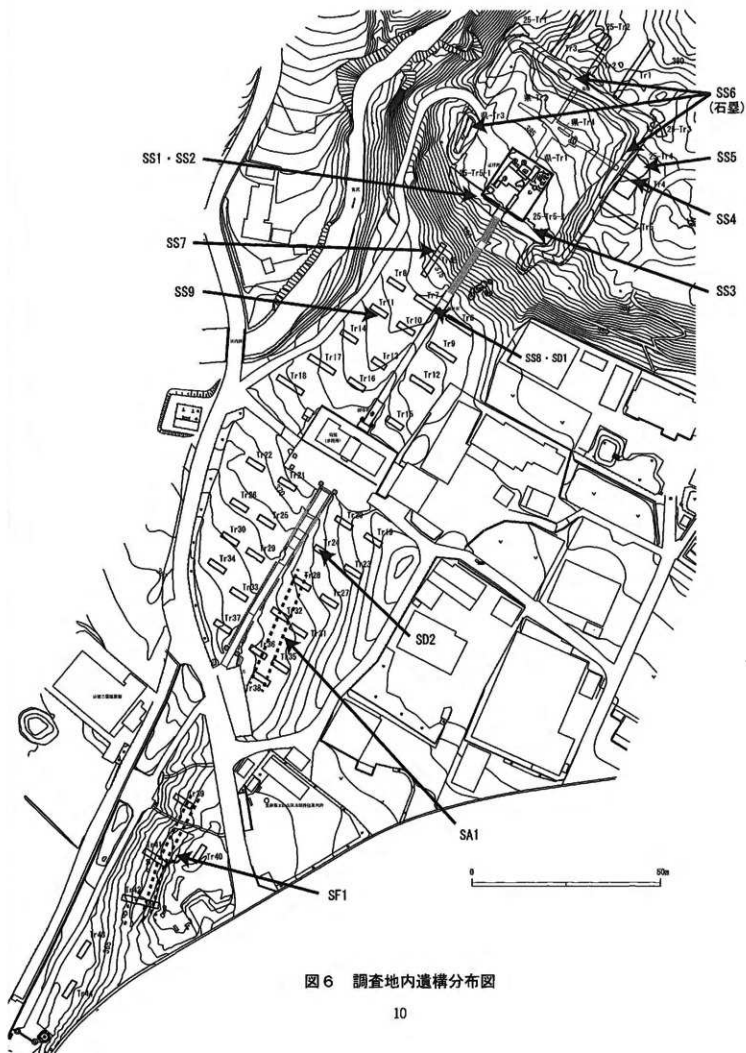


図6 調査地内遺構分布図

は断面A-A'で確認されたのみであり、明確な推定線を引くことはできない。

黒褐色土は崩壊が著しいが、SS1の西側に黒褐色土の段差が確認されており、西端はある程度推定できる。東は断面B-B'までは黒褐色土が確認できるが、より東側では明確ではない。断面C-C'の7層のように黒褐色土が一部確認できる場所もあるが、土質がやや異なるため同じものか判断できない。その範囲は東西が選拝所の石列の東西より約1～1.5m広く、南北軸は選拝所内の石列とほぼ一致する。同程度の範囲が東側に広がっていると仮定すると東西幅は約12mとなる。南北幅については今回の調査範囲では確認できない。

以上、造成範囲については断面を基に推定線を描いたが、その中間地点では造成面までの掘削を行っていないため正確な範囲は不明である。

② SS1 (図11)

東西方向と南北方向に並ぶ石列が25-Tr5-1東側の選拝所南側で発見された。0.1～0.5m程度の溶岩が玉垣の南側で玉垣と並行しながら南東から北西に並び、さらに北東に向きを変え玉垣の下に潜り込むように続きトレンチ外へ続いている。トレンチ内での長さは東西列が6mで、南北列は玉垣の下を通り1.5m続き更に延長していると推定される。東西列は途中で2箇所石が途切れる場所がある。トレンチ内では、西から6個の石が1.8m連なり、0.4m途切れた後、小石を含め6個の石が1.4m続き、0.6m途切れて3個の石が1.3m続く。中間の列の西から3番目の石は露出した地盤の溶岩であり、この溶岩に合わせるように石が並ぶ。使用された溶岩は自然の転石ではなく一部を人為的に面取りしたもので、加工面は選拝所の南側斜面方向に向いている。

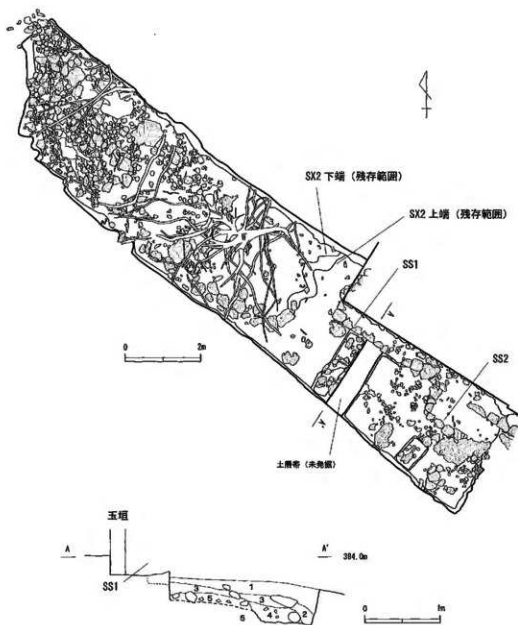
トレンチ内の石列東端から3.6mの所から0.6mの長さで石列が途切れている。途切れた部分の右側を選拝所内に延長すると、選拝所の中心である祭壇の西側南北列に当たるように見える。途切れた部分の南側には、0.06～0.1m程度低い位置に石列(SS2)の南北列が接している。

使用された溶岩が類似しているため、選拝所内の石列と同質のもので時期も同じと考えられるが、東西方向は選拝所内の石列とは5度程度北側に傾いていることがわかる。南北方向で玉垣下に続く石列は、石の個数が少なくトレンチ外の位置が確認できないため推定でしかないが、東西軸と直角ではなく東側へ傾いており、南北方向は選拝所内の石列とほぼ一致する。

SS1は、選拝所内の石列と軸の方向が一致しない。その構築時期や改修の有無については不明である。

③ SS2 (図11)

25-Tr5-1東側の選拝所南側でSS1と並行する石列が発見された。0.15～0.3m程度の溶岩が自然石の溶岩に接するように始まり、玉垣に沿って南東から北西に4個の石が並び、さらに北東に向きを変えて4個の石が並びSS1に接する。トレンチ内での長さは前者が溶岩を含め1.8m(溶岩を除くと1.2m)で、後者は0.9mでSS1に接する。自



- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 灰褐色土 | 着土層細粒多し。細砂多く含む。サラサラ。乾燥して白っぽくなる。近年上部に敷いたもの（10cm前後の海浜性の小礫層）が混入している。 |
| 2 | 黒褐色土 | 腐り気のある黒色の有機質土でフカフカしている。 |
| 3 | 黒褐色土 | 1層の緑れ落ち層も堆積したものであろうが、細砂をまったく含んでいない。5cm前後の小細砂を多く含む。土師器の細片（磨耗したもの）が多く含まれる。黒色の土壌で、腐り気があり、この部分だけ深い範囲が解る。 |
| 4 | 暗赤褐色土 | 地山の赤色系火山礫（5cm前後）と上部層の黒色系土壌の攪拌土（造成土）。遺物は目立っていない。 |
| 5 | 赤色土 | 海辺流上層礫。赤色系の火山礫（10cmから30cm程度）を多く含む。サラサラ。 |

図7 25-Tr5-1 実測図

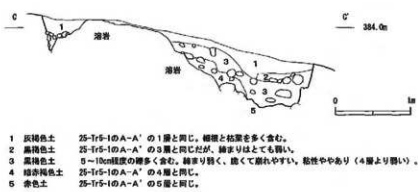
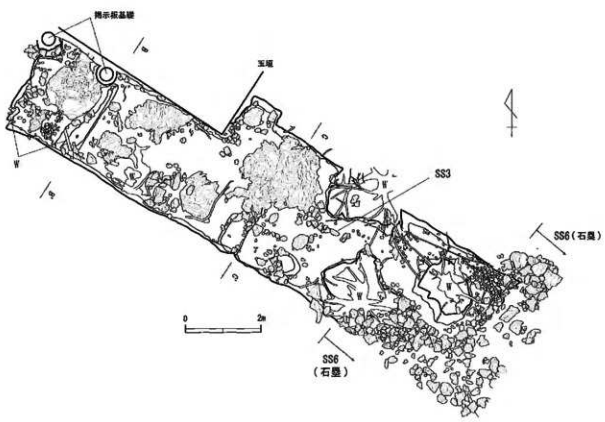


図8 25-Tr5-2実測図

は断面A-A'で確認されたのみであり、明確な推定線を引くことはできない。

黒褐色土は崩壊が著しいが、SS1の西側に黒褐色土の段差が確認されており、西端はある程度推定できる。東は断面B-B'までは黒褐色土が確認できるが、より東側では明確ではない。断面C-C'の7層のように黒褐色土が一部確認できる場所もあるが、土質がやや異なるため同じものか判断できない。その範囲は東西が選拝所の石列の東西より約1~1.5m広く、南北軸は選拝所内の石列とほぼ一致する。同程度の範囲が東側に広がっていると仮定すると東西幅は約12mとなる。南北幅については今回の調査範囲では確認できない。

以上、造成範囲については断面を基に推定線を描いたが、その中間地点では造成面までの掘削を行っていないため正確な範囲は不明である。

② SS1 (図11)

東西方向と南北方向に並ぶ石列が25-Tr5-1東側の選拝所南側で発見された。0.1~0.5m程度の溶岩が玉垣の南側で玉垣と並行しながら南東から北西に並び、さらに北東に向きを変え玉垣の下に潜り込むように続きトレンチ外へ続いている。トレンチ内での長さは東西列が6mで、南北列は玉垣の下を通り1.5m続き更に延長していると推定される。東西列は途中で2箇所石が途切れる場所がある。トレンチ内では、西から6個の石が1.8m連なり、0.4m途切れた後、小石を含め6個の石が1.4m続き、0.6m途切れて3個の石が1.3m続く。中間の列の西から3番目の石は露出した地盤の溶岩であり、この溶岩に合わせるように石が並ぶ。使用された溶岩は自然の転石ではなく一部を人為的に面取りしたもので、加工面は選拝所の南側斜面方向に向いている。

トレンチ内の石列東端から3.6mの所から0.6mの長さで石列が途切れている。途切れた部分の右側を選拝所内に延長すると、選拝所の中心である祭壇の西側南北列に当たるように見える。途切れた部分の南側には、0.06~0.1m程度低い位置に石列(SS2)の南北列が接している。

使用された溶岩が類似しているため、選拝所内の石列と同質のもので時期も同じと考えられるが、東西方向は選拝所内の石列とは5度程度北側に傾いていることがわかる。南北方向で玉垣下に続く石列は、石の個数が少なくトレンチ外の位置が確認できないため推定でしかないが、東西軸と直角ではなく東側へ傾いており、南北方向は選拝所内の石列とほぼ一致する。

SS1は、選拝所内の石列と軸の方向が一致しない。その構築時期や改修の有無については不明である。

③ SS2 (図11)

25-Tr5-1東側の選拝所南側でSS1と並行する石列が発見された。0.15~0.3m程度の溶岩が自然石の溶岩に接するように始まり、玉垣に沿って南東から北西に4個の石が並び、さらに北東に向きを変えて4個の石が並びSS1に接する。トレンチ内での長さは前者が溶岩を含め1.8m(溶岩を除くと1.2m)で、後者は0.9mでSS1に接する。自

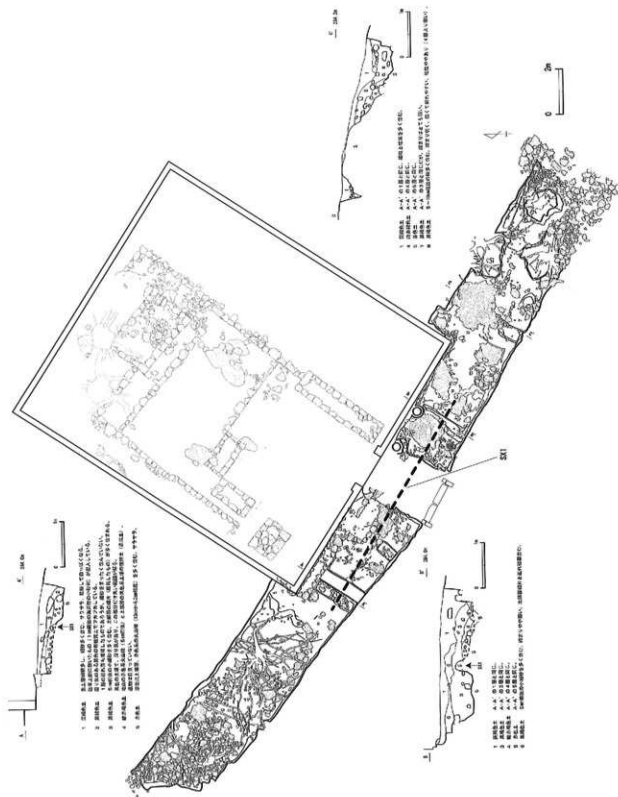


图9 SX1推定图

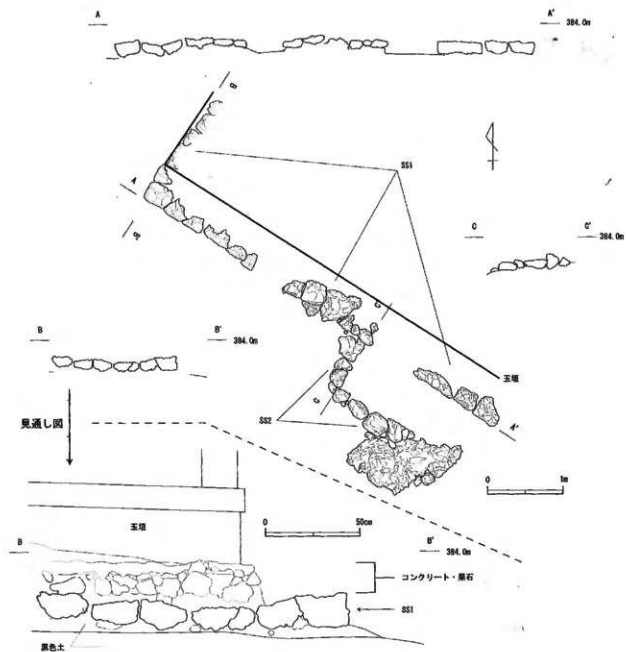


図 11 SS 1・SS2 実測図

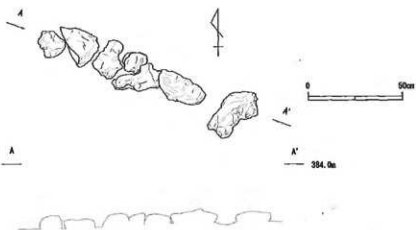


図 12 SS 3 実測図

然石溶岩の東側は、遷拝所入口（門扉）手前の平坦面となっており、平坦面が0.2m程度低くなっている。

使用された溶岩はSS1と同じく自然の転石ではなく一部を人為的に面取りしたものである。加工面は内側の遷拝所方向の北側・東側を向き、参道から遷拝所への参詣者に対するように向いている。SS1と接する部分から祭壇の正面を見ると、延長線上に富士山を望むことができる。

使用された溶岩が類似しているため、遷拝所内の石列及びSS1と同質のもので時期も同じと考えられる。SS1と軸をあわせており、遷拝所内の石列とは軸が一致しない。

④ SS3 (図12)

25-Tr5-2 中央部付近で発見された石列で、0.1~0.3m程度の自然石の溶岩で構成される。北西から南東に0.9mの長さで6個の石が並び、0.1mの間を置き0.3mの石1個が南北を軸として置かれている。

軸は遷拝所内の石列やSS1・SS2とも異なり、使用される溶岩も自然石そのものである。石は表土下の層に置かれるようにあり、表土を除くと容易に動いてしまう状態である。転石が偶然列のように並んだ可能性があり、遺構と捉えるべきではないかもしれない。

⑤ その他

25-Tr5-1 西側からはSS6（石塁）に接するように続く石積が発見された。0.1~0.3m程度の自然石の溶岩で構成され、溶岩の小礫が石の間を埋めるように堆積している。この地点は遷拝所のある平地では最も低い場所であり、雨水の流下により小礫が集中した箇所も見られるが、主体となる溶岩は等高線に沿うように階段状に積み重なっている。転石が斜面に沿って堆積した可能性もあるが、遷拝所の平坦部が崩壊しないように石を積み敷き詰めたものと思われる。

25-Tr5-2 中央部南側では0.2~0.5m程度の大きさが同じような自然石の溶岩が発見された。等高線に沿うように積み重なっているが、西側の石積と比べると大きさの整った石が多くなっている。もともとは西側の石積と同質のものだが、この付近は転石の少ない場所であり、西側と比べて小礫の堆積が少なかったため、大きな礫が残存したものと思われる。

25-Tr5-2 東側ではSS6（石塁）の続きと思われる石積が発見された。0.1~0.5m程度の自然石の溶岩で構成され、その隙間に溶岩の小礫や土砂が混入する。トレンチの東端で西側に曲がり、更に南へ向かって曲がりトレンチ外へ続いている。

(2) 石塁外側

対象となるトレンチは25-Tr1、25-Tr2、25-Tr3、25-Tr4、Tr1、Tr2、Tr3、Tr4、及びTr5である。

SS6（石塁）の外側はほぼ全域が自然地形となっている。地盤の溶岩礫の影響を受け

起伏の激しい地形が広がり、雨水が表層を流下して流路を形成するなど、自然の擾乱が起きている。一部には人工的に造成された場所があり、北側の Tr 1 の地点は近年の樹木伐採のために道状に均されている。また、西側の Tr 4・25-Tr 4 の地点は民有地で、造成されたと思われるやや平坦な地形となっている。

調査地は 24 年度と 25 年度で重複する場所がある。24 年度に行った Tr 2 では一部に落ち込みが確認されたため、25 年度に 25-Tr 2 を設定しその確認を行った。また、24 年度に行った Tr 4 で溶岩が敷き詰められていることが確認されたため、25 年度には 25-Tr 4 を設定しその周囲に範囲を広げ調査した。

① SS 4 (図 13)

25-Tr 4 及び Tr 4 で敷石状の遺構が発見された。遺構の範囲は 25-Tr 4 に収まる。数 cm の小礫から 1 m 近く及び溶岩礫が、ほぼ一面に平坦に敷き詰められている。西側は S S 6 (石塁) と接するが、ほぼ同様な溶岩で構成されているため、離れた場所から見るとその境界が判別し難くなっている。

使用された溶岩の状態から S S 6 (石塁) とほぼ同時期に構築されたものと思われる。本来は自然地形が広がっていたと思われ、雨水の流路となり起伏のある地形であったと思われる。その地形を埋めるように溶岩が詰められている。トレンチの南東部は人為的な掘削が行われており、遺構が破壊されていると思われる。

S S 6 (石塁) の西側基底部から計測すると、敷石はトレンチ南側から中央部にかけては約 4 m の幅で S S 6 (石塁) と並行して 5 m 程度の長さで分布し、北東に角度を変え 4 m 程度の長さでトレンチ北側付近に達し幅 5.5 m 程度の範囲となる。そこから S S 6 (石塁) 側に向かってほぼ直角に範囲を狭めて幅 2.5 m 程度にまで減少し、トレンチ北西部では徐々に幅を狭めながらトレンチ外部へと続いているようである。

遺物は表土層に土師器 3 点が混入していた程度であり、土師器が数多く点在している S S 6 (石塁) 内側とは様相が異なる。

目的は不明だが、敷石の存在しない範囲はほぼ平坦であり、石を敷き詰めることによってこの一帯に平坦部を形成しようとしたと思われる。

② SS 5 (図 13・14)

25-Tr 4 北東部で石を組み合わせた遺構が発見された。0.5~0.7 m 程度の 9 個の自然の溶岩を楕円形に組み合わせている。石組の上部が平坦なるように高さの類似した溶岩が使われている。S S 4 に境を接する自然堆積土の上に置くように構築されており、一部は S S 4 の上に乗っている。S S 4 や S S 6 (石塁) よりも新しいと思われる。

長軸はほぼ正確に東西を向いており、意図的に配置されたものと思われるが、その目的は不明である。

③ SS 6 (石塁) (図 13・15・16・17・18)

S S 6 (石塁) の端部が各トレンチで発見された。トレンチは地表で目視できる S S 6 (石塁) の外側境界に沿って設置した。東側は急斜面となっているために設置しな

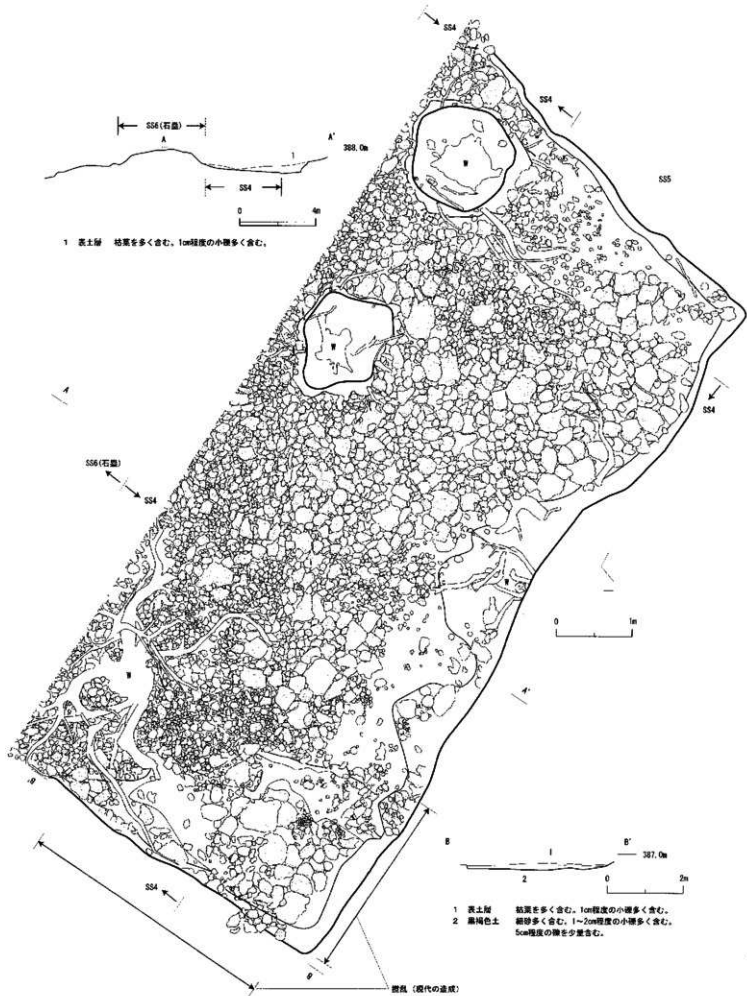


図13 SS4・SS5・SS6 (石臺) 実測図 (25-Tr 4実測図)

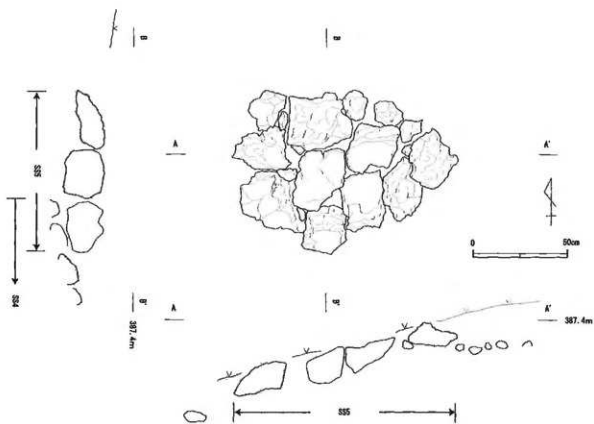
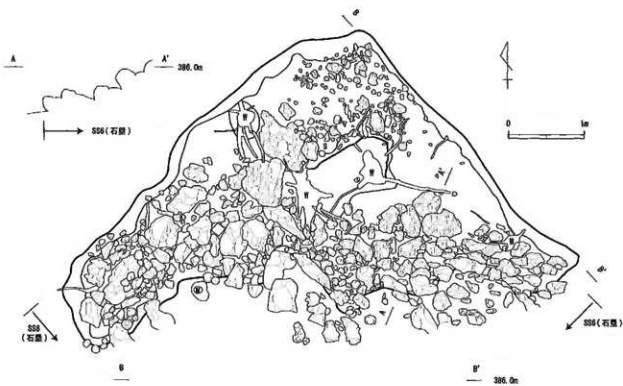


図14 SS5実測図



- 1 灰土層 縦壁が発達している。5cm程度までの粗砂を多く含む。小礫を含む。
- 2 黒褐色土 粗砂を多く含む。10cm程度までの礫を含む。

図15 SS6 (石壁) 実測図 (25-Tr 1 実測図)

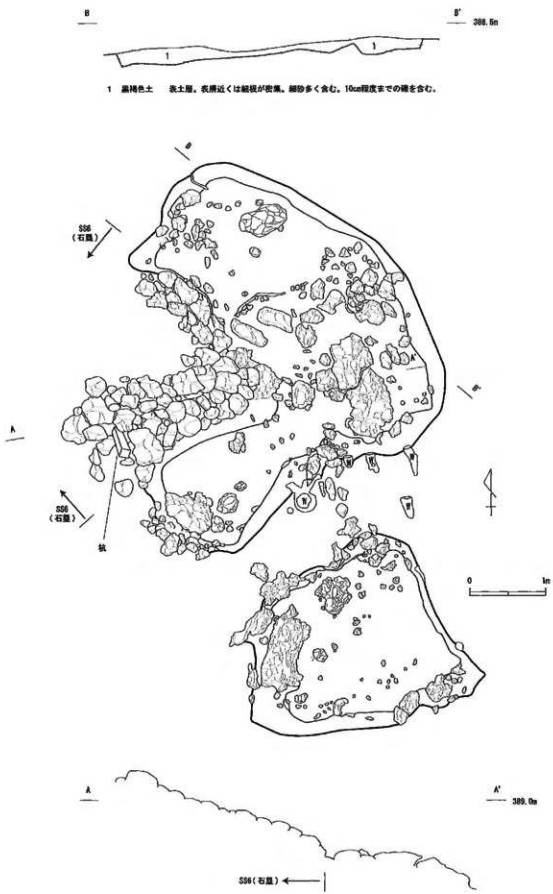


図 16 SS6 (石墓) 実測図 (25-Tr3実測図)

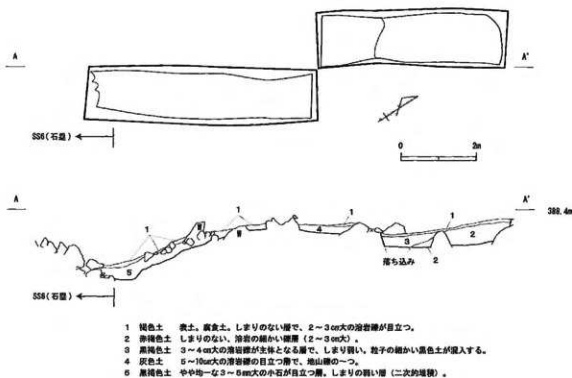


図 17 SS6 (石塚) 実測図 (Tr2実測図)

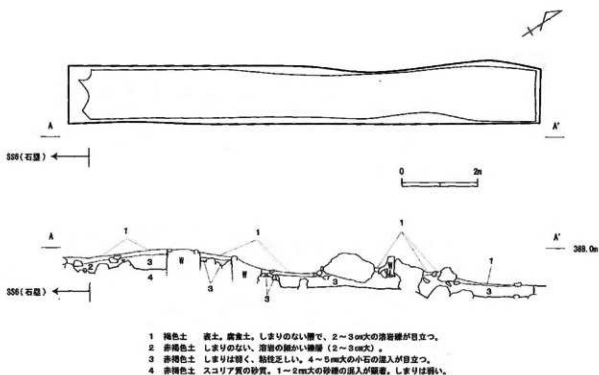


図 18 SS6 (石塚) 実測図 (Tr3実測図)

った。北から南東へさらに南へと設置し、順番に 25-Tr 1、Tr 3、Tr 2、Tr 1、25-Tr 3、25-Tr 4、Tr 4 及び Tr 5 となる。

25-Tr 1 は S S 6 (石塁) の北西角があると想定された箇所を設置した。北西側は青沢に向かって急傾斜の崖となって落ちている。S S 6 (石塁) は北東側の斜面の境に沿って北東に向かい、ほぼ直角に曲がり南東へと続いている。北東角地点付近では樹木の影響により溶岩の途切れる箇所がある。

Tr 3 では地表下の S S 6 (石塁) は幅 0.7m、深さ 0.5m で確認され、地表上の S S 6 (石塁) とほぼ同じ角度で続き地盤層に接する。Tr 2 では S S 6 (石塁) は幅 0.5m、深さ 0.5m で確認され、地表上の S S 6 (石塁) とほぼ同じ角度で続き地盤層に接する。なお、Tr 1 では S S 6 (石塁) は確認できなかった。

25-Tr 3 は S S 6 (石塁) の北東角があると想定された箇所を設置した。トレンチの南西部は現代の造成が行われており地形の改変が激しい。北側は S S 6 (石塁) 端部が明確に分かるが、北東角付近から南西へかけて造成の影響を受けており、S S 6 (石塁) の端部は明瞭ではない。しかし、比較的大きな溶岩に沿うように南西側へのラインを推測することは可能であると判断し S S 6 (石塁) 端部とした。

25-Tr 4 及び Tr 4 では S S 6 (石塁) と連続するように S S 4 が存在しているため、S S 4 より地下の様子は確認できなかった。平坦な S S 4 との境までが範囲と考えられる。Tr 5 では東側には広がらず、地表上の S S 6 (石塁) が端部となっていた。トレンチ内は現代の造成が行われており、その際に S S 6 (石塁) が破壊された可能性もある。また、25-Tr 4 で確認された S S 4 は確認できなかった。なお、Tr 4 は 25-Tr 4 と遺構範囲が重複するため図化せず、Tr 5 の S S 6 は地表部分のみであるため図化しなかった。

以上、各トレンチより判明した S S 6 (石塁) 外側の推定範囲は全体的に地表下に広く展開することはなく、ほぼ視認できる範囲が S S 6 (石塁) の範囲と捉えてもよい。

④ その他

Tr 1 からは中世の銭貨が出土している。北側から中世の遺物が出土していることは山宮浅間神社遺跡の範囲を考える上で参考となるが、平成年間の道造成の際に選拝所内から持ち込まれた土砂の中に混入していたとも考えられるため慎重に判断したい。

Tr 2 では一部に落ち込みが確認されたが、平成 25 年度に 25-Tr 2 を設定し調査した結果、周囲には自然地形が広がっており、落ち込みは自然の起伏によるものと判明した。

(3) 選拝所南側境内地

対象となるトレンチは Tr 6 ~ Tr 45 までの 40 箇所である。トレンチは選拝所から北側の鳥居までの比較的平坦な地形面に対しては参道の左右に東西方向に 33 箇所設定し、南側の鳥居までの間には斜面上の平坦地に 1 箇所、斜面に 3 箇所、南側の平坦地に 2 箇所設定した。トレンチは選拝所南側の遺構の有無を確認するため全域に万遍なく設置した。また、選拝所のある高台の傾斜地にも 1 箇所トレンチを設定し、斜面の堆積状況を確認した。

境内地は参道の左右に沿うように細長くなっている。東側はやや高くなっており、住宅や道路となっている。選拝所から比高差約12mの階段参道を20m程度下ると比較的平坦な地形が広がっている。そこから45m程度南側に籠屋があり、籠屋南側の広場を抜けると50m程度の参道が続いた先に鳥居があり、幅員約5mの道路に接している。選拝所下から鳥居までは南西方向に緩やかに傾斜し、6m程度の高低差となっている。参道は道路を横切り比較的平坦な道となつて約100m南側の鳥居に達するまで続くが、この参道の東側は30mの距離で5m程度上昇する急傾斜地となつており、参道はその裾に沿うように設置されている。

遺構は対象地全体に点在しているが、明確に遺構と判断できないものも多い。今回はその中で遺構と判断できるもの及びその可能性が高いものを取り上げた。Tr7で参道の縁石と排水溝、Tr11で集石遺構、Tr24から落込遺構、Tr28・32・35・36・38にかけては土塁状の遺構、Tr39・41・42にかけて道路状の遺構が確認され、また、選拝所斜面のTr45からは階段状の遺構が発見された。他には自然流路が確認できたトレンチもあった。

境内地全域からは表土層から地盤層にかけての各層から土師器が数多く出土しているが、北側の鳥居より南側では徐々にその数を減らし、南側のTr44・45では江戸時代の陶磁器類が出土している。

以下、各遺構について列記する。

① SS7 (図19)

選拝所のある高台の傾斜地に設置したTr45で、石を積みあげた遺構が発見された。

石積は0.2~0.5m程度の溶岩で構成される。溶岩には人為的に加工した様子は見られないが、等高線に沿っているため水平面から見ると段状に見える。1段ごとの幅は0.2~0.6m以上、段差も0.1~0.2mと異なっているが、途中で石がなくなる場所があり、南側では全く石が確認できない。

対象地は傾斜地であり石が崩落している可能性は十分にありえる。従つて石が元の位置を留めていないということも考えられるが、構成する石は安定しており、あまり移動していないと思われる。自然石を等高線に沿って並べたように見え、傾斜地の土砂の崩落防止を目的として等高線に沿って石を積み上げたものと考えられることができる。

SS7が段状に見えるため階段である可能性はあるが、北側延長上の25-Tr5-1では関連する遺構は確認できていない。SS7は周辺にも広がると考えられるため、SS7の性格については現時点では断言できない。

② SA1 (図20・21・22・23・24)

籠屋南側参道の東側に設置したTr28・32・35・36・38にかけて土塁状の遺構が発見された。立体的な形状として最も遺存状態が確認できるのはTr28であり、Tr38ではSA1の東西幅が確認できた。その他のトレンチでは一部が確認できるのみであり、南北の境界は確認できない。いずれのトレンチからもSA1内からは遺物は出土していない。

Tr28からはトレンチの西側から確認され、基底部の幅約3m、上部の幅1.5m、長さ

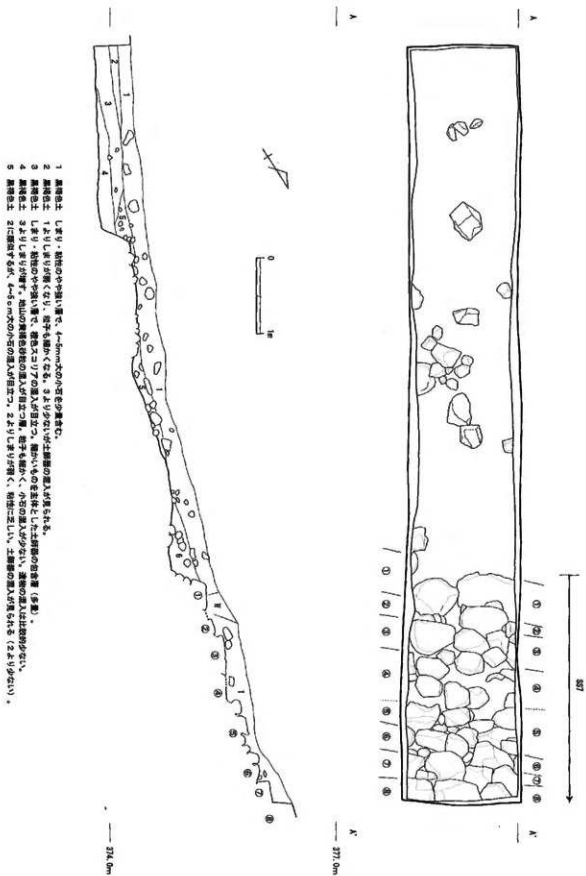


図 19 SS7 実測図 (Tr45 実測図)

1.5mのSA1が良好な状態で発見された。SA1は断面から6段の版築構造によって形成されている。版築に使われた土には富士山起源の橙色スコリアを含む砂質土の割合が高い。南南東～北北西に向かって延長していることが確認できる。それより北側のTr24からは確認できていない。また、他にこのトレンチからはSA1の東側で北壁に接するように径0.5mの落ち込みが1基発見されている。

Tr32からはトレンチの東側からSA1の西半分程度が発見されている。基底部の幅約2m、上部の幅1m、長さ1.5mで確認され、版築状に堆積していることが分かるがTr28ほど明確ではない。Tr28よりも若干東向きに方向を変え、南南東～北北西に向かって延長している。また、他にこのトレンチからはSA1西側の北壁沿いから幅0.8m程度の硬化面が発見されている。

Tr35からはトレンチの西側からSA1の東端が発見されている。基底部の幅約1m、上部の幅0.5m、長さ1.5mで確認され、6層の版築構造をしていることが、Tr32と同様にTr28ほど明確ではない。Tr28と類似する角度で、南南東～北北西に向かって延長している。また、他にこのトレンチからはSA1の東側から径0.3m程度の落ち込みが3基発見されている。

Tr36からはトレンチの東側からSA1と思われる硬化面が発見されている。硬化面の東側に溶岩礫が点在していたため、遺構の可能性を考えSA1の構造を把握するための掘削は行っていない。硬化範囲は幅0.6mから1m程度で屈曲しながら南南東～北北西に向かって伸びているが、主軸を確認することは困難である。

Tr38からは中央から東側にかけてSA1が発見され、南壁に沿って設置したサブトレンチの断面からSA1の東西幅が確認できた。SA1は5層の黒色土上に構築されており、基底部の東西幅は約4.7m、SA1の高さは最大0.8mである。他のトレンチと同様版築構造で構築されていることが確認できる。

SA1の高さは基底部の幅と比較すると低いように思われる。SA1が崩落しているか意図的に破壊されたことも考えられる。基底部の版築土は約45度で立ち上がっており、この延長上が頂部と考えると高さは2.5～3m程度となる。

SA1の南南東～北北西に向かって延長しておりその角度はTr28とほぼ同じである。各トレンチで確認されている部分を繋げて全体像を想定すると、東西幅約5m、南北の延長は約30mに及び、ほぼ直線状に南南東から北北西方向に伸びその延長線上には籠屋と遥拝所がある。明確な直線を描くというよりも等高線に沿った位置に配置されていると考えられる。

また、その延長上に当たるTr24からはSA1の痕跡が確認できず、SA1が確認されたトレンチの左右に配置されたトレンチからはSA1と断定できる痕跡が確認できない。SA1が屈折するのか、参道の造成に伴い破壊されたのか、あるいはそもそも存在しなかったのか、その判断は現時点ではできない。

SA1の性格は不明であるが、区画施設や猪土手の可能性も考えられる。

③ SF1 (図 25・26・27)

南北の鳥居間の参道東側の斜面上に設置した Tr39・41・42 にかけて発見された。斜面中間ほどの等高線に沿うように伸びている。

Tr39 ではトレンチ東側から幅 2.4m 程度の平坦地が確認でき、一部は硬化面となっている。トレンチの東端は斜面に接し、西側は参道側に向けて傾斜し緩やかになる辺りには転石であろう礫が集中している。礫群の表面には土師器が点在していた。

Tr41 のトレンチ東側では地山の大型溶岩を境とした東側に、約 1m の幅で地山層である砂質の細かい礫層が硬化していることが確認できる。Tr39 と同様にトレンチの東端は斜面に接し、西側は参道側に向けて傾斜し緩やかになる辺りには転石であろう礫が集中している。礫群には石臼の破片が混入していた。

Tr42 は中間の平坦面を含め東側の斜面上から西側の傾斜面までの範囲を調査した。トレンチの中央東側から平坦面が発見されている。幅は 4m 程度で西側は地山の溶岩礫を境とし、東側は斜面の崖を境としている。平坦面の中央には幅 1m 程度の硬化面があり、東側 2m、西側 1m ほどは地山の礫や大小の転石が点在する。特に東側は地山の溶岩礫が露出しており通行には困難であると思われる。平坦面西側の溶岩礫から西側の傾斜には 2m 程度の範囲に転石が点在しその西側では転石はあまり確認できない。

各トレンチで確認されている部分を繋げて全体像を想定すると、東西幅約 1~2m、南北の延長は約 30m に及び、ほぼ直線状に南南東から北北西方向に延び、その延長線上には龍屋と選擇所がある。明確な直線を描くというよりも等高線に沿った位置に配置されていると考えられ、北側は直進し南側は等高線に沿って東方向に向きを変えほぼ南に延長して東側にある現在の道路面と交差すると考えられる。

各トレンチで確認された硬化面は限定的であり、遺物は表層に数点確認されているのみである。神社へ向かう参道であるのか、それとも地元で使われていた山道であるのか、その性格は不明である。

④ SS8・SD1 (図 28)

Tr7 で龍屋から選擇所に向かう現在の参道の縁石が発見された。地表には縁石が表出しておりその存在は確認されていたが、今回の調査でその構造を伺うことができた。

トレンチ内の東端から SS8 が確認されている。長さ 0.3~0.45m、幅 0.1~0.2m、厚さが 0.5m にも及ぶ溶岩を長方形に加工し面取りした石で、崩落により位置がずれているものもあるが参道に沿って南西から北東に 4 個分並んでいる。SS8 の脇には排水施設であろう溝が掘られ、深さ 0.2m、幅 0.3~0.8m で現代の硬貨を含む砂利層が覆っている。

この SS8 は附編に述べる昭和初期の参道改修に伴い設置されたものと考えられる。北側断面ではさらにその 0.05m 下から 2 層の造成層が確認でき、参道階段の下は何度か造成が行われていたことがわかる。トレンチ中央では礫群が見られるが参道改修に伴うものと思われる。

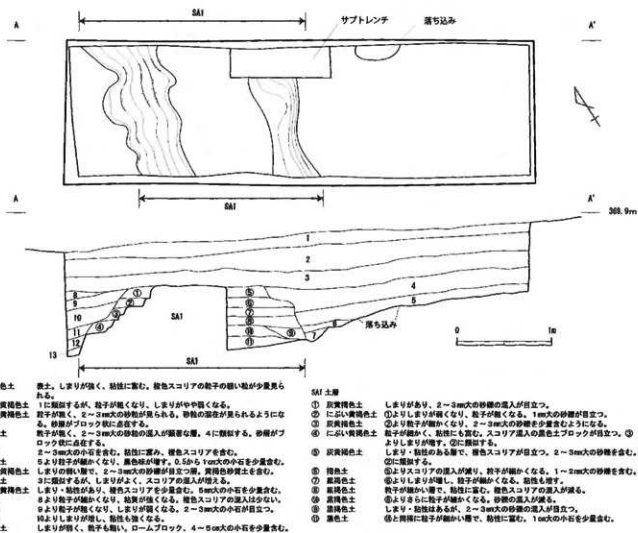


図 20 SA 1 実測図 (Tr28 実測図)

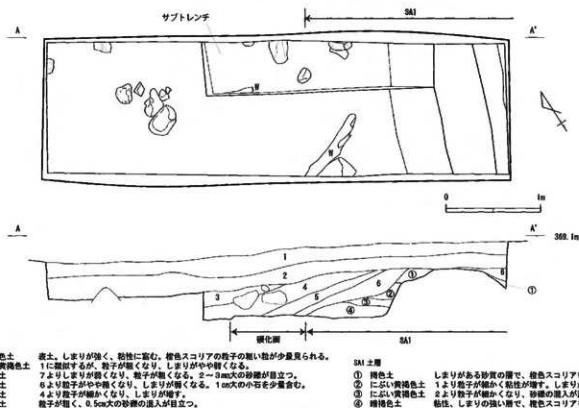
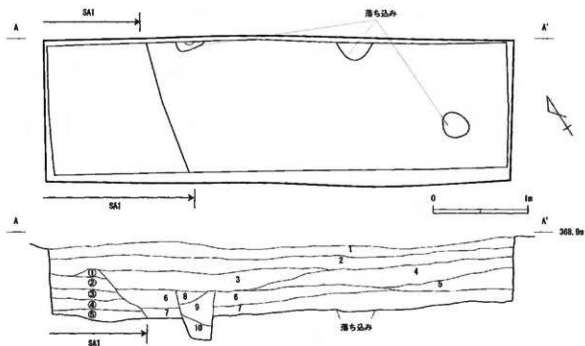


図 21 SA 1 実測図 (Tr32 実測図)

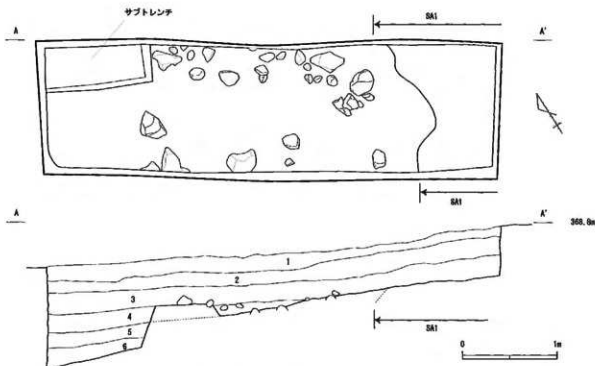


- 1 褐色土 しまりがある砂質の層で、褐色スコリアを少量含む。
 2 にぶい黄褐色土 1より粒子が細かく粘性が弱す。しまりが強い。
 3 褐色土 粘性、しまりの強い層で、褐色スコリアを少量含む。
 4 褐色土 粒子が細く、褐色スコリアの混入が目立つ。0.5~1cm次の小石を含む。
 5 褐色土 粒子が細く、0.5~1cm次の小石の混入が目立つ。しまりは強い。
 6 黄褐色土 粒子が細く、3.5cm次の砂粒の混入が目立つ。
 7 にぶい黄褐色土 2より粒子が細くなり、砂粒の混入が見える。
 8 褐色土 粒子が細かく、しまりの弱い層。2~3mm次の砂粒を少量含む。
 9 褐色土 8より更にしまりが弱くなり、粒子が粗くなる。
 10 黒褐色土 9より粒子は細くなり、しまりは更に弱くなる。黄褐色砂粒を含む。

SA1土層

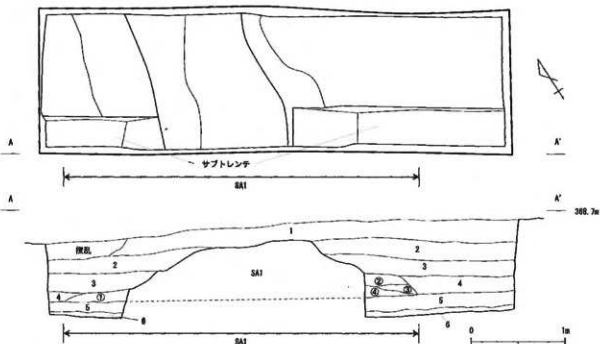
- ① 灰黄褐色土 しまりの強い層で、粒子が細かく、2~3mm次の砂粒を少量含む。
 ② 灰黄褐色土 ①よりややしまりが弱くなり、粒子が細くなる。
 ③ にぶい黄褐色土 ②よりしまりが増し、褐色スコリアの混入が目立つようになる。0.5~1cm次の小石を含む。
 ④ 黒褐色土 ③よりしまりが更に増し、粒子が細くなる。2~3mm次の砂粒を含む。
 ⑤ 黒褐色土 しまりがあり、砂質土をブロック状に含む。地山の黄褐色土を含む。

図 22 SA 1 実測図 (Tr35 実測図)



- 1 黄土 1~2cm次の小石の混入が比較的多い(西側ほど多くなる)。
 2 灰黄褐色土 表土。しまりが強く、粘性に富む。褐色スコリアの粒子の粗い物が少量見られる。
 3 にぶい黄褐色土 2に類似するが、粒子が粗くなり、しまりがやや弱くなる。
 4 にぶい黄褐色土 粒子が粗く、2~3mm次の砂粒が見られる。砂粒の混入が見られるようになる。砂層がブロック状に点在する。
 5 黒褐色土 しまり、粘性はやや強い。4~5mm次の小石の混入が目立つ。
 6 黒褐色土 4より粒子は細かく、しまりは弱くなる。黄褐色ローム粒子の混入が見られる。

図 23 SA 1 実測図 (Tr36 実測図)

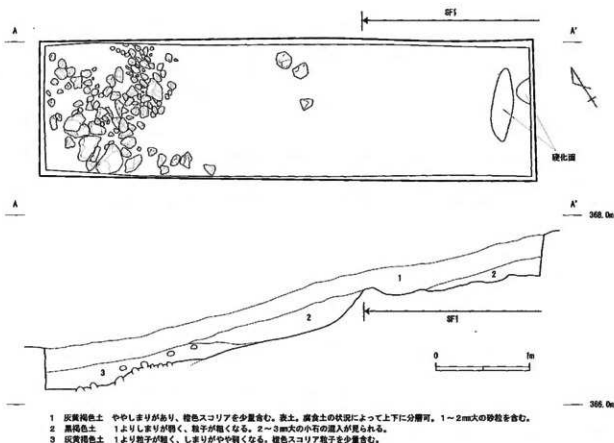


- 1 灰黄褐色土 表土。しまりが強く、粘柱に富む。褐色スコリアの粗い粒が少量見られる。
- 2 にぶい黄褐色土 1に類似するが、粒子が粗くなり、しまりがやや弱くなる。
- 3 にぶい黄褐色土 粒子が粗く、2〜3mm次の砂粒が見られる。砂粒の混入が見られるようになる。粘柱がブロック状に点状する。しまり、粘性が有り、粒子も細かい。褐色スコリア・白色スコリアを含む。
- 4 黒色土 4よりやや粒子が粗くなり、しまりが弱くなる。褐色スコリアの混入が目立つ。
- 5 黒色土 黄褐色砂質層の厚砂層。褐色スコリア粒の混入が目立つ層で、しまりがより増す。

SA1土層

- ① 黒褐色土 ②に類似するが、砂粒の混入が更に増え、粒子が粗くなる。
- ② 灰黄褐色土 しまりが強く、1〜2mm次の砂の混入が目立つ。粒子は粗い。
- ③ 黄褐色土 粒子が細かく、細かい褐色スコリアを少量含む。
- ④ 黒褐色土 しまりの強く、2〜3mm次の砂を多く含む。粒子は粗く、粘性は乏しい。

図 24 SA1 実測図 (Tr38 実測図)



- 1 灰黄褐色土 ややしみが有り、褐色スコリアを少量含む。表土。腐食土の状況によって上下に分離可。1〜2mm次の砂粒を含む。
- 2 黒褐色土 1よりしまりが弱く、粒子が粗くなる。2〜3mm次の小石の混入が見られる。
- 3 灰黄褐色土 1より粒子が粗く、しまりがやや弱くなる。褐色スコリア粒子を少量含む。

図 25 SF1 実測図 (Tr39 実測図)

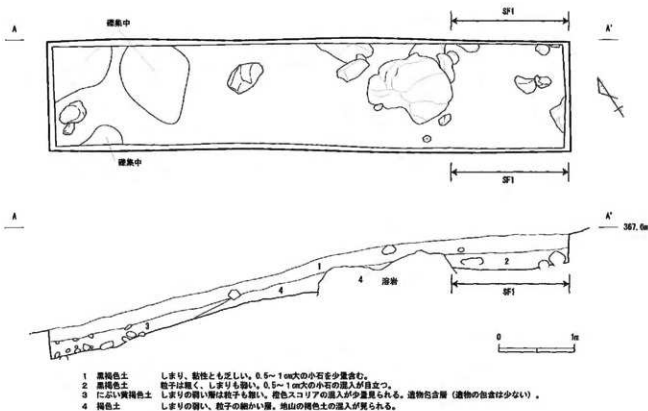


図 26 SF 1 実測図 (Tr41 実測図)

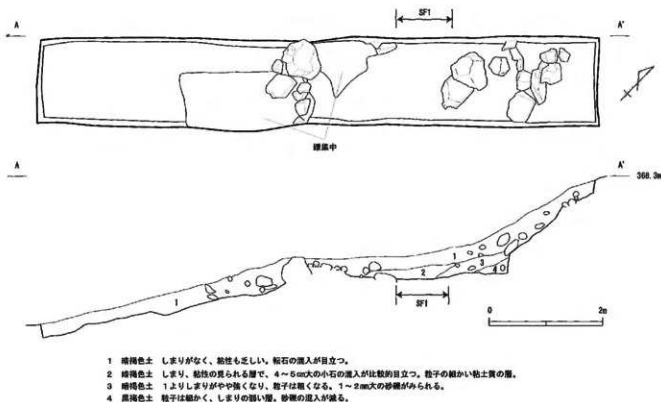


図 27 SF 1 実測図 (Tr42 実測図)

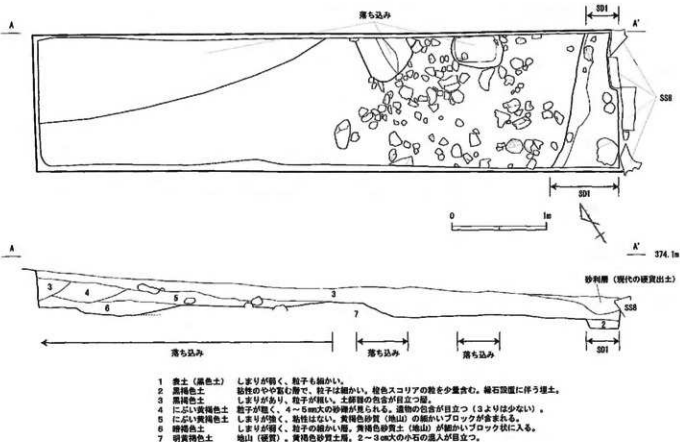


図 28 SS8・SD1実測図 (Tr7実測図)

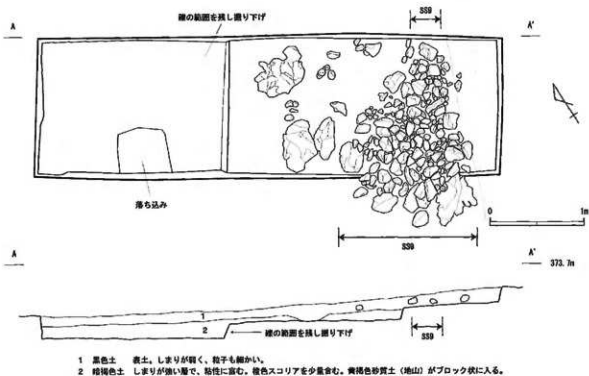


図 29 SS9実測図 (Tr11実測図)

また、トレンチの東側では幅3m以上、地表下0.4mに及ぶ地山の掘削が見られる。Tr45のSS7に伴うものとも考えられる。限られた範囲での調査のため、その性格は明確には判断できない。

⑤ SS9 (図29)

Tr11のトレンチ東側で石が集中した遺構が発見された。南側の3分の1程度はトレンチ外に及んでいる。最大長2m、最大幅1.5mで南北方向を底辺に北東側を頂点とする三角形を呈する。数cmの小さな礫から0.5m以上の大型礫までの溶岩礫で構成されている。最高0.4mの山状に積み上げられ、その半分程度は地表に露呈し地下部分は表土層に覆われている。

礫の間に挟まるように土師器の大型破片が点在している。また、遺構を覆う表土層には数多くの土師器の破片が含まれている。

遺構の構築年代の想定は土師器を基に考えることもできるが、この付近の表土層には土師器の混入が多い。また、このトレンチの北側は、平成になってから選拝所北側の樹木を伐採する際に選拝所に入りし重機や車両の反転地として利用されていたようであり、通行を妨げる転石をまとめて置いたものとも考えられる。

SS9の性格については、遺構の可能性を考えて礫の取り上げ等を行っていないため、現時点での正確な判断はできない。

⑥ SD2 (図30)

Tr24のトレンチ西側端から溝状の遺構が発見された。トレンチ内における長さ1.5m、幅約0.5m、深さ0.35mで南西～北東方向に直線状になっていることが確認できる。その東側には径0.3mと0.45mの落ち込みが2基発見されている。

SD2は西側の参道脇に位置し主軸の方向も同様であることから、参道の造成に伴う遺構と捉えることができる。トレンチ内からは18世紀の遺物の出土がみられるが、出土状況から遺構の構築年代を判断することは難しい。

⑦ その他

対象地のその他のトレンチから遺構が否か判断が難しい痕跡が発見されている。表土層から確認面までの層に土師器が混入しているが、遺物によって土層年代を特定することは難しい。以下、各トレンチの概要を列記するがその性格・年代の特定は難しい状況である。

Tr6でトレンチ中央から幅2.6m、深さ0.4mの落ち込み1基と、トレンチ東端から隣地との境を区画する現代の石積が発見された。Tr9でトレンチ東側から幅約2mの落ち込み1基と、西側の一部から硬化面が発見された。Tr10でトレンチ東側から幅1.2m、深さ0.3mの落ち込み1基と、西側の一部から硬化面が発見された。Tr12でトレンチ東西間に及ぶ幅5.5m程度の硬化面が発見され、西側ではその上部に風倒木痕があった。Tr13でトレンチ全面から硬化面が発見された。Tr14でトレンチ東側から径0.3mの落ち込みが1基、中央付近から西側にかけて径0.25～0.5mの落ち込みが10基発見された。

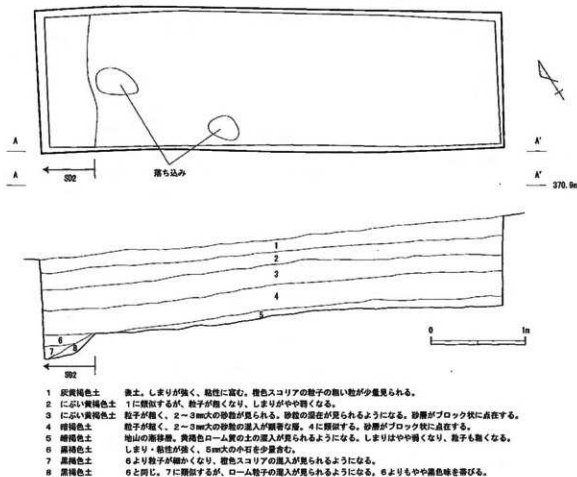


図 30 SD2実測図 (Tr24 実測図)

Tr16 ではトレンチ中央付近に礫の集中地点が発見され、幅 0.6m で 0.05~0.25m 程度の自然礫の溶岩が南北 1.5m の長さで連なっていた。Tr17 ではトレンチ中央から東端にかけて幅 4.2m で厚さ 0.5m 以上の砂利層の堆積が発見され自然流路となっていたことが判明し、トレンチ全体からは径 0.25~2m 以上にもなる落ち込みが 6 基発見された。Tr18 でトレンチ東端から中央にかけて幅約 3m、厚さ 0.3m の砂利層の堆積が発見され自然流路となっていたことが判明し、トレンチ全体から径 0.2~0.4m 程度の落ち込みが 9 基発見された。Tr19 及び Tr20 では流入した土の堆積が厚く地盤層まで掘り込んでいないが、遺構の確認はできなかった。Tr21 で地盤層の黄褐色ローム層上の一部で硬化面が発見された。Tr22 でトレンチ西端から中央にかけて幅約 2.3m、厚さ 0.3m の砂利層の堆積が発見され自然流路となっていたことが判明し、その下層には幅約 0.3m の硬化面が発見された。Tr23 でトレンチ東側から径 0.3~0.7m 程度の落ち込みが 3 基発見された。Tr25 でトレンチ南側から径 0.2~0.4m 程度の落ち込み 3 基と、他にトレンチ東側で砂層を掘り込む落ち込みが確認されているが残存状況はよくない。Tr26 で径 0.2~0.35m 程度の落ち込み 3 基と、トレンチ東南から硬化面が発見された。Tr27 でトレンチ東側から径 0.3~0.5m 程度の落ち込み 3 基と礫の集中地点が発見され、0.1~0.2m 程度の自然礫の溶岩が

幅約0.3mで0.8mの長さで南北に連なっていた。Tr29でトレンチ西端から径0.7mの落ち込み1基と、トレンチ中央東側から硬化面が発見された。Tr30でトレンチ東端から中央にかけて幅約2.2m、厚さ0.2mの砂利層の堆積が発見され自然流路となっていたことが判明し、トレンチ南側からは径0.3mと0.8mの落ち込み2基が発見された。Tr31でトレンチ東側から幅0.8m、深さ0.45mの落ち込み1基、西側から径0.45mの落ち込み2基が発見された。Tr33はトレンチの西側から南東角にかけて落ち込み、北東部は長さ1.7m、幅約1mの高まり状となって残存していた。Tr34はトレンチの西側から北東角にかけて落ち込み、南東部は長さ1.1m、幅約1mの高まり状となって残存していた。Tr37でトレンチ全体から径0.15～0.4m程度の落ち込み5基、東南部から径1.3mの落ち込み1基が発見された。Tr40でトレンチ北東部から径1mの落ち込み1基、中央部北壁沿いから径1.1mの落ち込み1基が発見された。Tr43でトレンチ南東部から径1.2mの落ち込み1基、南西部から径0.25～0.3mの落ち込み2基が発見された。Tr44ではトレンチ南側の中央から東側にかけて0.1～0.5m程度の自然礫が点在していた。Tr43とTr44は近世の遺物が主体となって出土しており、これより北側の丘陵部に位置するトレンチとは遺物の出土状況が時期的に異なっている。

3 遺物

今回の山宮浅間神社遺跡の調査は、史跡の調査の制約上、遺構の掘削や立割りを行っていないため、出土遺物は遺構に伴っていない。従って、出土遺物は厳密に遺構の年代を示すものではない。加えて、各トレンチで包含層が地表面よりあまり深くない位置で薄い堆積で確認されており、詳細な層位毎での取り上げを行っていないことから、出土遺物から層位や遺構を規定するのは甚だ困難である。しかしながら、出土遺物の帰属年代が、遺構の上限年代に近い時期や包含層の時期を示唆していることは疑う余地はない。今回の調査ではトレンチ出土資料だけでなく表探資料にも空間様相や年代を示唆し得る資料が採集されているため、トレンチと表探資料で地区設定を行い、資料を報告し、山宮浅間神社遺跡の空間構造を遺物から推定する。出土遺物の地区設定区分は以下のとおりである。

- ・ 遥拝所周辺地区出土遺物 (Tr 1～5・25- Tr 1～4・石墨周辺表探・遥拝所表探)
- ・ 遥拝所前出土遺物 (25- Tr 5-1・5-2)
- ・ 斜面地区出土遺物 (Tr 45・階段東側表探)
- ・ A地区平坦面出土遺物 (Tr 6～18・龍屋表探)
- ・ B地区平坦面出土遺物 (Tr 19～38)
- ・ C地区平坦面出土遺物 (Tr 39～44)

なお、遺物の型式・年代観は以下を参考にした。

・土師器

渡井英著 2009「附編1 浅間大社遺跡における土師器皿の変遷(予察)」『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所

伊藤裕偉 1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と壺そのデザイン』東海考古学フォーラム

・山茶碗

岡本直久 2005「山茶碗編年の現状について」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 シンポジウム『中世窯業の諸相』実行委員会

・国産陶器

愛知県史編纂委員会 2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』

愛知県史編纂委員会 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常清系』

・貿易陶磁器

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号

・近世陶磁器

愛知県史編纂委員会 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常清系』

(財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2006『江戸時代のやきもの一生産と流通一』

(1) 遷葬所周辺地区出土遺物 (図 31)

25- Tr 1

1 は口縁部破片で、器壁が非常に薄く、皿の可能性もある。内外面は回転ナデで、橙色系の胎土である。2 も橙色系の胎土で、見込みは回転ナデの凹凸が明瞭で、中央部に向かって薄くなる。底部は段状になる。3 は底部回転糸切り後、縁辺部をナデている。4 は体部が丸く立ち上がる。5 は底部回転糸切り後、縁辺部ナデで、内面に回転ナデ後の粘土が残っている。4・5 は小型なため、皿の可能性もある。6 は底部にスノコ痕が見え、7 は扁平な皿型で、体部は丸く、底部回転糸切り後ナデているが、ナデた粘土が厚く残っており処理が粗雑である。

25- Tr 2

土師器・陶磁器の出土が小片しか無く、陶器 1 点のみ図化した。8 は常滑産の壺の頸部で、外面に細い沈線が 2 条巡っており、三筋壺と思われる。外面にはオリーブ色の灰釉が全面的にかかり、内面は横ナデと指頭痕が見られる。12 世紀中頃から後半の 2 型式のものであろうか。

Tr 1

少量の土師器と砥石、銭貨が出土している。9 は底部から段状になり体部が立ち上がるタイプで、内外面の磨減が激しく調整は不明である。10 は底部破片で、底部回転糸切り、内面は回転ナデで段状になる。11 は砥石で、正面に内湾する砥面を上下にもち、上部側の砥面には長さ 2.5cm、幅 0.9cm、深さ 0.2cm の凹面をもつ手持ち砥石である。右側面は敲打による成形後、平滑に研ぎ、裏面は鯉による切り出し痕が残り、左側面は球状の自然面が残っている。12 は北宋銭の紹聖元寶で、初鑄年代は 1094 年である。13 は明治 23 年の菊五銭白銅貨である。

25- Tr 3

土師器の出土は無く陶磁器 14 のみの出土であった。瀬戸・美濃産腰銘碗で、内面長石釉、外面鉄釉で畳付は釉剥ぎ、18 世紀前半から中頃の所産のものである。

25- Tr 4

土師器が 3 点のみ出土した。15 は口縁部破片だが、下部が垂直ぎみに降りているため、柱状高台の可能性もある。内外面回転ナデで稜が明確に見え、丁寧な作りである。

石罫周辺表探

石罫周辺から採集されたが、石罫のどの辺りから採集したか正確な位置は不明である。16 は橙色系の胎土で摩擦が激しく、内面の回転ナデと底部回転糸切り痕がわずかに見える。

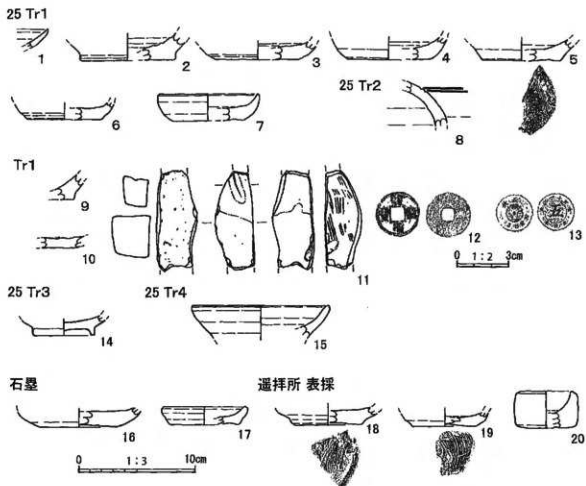


図 31 出土遺物 (1)

底部器壁は厚い。17 は扁平な皿型で、体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。底部は糸切り後ナデか。

遥拝所表探

遥拝所周辺で採集されたが、詳細な地点は不明である。18 は底部回転糸切り後縁辺部をナデているが、ナデた土が盛り上がり幅広の高台状を呈している。19 も底部回転糸切り後縁辺部を部分的にナデている。底径が小さく皿型の可能性もある。20 は小型の皿だが、口径・底径ともに小さく今回の調査では他に出土が無い。口縁部を面取りしており、内面は指頭痕と横ナデが見え、外面は横ナデと底部から縦方向のナデがわずかに見え、底部もナデと考えられる。14 世紀末から 15 世紀初頭の時期に帰属すると考えられる。

遥拝所周辺地区では、12 世紀代の常滑産三筋壺が出土している。柱状高台坏もわずかに出土が見られ、この地区の利用開始は 12 世紀代中頃にまで遡ると考えられる。県の調査でも西側の石壘から青磁碗 A 類が出土しており、时期的に船飾はない。一方、下限年代につ

いては、17のような小型の皿も採集されており、14世紀末から15世紀初頭頃まで利用は続いていたと考えられる。それ以降の時期の資料は18世紀代の資料が1点出土しており、中世半ばでの断絶を経て、近世にも一時期利用された可能性が考えられる。

(2) 選擇所前地区出土遺物 (図32)

25- Tr 5-1

遺物の出土量が非常に多いトレンチであり、そのほとんどが土師器片である。21は立ち上がりが浅く、柱状高台の口縁部破片と考えられる。内外面ともナデの凹凸が明瞭である。22は黒色系のしっかりした胎土、焼成である。口縁先端は尖って終わる。23は非常に薄手の器壁で、磨滅のため調整は不明瞭である。24と25は、底部に低い段があってから体部が立ち上がるタイプである。24は23と同様のしっかりした黒色系の胎土・焼成で、底部回転糸切り、内外面回転ナデが明瞭である。25はにぶい橙色系の胎土だが、良好な胎土、焼成である。内外面回転ナデ、底部回転糸切りである。26は橙色系の胎土で、磨滅が激しい。底部から体部がそのまま丸く立ち上がるが、その角度は緩く皿の可能性もある。27は体部と底部の境を強くナデることにより底部下端が外に伸びた形になっており、底部も厚くなっている。底部回転糸切りで、見込みは回転ナデの凹凸が著しい。28は扁平の皿で、口径6.2cm、器高1.2cmである。口縁部の立ち上がりは低く、端部は面取りしており、見込み中心部が盛り上がる。底部は回転糸切りで右回転と思われるが、ナデているのか不明瞭である。口縁部にところどころ油煙が付着していることから燈明皿として使用されたと考えられる。29も皿で、器高1.3cmだが、底部が薄いため、28より口縁部が立ち上がっている印象を受ける。30は東遺産の山茶碗小皿で、高台は低く断面三角の貼り付け高台で、口縁部は丸くおさまる。自然釉がわずかにかかる。I期-2、12世紀中頃から後半のものである。31は青磁碗で、内面の口縁部下に沈線が巡り、片影りの飛雲文が施される。A-4類、帰属時期は12世紀後半から13世紀初頭である。銭は寛永通寶で、いずれも新寛永で、32は裏面に「文」字がある。33の鑄銭地は京都の七条河原銭座と考えられる。34~36は和釘で、34は頭巻釘の中型品、35は折釘か。36は両端を欠いていて形状は不明である。他に白色系の胎土の土師器片や19世紀中頃以降の瀬戸・美濃製品の染付碗片が出土している。

25- Tr 5-2

遺物の出土が最も多いトレンチである。37~39は柱状高台の脚部で、底端部が八の字に外反するものである。40~46は口縁部破片で、42・43は口縁端部を面取りしている。45・46は白色系の胎土で、体部が丸く、46は器壁が薄く小型品であろう。47は橙色系の胎土で、48は底部右回転糸切後縁辺部ナデ、49は器壁に回転ナデ後の土が残る。50は見込みに右回転の渦巻き状の回転ナデ痕が観察できる。51は底部にスノコ痕がある。52は見込み中央部に向かって器壁が薄くなる。53は見込みに回転ナデの工具痕が見える。54も底部回転糸切後縁辺部ナデで、ナデた土が残る。55~62は皿型で、55・56は底部が厚く、57・58は体部

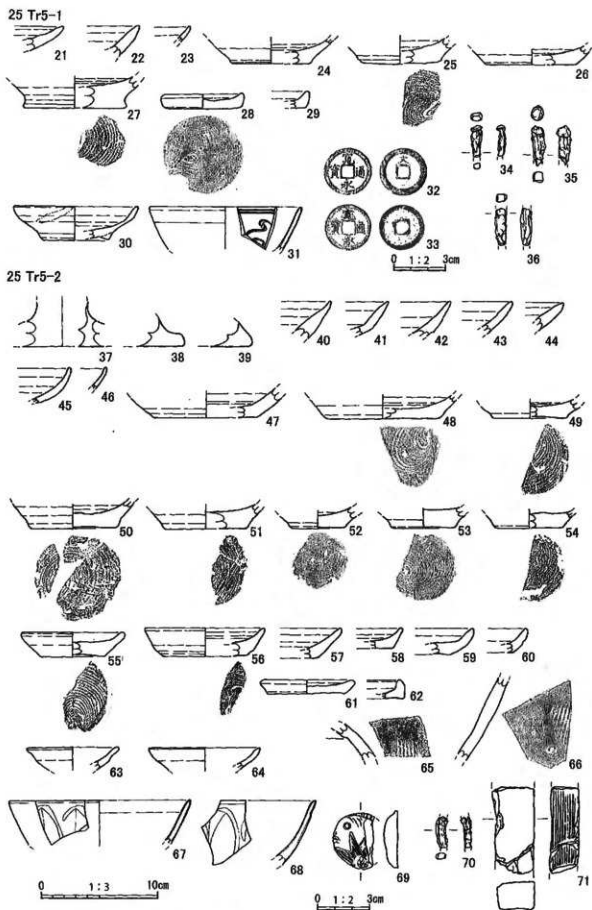


图 32 出土遗物 (2)

が直線的に立ち上がり、59・60は丸く立ち上がる。61は扁平で口径も小さく、62は口縁部が面取りされており、25-5-1でも両者と同様の成形のものが出土している。63・64は麗美産の山茶碗で、63は口縁部が外に開き気味の小碗で内面に自然釉がかかる。Ⅱb型式、12世紀末から13世紀初頭のものである。64は小皿で、13世紀中頃の3b型式と考えられる。65・66は常滑産甕の破片で、外面に細い縦線の押印が施され、オリブ灰色の自然釉が筋状に流れる。2型式であろうか。67・68は龍泉窯系青磁碗で、67は外面にわずかに鎊の稜が見える片彫りの鎊蓮弁文を有する。口縁部に焼けた痕跡と思われる気泡が目立つ。13世紀中頃から14世紀前半のB1類である。68は鎊が無い蓮弁文で、口縁がわずかに外反する。貫入が多く入っている。B2類で、14世紀末から15世紀初頭。69は泥面子で、鐶の絵柄を型押ししたもので、にぶい赤褐色で焼成は良好である。胴部の4分の1を欠き、長さ2.9cm、幅は欠損値で2.1cm、厚さ0.7cm、重さ4.6gである。浅間大社遺跡の湧玉池からも同例のものが出土している。近世のものと考えられる。70の和釘は、鎊が著しく両端も欠き大きさは不明である。71の砥石は3面を欠き、残る右側面には鋸による切り出し痕が残る。正面に緩く湾曲した広い砥面をもつことから、幅広の置き砥石と考えられる。図化したもの以外では、東遠産と思われる山茶碗片や瀬戸・美濃産の17世紀前半の志野碗片の出土が見られる。

この地区では、12世紀代の柱状高台土師器や常滑産の甕が出土しているが、その後の時期も、山茶碗や青磁碗、61のコースター型の土師器皿、62のように口縁部を面取りした土師器など13世紀から15世紀代の年代に入ると考えられる土器・陶磁器も一定量出土しており、12世紀から15世紀頃まで継続的に使用されていたと考えられる。出土遺物は膨大で、2つのトレンチで今回の出土量の4割以上を占めており、そのほとんどが土師器である。出土土師器は坏・皿・柱状高台などで、器形もバリエーションに富む。陶磁器類も碗・皿類の供膳具が中心で、甕などの貯蔵具が見られる。油煙が付着した土師器皿も出土しており、燈明皿としての使用が考えられ、大量の供膳具の出土と合わせ、本地区が祭祀儀礼の場所であったことを推定させる。出土遺物は、儀礼後にそのまま廃棄したと考えられ、貯蔵具も酒や油の運搬用として供膳具と組み合わせた祭祀に伴った使用を想起させるものである。すなわち、本調査区出土の大量の柱状高台皿や山茶碗・青磁碗A類等の供膳具及び常滑等の貯蔵具は、12世紀代には祭祀儀礼が当地で行われていたことを表象する遺物と考えられる。加えて、コースター型の土師器や青磁碗B類の出土などから、13～14世紀代にも祭祀儀礼が引き続き行われていたと考えられる。遺物の出土位置は、25-Tr5-1で西側、25-Tr5-2では東側で量が多くなっており、遺所中心部への廃棄は避け周辺へ廃棄したと推測される。その後の時期の出土は、19世紀代の染付碗に留まっており、16世紀以降の使用は限定的だと考えられ、祭祀行為の形態変化か、祭祀行為の執行が行われなくなった可能性が高い。

(3) 斜面地区出土遺物 (図 33・34)

Tr 45

遺物の出土量が非常に多く、ほとんどが土師器である。72～82は柱状高台で、79は胴部、80～82は口縁部破片と考えられる。72は脚部が八の字状に開くが面取りして丸くおさまる。底部にスノコ痕が見られる。73は橙色系の胎土で摩耗が激しい。74は底径が小さく脚高も低い小型品である。75は底端部が屈曲して外反し、底部回転糸切り後端部をナデており尖っている。76は底端部への回転ナデによる面取りが明確である。体部内に巻き上げ時の絞り目の隙間が観察できる。77は左巻きの粘土紐の巻き上げが見えるが、紐の接合処理が甘いため繁ぎ目や器面にひび割れが目立つ。摩耗も激しい。78は脚部が直線的に下がる。見込みに右回転の渦巻き状の回転ナデ、底部に回転糸切りとスノコ痕が観察できる。79も見込みに右回転の渦巻き状の回転ナデが認められる。胴部も回転ナデ調整だが、ナデた土が器面に残る。80は丸く立ち上がり口縁端部が僅かに内側に肥厚する。81は外反気味に立ち上がり口縁部が上方向に屈曲する。82は器壁が厚く端部が丸くおさまる。83～87は坏の口縁部破片である。83は口縁端部が尖って終わる。84は口縁部内面に回転ナデの工具痕が見える。85は口縁部外面が窄まって外反状をなす。86は白色系の胎土で器壁が薄い。輪花状をなすかもしれない。87は外面に回転ナデの工具痕が沈線として数条見え、内面も回転ナデの凹凸が明瞭である。88からは底部破片で、88は見込み中央部が若干盛り上がる。回転糸切り後、底端部縁辺を体部方向にナデている。89の内面には回転ナデ調整の痕跡が細かく観察できるが、外面は摩耗が激しく調整は判然としないが、底部にスノコ痕が若干見える。90は橙色系の胎土で、内面に回転ナデによる凹凸が明瞭である。口縁部は尖って終わる。91は底部から1段上がって体部が立ち上がる。見込みに右回転渦巻き状の回転ナデ、底部に回転糸切り後縁辺部ナデが確認できる。92は90と同様に体部が丸く立ち上がる。93・94は底径が小さい小型品で、93も91と同じく見込みに右回転渦巻き状の回転ナデ、底部に回転糸切り後縁辺部ナデ調整が確認できるが、両面ともにナデた土が残っている。96は底部と体部との境が明瞭である。見込み・底部の同位置に指頭痕が見え、乾燥が不完全な状態で指でつまんだと考えられる。97は底部回転糸切り後縁辺部を体部へナデている。98は見込みに向かって薄くなっていく。底部にスノコ痕あり。99は糸切り後の糸の痕跡が体部にまで及んでいる。小型のため皿の可能性もある。100は褐色系の胎土で、磨減が激しい。101は底部右回転糸切り後縁辺部を底部中央へ若干ナデている。102は体部にナデの土が残る。103は内面に回転ナデの凹凸が明瞭である。104は褐色系の胎土で、磨減が激しい。回転ナデと斜め方向のナデが部分的に観察できる。105も褐色系の胎土で脆く、器面は摩耗している。底部から段になって口縁部が立ち上がり、段部にナデた土が塊として残る。底部回転糸切り痕とスノコ痕が確認できる。106は胎土・焼成ともしっかりしており、口縁部は尖り気味に終わる。107は、回転糸切りの糸の痕跡が体部にまで届いている。その痕跡の一部を消すように、体部から底部縁辺部へナデを施している。器面に黒斑も見られる。108は底部回転糸切り後に縁辺部をナデた土が残っている。109は口縁部が丸くおさまるタイプ。

Tr45

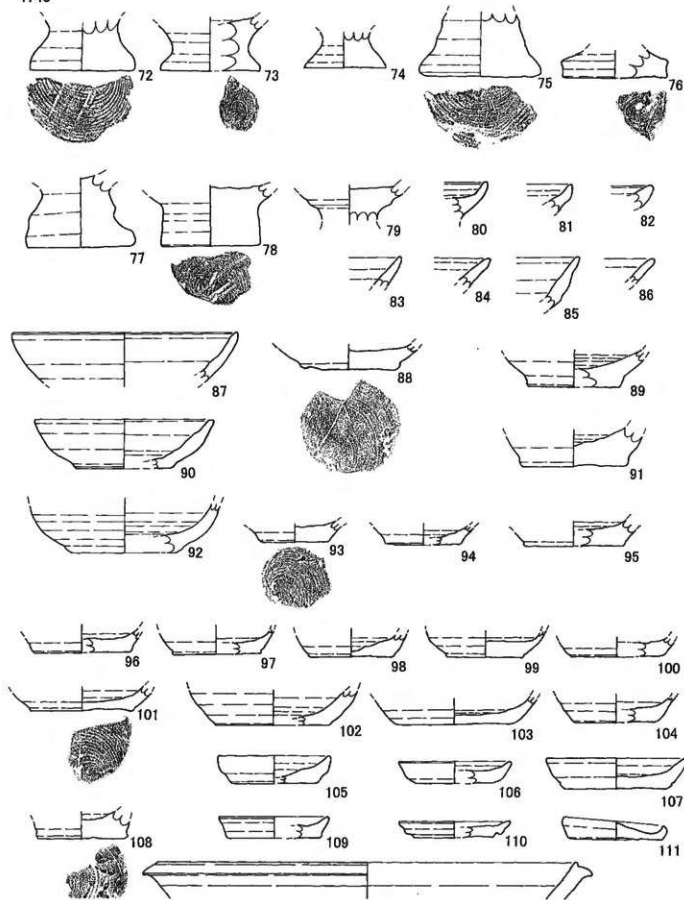


图 33 出土遺物 (3)

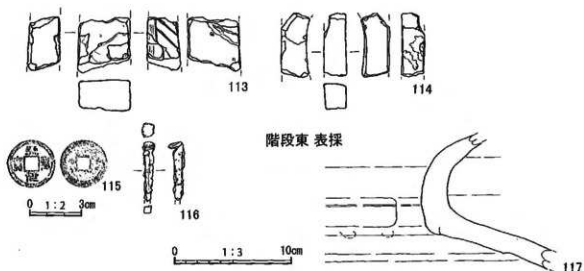


図 34 出土遺物（４）

110は橙色系の胎土で、口縁の立ち上がりが低い。底部回転糸切りの糸が体部にまで及び段状を呈す。111は見込み中心部が盛り上がり、体部が屈曲して口縁部は丸くおさまり油煙が付着している。77～79と108は集石上から出土したため、土が堆積するのに時間がかり露出していた期間が長期にわたるためか、器面の摩耗が激しい。土師器は他に、白色の胎土の破片も出土した。112は常滑産の鉢で、口縁端部に沈線が巡り口唇部が外方向に伸びており、受け口を作り出している。内外面に降灰がかかる。9型式、15世紀前半のものと考えられる。他にも常滑産の甕片も出土している。113と114は砥石で、113は正面に平坦な砥面をもち、左側面・裏面に緩く内湾する砥面をもつ手持ち砥石である。右側面には鋸痕が目立ち、その表面を研磨して平滑な面を作り出している。今回の調査で出土した砥石で唯一の石灰岩製である。114は正面に強く内湾する砥面と、右側面に平坦な砥面をもつ手持ち砥石である。左側面と裏面には敲打による調整後、軽い研磨で平滑な面を作り出している。凝灰岩製である。115は北宋銭の天聖元寶で、初鑄年代は1021年である。116の和釘は、頭巻釘の中型品である。

階段東側表探

117は遥拝所への階段の東側で表探された資料である。常滑産甕の頸部で口縁部は欠損している。器厚が厚く、頸部は高く立ち上がり大きく外反する。胎土は灰白色で、白色小礫を多く含んでいる。外面に厚く灰オリーブの自然軸と降灰がかかる。調整は横ナデで、肩部の軸下に細縦線と斜線を組み合わせた押印がわずかに確認できる。内面はヘラか板ナデ調整で、粘土紐の積み上げ痕が明確に残り、指頭痕も見え、上部に軸が薄くかかる。1b型式の最古段階のもので、12世紀の第2四半期に帰属する。

本地区では、主に Tr 45 出土資料が中心だが、Tr 45 はその出土量が特筆される。長さが他のトレンチの2倍のため、出土量が多くなるのは当然だが、全体の出土量の13%を超え、そのほとんどが土師器である。これらは、25-Tr 5-1・5-2 周辺が祭祀儀礼の場としての使用が想起され、その下に位置することから、祭祀儀礼後に斜面地に廃棄された資料群と考えられる。25-Tr 5-1・5-2 の出土資料と合わせて頻繁な祭祀儀礼の執行やその規模を想像させるものである。一方で、土師器の出土量に比して、陶磁器の出土が常滑片2点のみに留まるのは不可解である。また、本地区で、近世の遺物の出土が見られない点に関しては、選葬所の近世における祭祀儀礼の執行が行われなかったか、祭祀儀礼の形態の変化を裏付けていると考えられる。階段東側表探の117は、平坦地での土地利用、特に中世の早い段階での利用開始、若しくは選葬所での祭祀儀礼、あるいは土地利用の開始が12世紀の前半にまで遡る可能性を示唆する資料である。

(4) A地区平坦面出土遺物 (図35~37)

Tr 6

118~120は柱状高台、121~124は土師器皿で、118は底部が外反する形状、119は小型品で、120は体部破片である。121・122は見込みに回転ナデによって段が作られ、122は底部に粘土の繋ぎ目が見える。123は見込みに回転ナデの工具痕が、124は底部にスノコ痕が見られる。125は白磁碗で、端反碗の体部と思われ、一部が釉剥ぎされている。12世紀後半の帰属と考えられる。126は瀬戸産の片口碗の底部で、18世紀後半のものである。内面に長石釉がかかり、削り出し高台で釉剥ぎ。見込みにトチン痕が見える。127は和釘で、錆が著しく両端を欠く。

Tr 7

128は柱状高台で欠損しているが、底部が八の字状に外反すると思われる。内外面とも回転ナデ調整であるが、外面器壁にナデた土が残っており粗雑な作りである。129・130は口縁部片で、129は直線的だが、130はやや外反する。132は白色系の胎土である。133は橙色の胎土で脆く磨滅が激しい。135は皿型で、糸切後の指頭痕が見られ底部が盛り上がる。

Tr 8

136・137は口縁部破片で、137は黒色系の胎土である。139は底部糸切り後縁辺部をナデている。138は見込みのナデが、141は外面のナデが明瞭である。いずれも底部右回転糸切りである。140は外面にナデた土が残っている。142は黒色系の胎土で焼成もよく、作りがしっかりしている印象を受ける。143は底部が高台状をなしており、見込みは渦巻き状のナデが見られる。144は器高が低く皿型を呈する。底部糸切り後に体部下半から底部に向かって斜め方向のナデが施されている。外面の一部に黒斑が見られる。

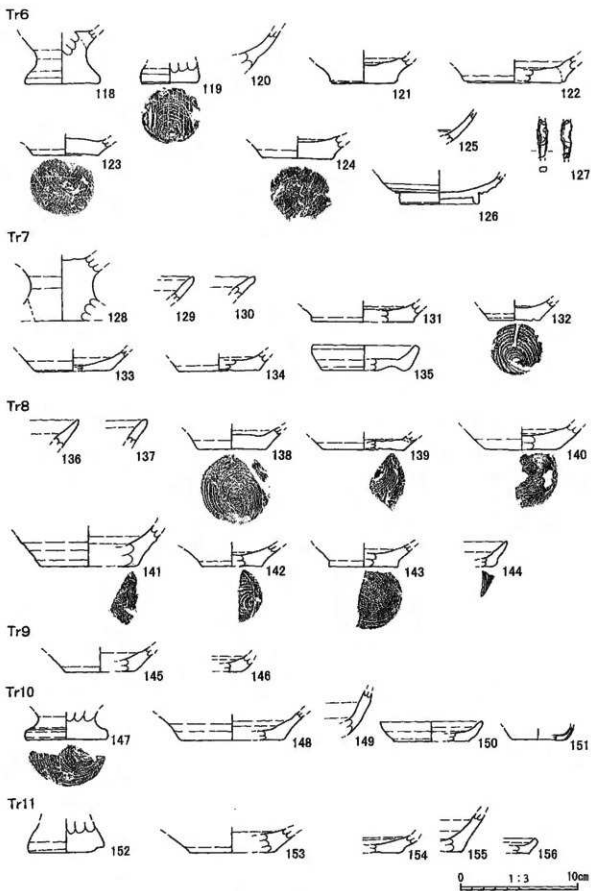


图 35 出土遺物 (5)

Tr 9

遺物の出土量がごく僅かで、すべて土師器であり、ほとんどが小破片である。145・146ともに器面の磨滅が激しい。146は小型の皿か。橙色系の胎土である。

Tr 10

147は底部が八の字状に広がる柱状高台で、外面回転ナデ、底部回転糸切りで、底端部が面取りされている。148は白色系の胎土で、内面ナデ調整で見込みに段がある。149は胴部破片で、内面の屈曲が明確である。150は皿であり、体部が丸く立ち上がる。151は白磁皿で、底部が軸剥ぎされている。IX類で13世紀後半のものである。

Tr 11

出土遺物はすべて土師器である。152は柱状高台で、底部にスノコ痕と思われる段がある。153は器壁が厚い。154は底部回転糸切り後にナデているのが指頭痕が見られる。体部には回転ナデ後の土が残っており粗雑である。155は橙色系の胎土で、体部が急激に立ち上がる。156は小型の皿であり、器高が低く器壁も薄く、口縁部は尖らせて終わる。

Tr 12

157は外面に回転ナデの後縦方向のナデを施している。158は橙色系の胎土で磨滅が激しいが、見込みに段が見え、体部が丸く立ち上がる。159～162は内面の回転ナデの痕跡が明瞭に見える。160は見込み中央が盛り上がる。底部は回転糸切り後縁辺部をナデで、回転方向は右である。161は体部下部にナデもしくは糸切りの工具痕が見え段状になっている。162は体部が丸く立ち上がる。皿と思われる。163は皿で、底部回転糸切り後縁辺部をナデている。164は山茶碗で、白色系の胎土で器壁が薄く、口縁部が外反する。東濃産の丸石3窯式に比定され、12世紀末～13世紀初頭のものと考えられる。

Tr 13

出土資料は全て土師器で、出土量は比較的少ない。165は底部が八の字状に広がる柱状高台で、底端部が面取りされている。外面回転ナデ、底部回転糸切りである。166も柱状高台で底部が八の字状に広がるが、端部が内側に面取りされ逆台形状を成している。底部は回転糸切りで糸切りの痕跡が端部にも及んでいる。底部にスノコ痕が見られる。167は口縁内面がやや厚くなり、口縁端部を尖らせて仕上げている。166と168は外面が底部に段があり高台状を成す。166は丸く立ち上がる。168は器壁が厚い。169は底部が薄く皿と思われる。回転糸切り後底部を少しナデている。

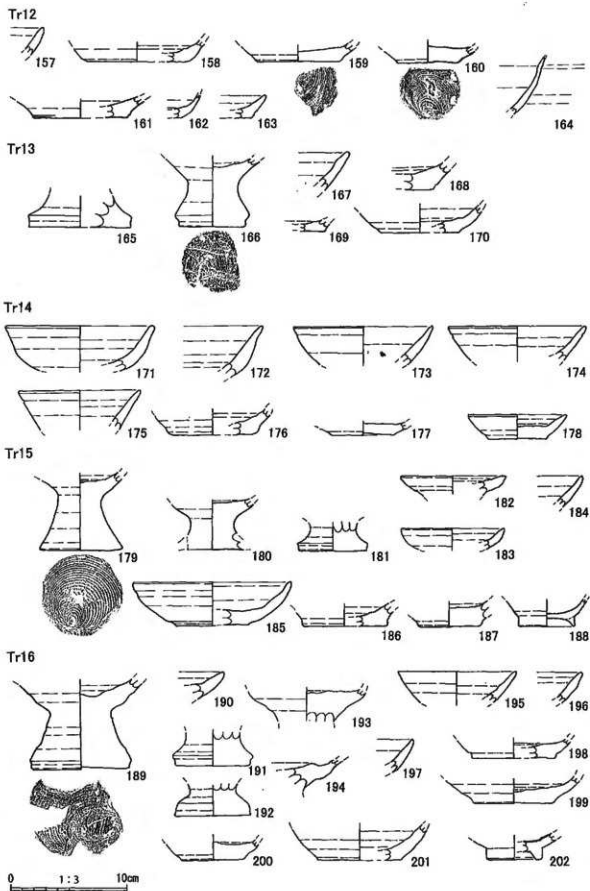


图 36 出土遗物 (6)

Tr 14

資料の出土はかなり多いが、その殆どが土師器である。171～175は口縁部破片で、171・172は器壁が厚く、174・175は直線的に立ち上がり、口縁部下の外面にナデの痕跡である沈線が巡る。171・174は橙色系の胎土、175は白色系の胎土である。176は底部回転糸切り後に縁辺部をナデている。胴部に糸切りの痕跡が伸びる。177は見込みに渦巻き状の回転ナデが見える。底部は回転糸切り後ナデていると思われるが粗雑である。178は皿で、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りであるが、磨滅が激しい。土師器以外に、産地不明の灰釉陶器と考えられる小片と常滑産陶器の小片が出土している。

Tr 15

179～181は柱状高台である。179は高台部が長く、底部は面取りせず八の字状にそのまま広がっており、底部も回転糸切り後未処理である。見込みは渦巻き状の回転ナデが巡る。右回転である。180は高台部が短い、179と同様に底部が八の字状に広がって終わると考えられる。内面も同様に渦巻き状の回転ナデが巡るが、底部は摩耗しており回転糸切り痕は確認できない。181は底部が八の字状に広がるが、底端部が面取りされ、底部も回転糸切り後に縁辺部をナデている。胴部は回転ナデだが、底端部の面取り後、上方から下方に斜め方向に一部ナデている。182も下部が屈曲していることから、柱状高台であると推定される。内外面とも回転ナデだが、外面に一部斜め方向のナデがある。184は坏の口縁部で、口縁端部を尖らせて仕上げている。185は底部が段状で低い高台を成す。回転ナデによる凹凸が明瞭である。186は底部の回転糸切り痕が明瞭で、見込みが薄くなる形状である。187は底部回転糸切りで、右回転である。見込みに回転ナデの工具痕が見られる。188は山茶碗の小碗で、猿投産の3型式で11世紀末～12世紀前半に比定される。胎土は灰白色系で、内面に灰オリーブの釉がかかり、気泡が目立つ。貼り付け高台である。

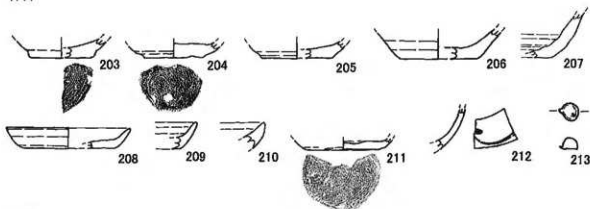
Tr 16

189～194は柱状高台で、190は立ち上がりが低い柱状高台の口縁部であると考えられ、193・194は胴部である。189・191・192の脚部破片はいずれも底端部を面取りするタイプで、189は坏部の見込み中央が盛り上がり、右回転である。194は内面が一度下がって体部が立ち上がる。195は橙色系の胎土で、摩耗が激しい。196・197は内外面回転ナデで、196はナデた土が器面に残る。198・199は底部回転糸切り後縁辺部をナデている。200は皿型と思われ、見込み中央が盛り上がる。201は内外面の回転ナデ痕が明瞭である。202は同安窯系に比定される青磁碗で、内面施釉、底部は露胎で、削り出し高台である。12世紀後半の帰属である。

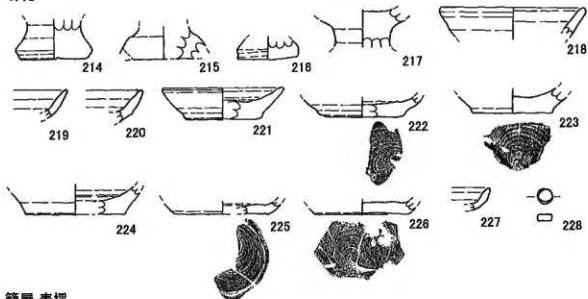
Tr 17

203は底部が高台状に段になっている。204は内面が渦巻き状の回転ナデで、右回転であ

Tr17



Tr18



籠屋 表探

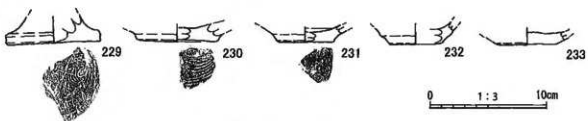


図 37 出土遺物 (7)

る。底部回転糸切り後縁辺部をナデている。206・207 は深めの坏であり、207 は成形・調整時の凹凸が明瞭である。208～211 は皿であるが、210 は器壁が厚いため、柱状高台の口縁部の可能性もある。209 は底部が厚いタイプである。211 は底部回転糸切り後底部の縁辺部や中央一部をナデている。212 は肥前産の染付碗で 18 世紀のものである。213 は鉛玉で、鈎張りが残る半球状の鉄砲玉の不完全品で、径 1.3cm、縦幅 0.9cm で、重さは 6.5g を量る。山宮浅間神社周辺の富士山麓には山間と耕作地境に害獣駆除のための猪土手が多く築かれ

ている。それともなう狩猟の産物と考えられる。他には17世紀の美濃産の笠原鉢の小片と東遠産もしくは駿河産の山茶碗の壺と思われる小片も出土しているが時期は不明である。

Tr 18

214～217は柱状高台で、216は底部にスノコ痕が見える。220は体部が強く屈曲する。225～227は皿である。221は底部が厚く小型で扁平な小坏である。223・225・226は底部回転糸切り後底部の縁辺部をナデている。222は見込みに右回転の渦巻き状の回転ナデが見える。228は珪質砂岩製の石製円板で、表裏は丁寧に研かれ、周囲は打ち欠いた後に研いて円形に作られている。非常に小型で径1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.5gである。おはじき様であるが、用途は不明である。

籠屋表探

229は柱状高台で、底部が八の字に広がるが端部を面取りしている。褐色系の胎土で焼成とも非常にしっかりした印象である。230～233は坏の底部である。230・231は底部がやや段状を呈し立ち上がるタイプで、231・232は底径が小さく、232は底部が厚い。233は体部が丸く立ち上がるタイプである。

本地区の出土遺物は、柱状高台皿や、125の白磁碗、202の青磁碗、188等の山茶碗など12世紀中頃まで遡れる資料が出土しており、13世紀前半までの資料が見られる。その後、17～19世紀代の陶磁器も数点ずつであるが散見されており、近世にも一定程度の利用は想定される。本地区では、西側のTr 14・17・18での遺物の出土が目立っている。これらのトレンチでは流路と思われる遺構が検出されているが、その関連で出土が多くなっているのであろうか。一方、Tr 9・13・15等東側のトレンチでは出土が少なくなっており、明確な遺構も確認されていないことから、近世以前においては現在の参道より西側の地区の土地利用が活発であったことが、遺物からは指摘できる。また、Tr 7での出土量の多さやTr 8での一定量の出土量は、Tr 45と同じく、選葬所での儀礼で使用した遺物が斜面地やその下部への廃棄による流れ込みであると推定される。

(5) B地区平坦面出土遺物 (図38～40)

Tr 19

出土遺物は土師器2点と陶磁器、砥石のみの出土で、土師器・陶磁器は小片のため染付碗のみしか図化を行えなかった。234は18世紀前半から中頃に比定される瀬戸・美濃産の染付碗で、口縁部端反である。235の砥石は凝灰岩質で、正面に緩く外反する平坦な砥面をもつ手持ち砥石である。右側面から裏面は、鑿による削り出し痕をつぶすように上部側に湾曲する砥面が残る。左側面は球状に自然面が残る。図化できなかった出土資料には、瀬美産の壺片が1点だけあり、他は肥前磁器、瀬戸・美濃産の雪平鍋などほとんどが18～19世紀を中心とする近世のものである。

Tr 20

本トレンチの出土遺物は土師器2点と陶磁器3点のみであった。236は柱状高台で、底部回転糸切り後底部の縁辺部をナデ仕上げ、237は皿で、底部回転糸切りだが、縁辺部のナデは、摩耗のため不明である。陶磁器は東遠産もしくは駿河産と思われる山茶碗の壺、17世紀前半の志野系碗、19世紀前半から中頃の瀬戸・美濃産の徳利と考えられる小片が出土している。

Tr 21

238～240は土師器で、いずれも底部回転糸切り後底部の縁辺部をナデているが、238はナデた土が底部に付着しており、239はスノコ痕が見える。241は瀬美産の甕で、外面に軸がかり押印、内面は横ナデと指頭痕が見られる。12世紀末から13世紀初頭のもので、鳴森窯の製品と考えられる。図示した以外の資料では、12世紀中頃と考えられる常滑の甕片と、18世紀後半の太白手の瀬戸・美濃産染付碗が出土した。

Tr 22

242は柱状高台で、口縁部が短い。外面に回転ナデの工具痕が見える。243は底部回転糸切り後底部の縁辺部ナデ。244は器壁が薄く皿と考えられる。245は常滑産の甕で、内面に自然軸が僅かにかかり、外面に押印が見られる。時期は12世紀後半であろうか。246は瀬戸・美濃産の尾呂茶碗で、17世紀末から18世紀初頭のものである。図化したもの以外の陶磁器も18世紀のものがほとんどである。

Tr 23

出土遺物が少なく、図化できるものが2点しかなかった。247は橙色系の土師器口縁部で、内外面回転ナデ。248は底部に回転ナデが見られる。陶磁器は、12世紀代と考えられる常滑産の甕片と、瀬美産の甕片、17世紀末から18世紀初頭の肥前産京焼風陶器碗、18世紀の瀬戸・美濃産片口鉢の破片が出土したがいずれも小片のため図化していない。

Tr 24

249は口径が小さい小皿の口縁部破片である。口縁端部も回転ナデ調整の痕跡が見えるし、しっかりした胎土・焼成である。250・251は底部破片であり、251は底部回転糸切り後底部の縁辺部ナデが見える。他に常滑産甕の小片と、18世紀前半に比定される瀬戸産鉄軸徳利が出土している。

Tr 25

252は底部にスノコ痕が付き、段状に立ち上がっている。253・255は体部が丸く立ち上がる。256はコースター型の皿である。257は常滑産の広口壺の口縁部で、外面に灰軸がかり

かり、内面に降灰が見られる。口縁端部と考えられる部分に沈線があるため、2型式か3型式と考えられ、12世紀中葉から後半の所産であろう。258も常滑製品で甕の体部破片で、内面には粘土帯を積み上げた際の指頭痕が見られ、外面に押印が見られる。他に渥美産の甕の底部破片が出土した。

Tr 26

遺物は土師器のみ出土した。259・260とも見込みが盛り上がるタイプであるが、259は底部回転糸切り後、ナデを行ったのか数箇箇所が部分的に盛り上がっている。260は外面に、ナデ後の土が体部上方に持ち上がっている。器壁が薄いタイプである。

Tr 27

261は柱状高台であり、底端部を面取りするタイプである。262は内面回転ナデだが、ナデた土が残り、粗雑な作りの印象を受ける。263は底径が小さく、器壁も薄い。264は渥美産の甕。粘土紐の接合部にあたり、内面に接合痕が明瞭に残り、沈線が1条巡っている。外面にも接合の際の土が見え、斜め方向のハケと押印を施す。12世紀末から13世紀初頭の所産である。265は瀬戸産の播鉢で、赤津村産と考えられる。内外面に錆釉がかかり、内面に播目が6条見える。口縁部の内側への折り返しが薄い登窯第7小期のタイプで、18世紀中頃の時期のものである。図化したもの以外に、常滑産と渥美産の甕の出土があり、近世瀬戸・美濃産の陶器碗なども出土している。砥石 266は凝灰岩質で、正面に緩く内湾する砥面をもち、他3面は鏝によって切り出した後、鑿で調整されている。今回の出土砥石の中で横口面（縦長）を砥面とする唯一の資料で、手持ちには不向きである。

Tr 28

267・269は内外面回転ナデの後、口縁端部を面取りしている。268は橙色系の胎土で、内面は回転ナデだが、外面や底部は摩耗して調整不明である。269は皿である。270は青磁碗で、内面は劃面文で、A類、12世紀後半のものである。青磁碗 271は同安窯系で、外面は細い縦の櫛描文、内面には櫛描によるジグザグ状の点描文と篋状工具による片切りが見られる。高台に近い部分は露胎である。12世紀後半の時期である。272は渥美産の甕の口縁部で、頭部が短く外反する。内面施釉で、外面も一部に釉が見える。内外面横ナデと指頭痕が見える。2b型式で、12世紀末から13世紀初頭の所産である。図化した遺物以外にも渥美産の甕や常滑産の甕や鉢と思われる遺物も出土しているが、いずれも12世紀後半から13世紀初頭の時期に収まると考えられる。

Tr 29

遺物の出土量が少なく、土師器は小片ばかりで図化できるものは無かった。273は青磁碗小碗で、直口口縁で端部は輪花であり、内面口縁部直下に圓線が一条巡る。無文ではある

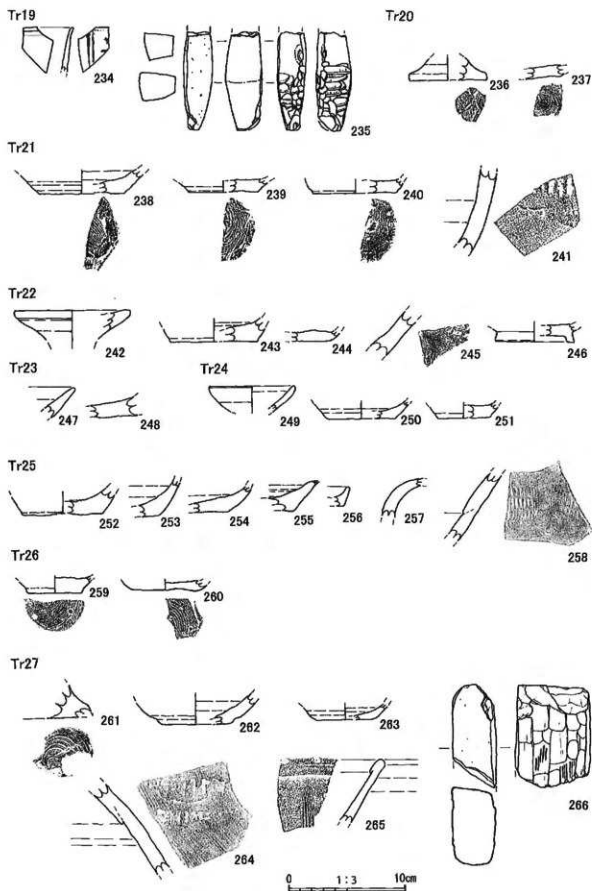


图 38 出土遺物 (8)

がA類と考えられ、12世紀後半に比定される。274は常滑産の甕で、外面に縦線の押印が、内面は横ナデと指頭痕が見える。

Tr 30

土師器のみの出土である。275は内外面回転ナデ調整で、口縁部は丸くおさまる。276・277・279は底部回転糸切り後縁辺部をナデているが、ナデた土が底部に付着している。器形は、277～279は扁平の皿型だが、277は底径が広い。277は底径が小さく、直線的に口縁部が立ち上がる。

Tr 31

本トレンチ出土の土師器は小片ばかりで図化できる資料が無かった。出土した陶磁器類は全て常滑産である。281は鉢で、外面横ナデで器面に白色粒子が目立ち、内面に灰釉がかかる。1b型式、12世紀中頃のものと考えられる。282も鉢で、内面に降灰が目立つ。3型式と考えられ、12世紀後半のものである。

Tr 32

本トレンチ出土資料にも陶磁器類は無く、土師器も小片ばかりで、図化できるものは1点のみであった。282は底径が小さく、器高も低いコースター型で、見込み中央部に行くほど器壁が薄くなる。橙色系の胎土で、摩擦が激しく調整があまり確認できないが、底部断面に粘土の接合痕が見える。

Tr 33

283は口縁部破片で、内外面回転ナデである。284は、見込み中心部が薄くなるタイプで、底部灰端ナデの後、縁辺部を体部方向にナデている。285は山茶碗で、口縁部が外反しており、外面の稜と回転ナデが明瞭で、胎土は非常に緻密な白色系で、良質な印象を受ける。東濃産のものと考えられ、6型式併行の白土原1窯式で、13世紀前半のものと考えられる。陶磁器は他に、A-2か3類とB-1類の青磁碗と、常滑産甕の体部破片が出土している。和釘286は、頭部を欠くが、今回の調査で出土した釘では先端まで残っている唯一の資料である。

Tr 34

287は口唇部が内側に折り返すタイプで他にあまり例を見ない。289は胎土のしまりがよく、焼成がしっかりしている。290は見込みが中央部に向かって薄くなるタイプである。291～293は皿型だが、292と293は器高が低い扁平な皿型である。294は青磁碗A5類で、外面が細い縦の櫛描文、内面も櫛描文が一部見える。12世紀後半から13世紀初めの帰属である。295は、外面露胎、内面が灰釉で施釉されており重ね焼きの痕跡が見られる。295と297

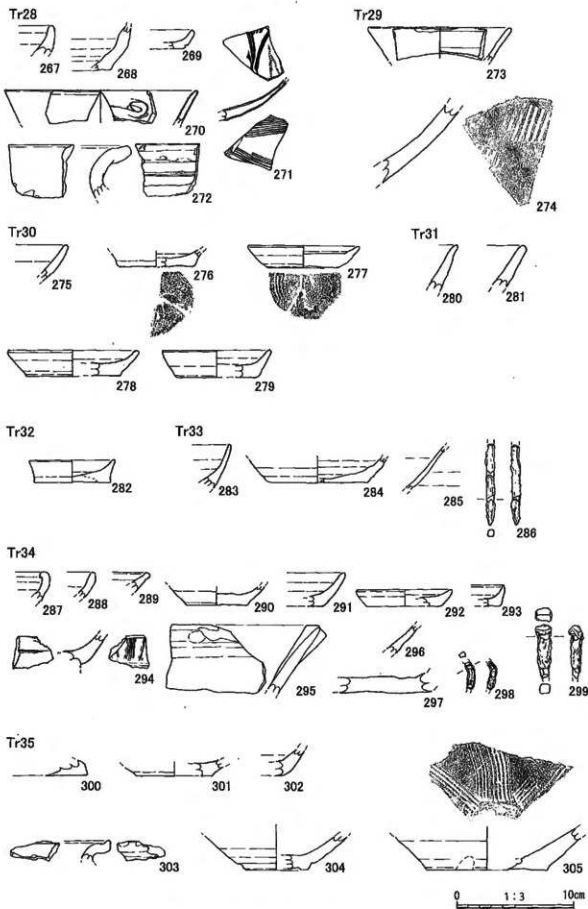


图 39 出土遺物 (9)

は常滑産の片口鉢で、いずれもⅡ類の6型式と考えられる。295は片口部で、外面は片口部横に指頭痕と横ナデで体部は縦方向のケズリ、内面は横ナデである。297は見込みを同心円状にナデている。13世紀後半の所産である。296は瀬戸産の後期Ⅲ型式の灰軸平碗で、15世紀前半の所産である。298・299は和釘で、298は小型品でねじれがみられる。299は頭巻釘の大型品である。

Tr 35

300は柱状高台の底部先端で、301は底部が高台状になって立ち上がるタイプの坏である。302は底部が厚く体部がそのまま立ち上がる。303は常滑産甕の口縁部で、口縁端部が上方に立ち上がり、内面に軸がかかる。4型式で、12世紀末から13世紀初頭のものである。304は瀬戸灰軸平碗で、内面施軸、外面は回転ヘラケズリであり、ヘラケズリ後に体部を直したのか、ナデの痕跡も見られる。底部も回転糸切り後ナデ、外面底部付近に指頭痕が見える。後期Ⅱ型式、14世紀末から15世紀初頭のものである。305は瀬戸産の大窯1か2期の摺鉢で、内面に10条の摺目、底部外面は回転糸切り後ナデ、外面底部付近に指頭痕が見える。使用が激しく見込み部は摺目が潰れてしまっている。図示した遺物以外には常滑産の鉢と思われる破片や渥美産の甕の破片も出土している。また、出土資料の中には被熱した痕跡がある土師器も出土している。

Tr 36

306は柱状高台である。脚部、内面は回転ナデである。307は底部回転糸切り後縁部をナデている。308は常滑産片口鉢Ⅰ類の1b型式で、12世紀前半のものである。309は渥美産の甕で、底部近くの鉢形との繋ぎ目と思われる段が見える。内面に軸がかかり、外面は押印が見える。13世紀初頭のもので推定される。310は口縁部が内側に折り返す南伊勢系土師器鍋で、12世紀末から13世紀初頭のもので考えられる。内外面横ナデ調整である。311は白磁皿で、口縁部が外反し軸をとる口剥皿で、13世紀後半から14世紀前半の所産である。312は磁石で、正面と左側面に緩く内湾する研面をもつ手持ち磁石である。右側面と裏面は、敲打による成形後に平滑に研かれている。他にはB1類に比定される青磁碗と常滑産の甕片が出土している。

Tr 37

313は口縁先端が尖るタイプで、内外面回転ナデである。316～318は扁平な皿型で、316は口縁部が内傾するタイプ、318は口縁部を面取りするタイプで、316・317は底部回転糸切り後縁部をナデている。314は見込み中央部が薄くなるタイプ、315は体部がそのまま立ち上がるタイプで、319は底部が高台状になる。320は南伊勢系土師器鍋で、Tr36出土のものと同様の12世紀末から13世紀初頭の帰属時期と考えられる。図化していないが、B1類と考えられる青磁碗片と17世紀前半の志野皿の小片も出土している。和釘 321・322

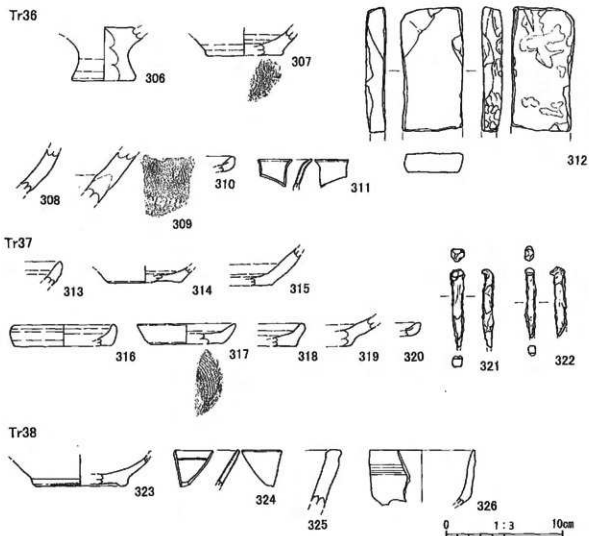


図40 出土遺物 (10)

とも頭巻釘の中型品である。

Tr 38

土師器の出土は少量で、図化できる資料が無かった。323は白磁碗で、高台は幅広で削り出し、露胎、曇付外面に細かい押圧がつく。IV類、12世紀後半のものである。324はA類の青磁碗で、口縁部内面に沈線が1条巡る。12世紀後半～13世紀初頭のものである。325は常滑産の片口鉢II類で、口縁部を面取りしており、外面は片口部横に指頭痕と横ナデ、体部は縦方向のケズリ、内面は横ナデである。326は錆軸の上に長石軸がかかる瀬戸・美濃産の腰錆碗で、18世紀後半の所産である。図化していないが、渥美産の甕・壺片も出土している。

本地区は、A地区に比べ、各トレンチからの遺物の出土量は概して少ない。しかしながら、こうした状況の中でも各トレンチで多寡が見られ、Tr 19～21・23・29・32等、東寄りのトレンチで遺物の出土量が少なくなっており、対して西側に位置するTr 34・37で多く、Tr 25・26でも一定程度の出土が認められる。これはA地区と同じく参道東側の土地利用は少なく、西側の地区が以前は主たる地区であったことが伺える。また、土壘と想定される遺構が検出されたTr 28・32周辺やその西側地区では中世の陶磁器の出土が多く見られており、土壘は12世紀後半ごろには設置されていたと推察できる。従って、その西側には土壘に取り囲まれた中世の土地利用が想起される。一方で、Tr 19～22・27では近世陶磁器の出土が目立っており、近世には土地利用が東側にシフトした可能性が高い。ただ全体的にB地区では、A地区や遷葬所等で数点しかなかった近世の資料が、陶磁器類を中心として一定量の出土が認められるのが特徴であり、近世における積極的な土地利用が推定される。

(6) C地区平坦面出土遺物 (図41・42)

Tr 39

327は底部が高台状になる器形で、底部回転糸切り後縁辺部ナデ。328は底部が厚いタイプ、329は扁平の皿型であろう。330は瀬美産の甕の頸部で、外面に釉がかかり、内面は粘土紐の貼り付け痕が見られる。2b型式、12世紀末から13世紀初頭の所産と考えられる。331は瀬戸産の盤類で、内外面灰釉を施しており、外面の一部が露胎である。後期IかII期のもので、14世紀後半から15世紀初頭のものである。332は瀬戸・美濃産灰釉小坏で17世紀中頃から後半のものである。内外面施釉。333は肥前産筒型碗で、18世紀末から19世紀のものである。図化した資料以外にも瀬美窯製品や常滑産の甕片も出土している。

Tr 40

図化できる資料は1点のみであった。334は橙色系の胎土で、内面に屈曲がある。瀬美産の鉢片も出土している。

Tr 41

土師器の出土は3点に留まる。335は、底部回転糸切り後縁辺部をナデしている。336は底部が薄く、皿型と思われる。337は瀬戸産の摺鉢で、内外面錆釉、大窯期のものと考えられる。338は粘板岩製の石板で、正面は条線が若干残るが、丁寧に研かれて使用面を作り出している。周囲を欠き、残存値は長さ3.7cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm、重さ3gである。他に常滑産の甕片も出土している。

Tr 42

出土土師器は少なく、図化できる土師器は無かった。339は同安窯系の青磁碗で、高台は兜巾状に削り出し、底部は露胎。外面に縦の細い構描文があり、高台にまで達している。

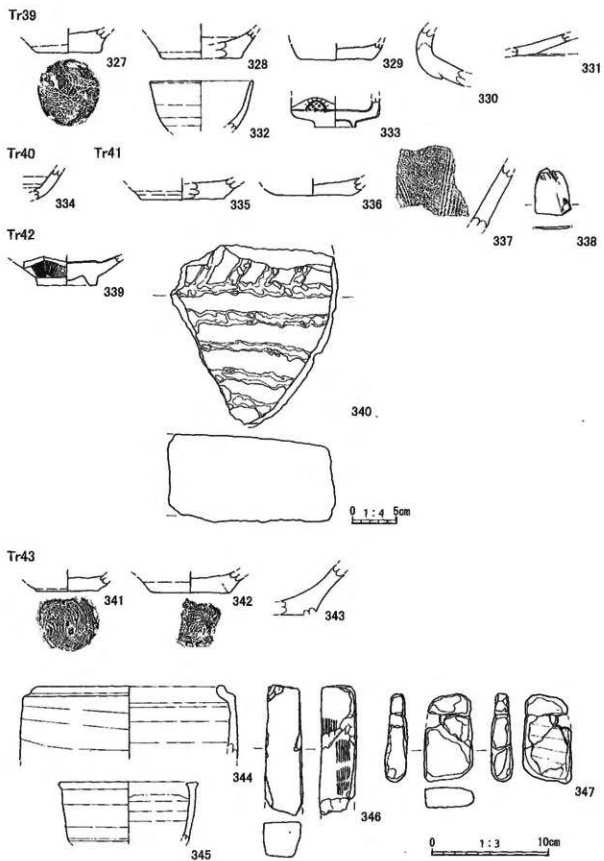


图 41 出土遺物 (11)

ころもある。見込みと体部との間に段がある。12世紀中頃から後半の所産である。他に13世紀初頭と考えられる渥美産の甕片も出土している。340は石臼で、穀物用石臼の下臼であり、およそ5分の1が残存する。心棒用の孔は確認できないが、復元径は約34cmに推定される。多孔質の玄武岩製で、残存長18cm、中央厚が9.3cm、縁厚8.2cm、重さ4,225gである。6分画主溝型で、副溝が5本確認される。この型式の石臼は関東以北と九州地方に多いとされ、元富士大宮司館跡の出土石臼も6分画の例が多い。

Tr 43

341は、底部右回転系切り後縁辺部をナデており、ナデた土が底部に付着している。見込みは回転ナデが強く、段状を呈す。342は底部断面に接合痕が見られる。343は渥美産の甕の底部と思われる。胎土が緻密で内外面に灰軸がかかる。12世紀末から13世紀初頭のものである。344は瀬戸産の大型筒型香炉で、内外面灰軸がかかり、外面ケズリ、内面ナデで、後Ⅲ期のもので15世紀前半に帰属する。345も瀬戸産の筒型香炉で、344と同様に内外面灰軸、外面ケズリ、内面ナデである。内面の施軸は体部上部のみである。登窯第2小期、17世紀前半のもと考えられる。砥石346は、正面にほぼ平らな砥面をもち、他3面は鏝による切り出し痕が目立つ手持ち砥石である。砥石の347は、脆弱で剝離が著しい。正面に外反気味の砥面、右側面には平らな2面の砥面をもつ手持ち砥石である。右側面と裏面には鑿で削り出した後、研磨によって平滑な面を作り出している。図化したもの以外は、常滑産甕片が出土しているが時期不明で、他に18世紀後半から19世紀の瀬戸・美濃産の陶器碗と甕片が出土している。

Tr 44

土師器の出土は1点のみで図化はできなかった。陶磁器類・砥石の出土が目立つ。348は渥美産の甕で、外面に縦線文の押印が見え、内面は横方向のハケとナデがある。12世紀末から13世紀初頭の帰属であろう。349は瀬戸・美濃産香炉で、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリで、三足が貼り付く。外面に鉄軸がわずかにかかる。17世紀中頃から後半の所産である。350は肥前産の京焼風陶器碗で、口縁部が丸くおさまる。17世紀末から18世紀初頭のものである。351は瀬戸・美濃産の碗で、内外面灰軸がかかり、削り出し高台で露胎である。18世紀の所産である。352は肥前産の御神酒徳利で、高台に3本の線を染め付け、壘付は軸剥ぎである。19世紀代のものである。353～357は砥石である。353は唯一の硅質砂岩製で、他は素材が凝灰岩である。4面とも緩く内湾する砥面の手持ち砥石で、鎌などの仕上げ砥ぎに使用されたと考えられる。正面は長さ6.2cm、幅0.25cm、深さ0.3cmのU字状の凹みがあり、形状から釘状の刺突具の研磨にも併用されている。354は、正面が緩く内湾する砥面を上下に交差した砥面をもつ手持ち砥石である。裏面は自然面、両側面は切り出し後研磨によってほぼ平滑に成形されている。355は、正面に内湾する砥面をもつ手持ち砥石である。裏面は自然面、両側面は鏝による切り出し後、敲きや研磨によって平

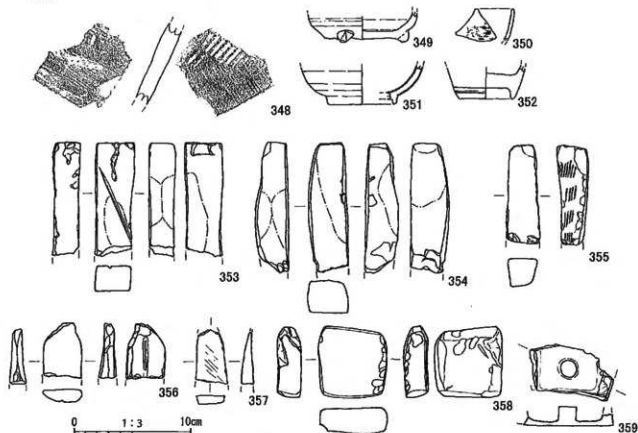


図42 出土遺物(12)

滑に成形されている。356も、正面に緩く内湾する砥面をもつ手持ち砥石であるが、著しい使用により薄くなっている。両側面は敲打痕が目立ち、成形は粗い。裏面には長さ2.6cm、幅0.4cm、深さ0.1cmのU字状の砥面をもつ。丸棒状の軟質なものが対象か。357は、正面に緩く外反する砥面をもつ手持ち砥石の先端破片で、使用が激しく非常に薄い。両側面から裏面は敲打による調整後、研磨されて平滑面を作り出している。358は瓦転用の玩具と考えられ、棧瓦破片を利用している。上辺は棧瓦の側面が残り、他3辺は四角形を意図して研磨されている。長さ5.6cm、幅5.5cm、厚さ2.1cm、重さ88gで掌におさまるサイズで、屋外用玩具として昭和30年代には実用されていた。359は鋳鉄製の文鎮で、扇形状で縁の凸帯の3分の2を欠いている。残存する法量は横6.8cm、縦4.3cm、厚さ0.3cm、重さ72gで中央寄りに径1.4cm、長さ1.3cmの円柱形のつまみが付く。

本地区は他地区に比して遺物の出土が少ない。特に土師器の出土が少なく数点に留まるトレンチもある。陶磁器類では330・339・343・348等中世遺物も出土しているが、近世遺物が多く、Tr 43・44において顕著である。Tr 39・41・42で道跡と思われる平坦面が検出されており、Tr 39で一定量近世遺物の出土が見られるが、中世遺物も出土しており、本地区の利用開始は中世に遡ると推定されよう。またTr 43・44で、砥石や玩具類等の廃棄物の出土が目立っており、最南部は社地境の身近な荒地が廃棄場であったと考えられる。

No	トレンチ 地区	種別	形状	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	色調	地土	構成	機能等			備考		
										内蔵	外装	その他			
73	Tr45	土師器	柱状高台環	(6.8)	3.7	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
74	Tr45	土師器	柱状高台環	(5.6)	2.4	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
75	Tr45	土師器	柱状高台環	(6.6)	4.4	7.5YR5/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
76	Tr45	土師器	柱状高台環	(7.0)	1.9	10YR8/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
77	Tr45	土師器	柱状高台環	2.4	5.0	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
78	Tr45	土師器	柱状高台環	(6.8)	4.1	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ				
79	Tr45	土師器	柱状高台環			7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外装磨滅 接合部で割断		
80	Tr45	土師器	環			7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
81	Tr45	土師器	環			7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
82	Tr45	土師器	環			7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
83	Tr45	土師器	環			7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
84	Tr45	土師器	環			7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
85	Tr45	土師器	環			7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ					
86	Tr45	土師器	環			7.5YR6/4	密	中々不良	回転ナデ	回転ナデ					
87	Tr45	土師器	環	(15.8)		3.4	7.5YR7/3	密	中々不良	回転ナデ	回転ナデ		内外面磨滅 工具痕		
88	Tr45	土師器	環		6.6	1.8	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		工具痕 1/3 残高磨滅 工具痕		
89	Tr45	土師器	環		(6.4)	2.6	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
90	Tr45	土師器	環	(12.4)		7.0	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
91	Tr45	土師器	環		(7.2)	2.8	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
92	Tr45	土師器	環		(7.4)	3.5	10YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
93	Tr45	土師器	環		(4.6)	1.5	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
94	Tr45	土師器	環		(5.0)	1.3	5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
95	Tr45	土師器	環		(7.0)	1.8	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
96	Tr45	土師器	環		(7.0)	1.7	7.5YR6/4	稀良	良好	回転ナデ	回転ナデ				
97	Tr45	土師器	環		(5.2)	1.6	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
98	Tr45	土師器	環		(6.0)	1.5	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
99	Tr45	土師器	環		(5.2)	1.8	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
100	Tr45	土師器	環		(6.4)	1.3	5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		外装磨滅		
101	Tr45	土師器	環		(7.2)	1.7	10YR8/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
102	Tr45	土師器	環		(8.0)	2.4	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
103	Tr45	土師器	環		(8.0)	1.9	7.5YR7/3	密	中々不良	回転ナデ	回転ナデ		外装一部磨滅あり		
104	Tr45	土師器	環		(6.0)	1.7	7.5YR7/8	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		外装一部磨滅あり		
105	Tr45	土師器	環	(7.8)		(6.2)	1.9	5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		外装一部磨滅あり	
106	Tr45	土師器	環	(7.6)		(5.4)	1.5	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		内外面磨滅	
107	Tr45	土師器	環	(9.8)		(7.2)	2.1	10YR8/2	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		磨損 工具痕	
108	Tr45	土師器	環		(6.4)	1.9	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ				
109	Tr45	土師器	環	(7.6)		(6.6)	1.5	10YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
110	Tr45	土師器	環	(7.8)		(5.6)	1.3	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		内外面著しく磨滅 工具痕	
111	Tr45	土師器	環	7.0		6.6	1.5	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		口縁部に油浸	
112	Tr45	常滑	片口鉢	(29.0)		6.1		輪：7.5YR4 胎：2.5Y5/1 輪内：5Y5/1	密	良好	自然輪 自然輪 自然輪	自然輪		II 類I 型式	
117	飛騨	常滑	壺					輪：7.5Y5/2 胎身：10Y3/1 5Y6/1 輪内：5Y5/1	密	良好	自然輪 ナデ・板ナデ 子皿	輪下印刷 ナデ		1b 型式の古い飛騨	
118	Tr6	土師器	柱状高台環	(5.6)		4.2	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		内外面磨滅		
119	Tr6	土師器	柱状高台環			4.4	1.6	7.5YR7/3	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		外装磨滅	
120	Tr6	土師器	環					7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
121	Tr6	土師器	環			(5.2)	2.2	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
122	Tr6	土師器	環			(7.6)	2.1	10YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		接合部 内外面磨滅	
123	Tr6	土師器	環			5.6	1.3	7.5YR7/3	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
124	Tr6	土師器	環			(5.6)	1.8	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
125	Tr6	白磁	碗					輪：10Y7/1 胎：7.5Y7/1	密	良好	磨粉	輪ハギ		中国産 Y-17類 長石釉 19世紀後半 輸入	
126	Tr6	瀬戸	片口鉢			6.4	2.5	輪：5Y8/2 胎：2.5Y8/1	密	良好	磨粉 見込みにトレンチ	輪ハギ	輪ハギ 削り出し高台		
128	Tr7	土師器	柱状高台環			5.1		7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
129	Tr7	土師器	環					7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
130	Tr7	土師器	環					7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
131	Tr7	土師器	環			(8.0)	1.5	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
132	Tr7	土師器	環			4.0	1.7	10YR8/3	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
133	Tr7	土師器	環			(5.8)	1.7	5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
134	Tr7	土師器	環			(6.2)	1.4	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		内外面とも著しく磨滅	
135	Tr7	土師器	皿	(8.2)		(6.6)	2.0	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		内外面磨滅 擦痕	
136	Tr8	土師器	環					7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
137	Tr8	土師器	環					7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
138	Tr8	土師器	環			5.4	1.8	5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
139	Tr8	土師器	環			(6.6)	1.1	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			

No	トレンチ 地区	種別	機種	口径 (cm)	直径 (cm)	長さ (cm)	色調	胎土	焼成	分類等			備考
										内面	外面	底部	
204	Tr17	土師器	杯		(4.6)	1.2	7.5YR5/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	
205	Tr17	土師器	杯		(5.6)	1.2	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
206	Tr17	土師器	杯		(6.0)	2.3	7.5YR8/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内外面磨減
207	Tr17	土師器	皿			3.6	7.5YR8/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
208	Tr17	土師器	皿	(9.8)	(7.2)	1.6	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
209	Tr17	土師器	皿			2.1	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
210	Tr17	土師器	皿				7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
211	Tr17	土師器	皿		5.9	0.9	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
212	Tr17	磁器	碗				胎: 5Y7/2	密	良好	染釉	染釉	染釉	新石造 18世紀
214	Tr18	土師器	柱状高台杯		(5.2)	3.0	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
215	Tr18	土師器	柱状高台杯			2.5	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	
216	Tr18	土師器	柱状高台杯		(4.8)	1.6	10YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り・スノコ溝	
217	Tr18	土師器	柱状高台杯				7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		増付工具溝
218	Tr18	土師器	杯	(11.4)		2.3	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		外面磨減
219	Tr18	土師器	杯				10YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
220	Tr18	土師器	杯				7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
221	Tr18	土師器	杯	(9.4)	(6.0)	2.5	10YR7/2	密	やや不貞	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	内外面磨減 内面黒垢
222	Tr18	土師器	杯		(6.6)	1.6	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	窪痕
223	Tr18	土師器	杯		(6.2)	2.0	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
224	Tr18	土師器	杯		(7.8)	2.2	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
225	Tr18	土師器	皿		(7.4)	1.0	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
226	Tr18	土師器	皿		(7.2)	1.0	10YR5/2	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	
227	Tr18	土師器	皿				10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
229	磁器	土師器	柱状高台杯		(7.4)	2.1	10YR5/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
230	磁器	土師器	杯		(6.4)	1.4	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
231	磁器	土師器	杯		(4.5)	1.4	10YR6/3	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
232	磁器	土師器	杯		(4.6)	1.0	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内外面磨減
233	磁器	土師器	杯		(4.0)	1.7	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内外面著しく磨減
234	Tr19	磁器	碗				胎: 5Y7/2	密	良好	染釉	染釉	染釉	灰土・灰濁 18世紀前半〜中頃
236	Tr20	土師器	柱状高台杯		(6.2)	1.7	7.5YR6/8	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	
237	Tr20	土師器	皿			0.9	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
238	Tr21	土師器	杯		(6.8)	1.9	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ	
239	Tr21	土師器	杯		(5.6)	1.1	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り・スノコ溝	
240	Tr21	土師器	杯		(6.6)	1.1	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り・スノコ溝	底部内面磨減・割痕
241	Tr21	瀬美	罎				胎: 10Y4/2 胎: 5Y5/2	密	良好	横ナデ	押印 自然釉		産地不明 12世紀末〜13世紀初頭
242	Tr22	土師器	柱状高台杯	(9.0)		2.3	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
243	Tr22	土師器	杯		(7.0)	1.8	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面磨減
244	Tr22	土師器	杯			0.8	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
245	Tr22	常滑	罎				外: 7.5YR5/4 胎: 10YR5/2	密	良好	ナデ	押印		3型式?
246	Tr22	瀬戸・美濃	風呂蓋陶		(6.2)	1.4	胎: 5YR3/6 胎: 10YR6/2	密	良好	染釉	染釉	ケズリ 削り出し黒台	17世紀末〜18世紀初頭
247	Tr23	土師器	杯			2.3	7.5YR6/8	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
248	Tr23	土師器	杯				7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
249	Tr24	土師器	杯	(6.8)		2.0	7.5YR5/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
250	Tr24	土師器	杯		(5.4)	1.3	7.5YR5/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後回転ナデ	
251	Tr24	土師器	杯		(4.1)	1.1	7.5YR5/4	密	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り後回転ナデ	
252	Tr25	土師器	杯		(6.5)	1.5	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ・スノコ溝	
253	Tr25	土師器	杯		2.6	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ		
254	Tr25	土師器	杯		2.3	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り?		
255	Tr25	土師器	皿		1.9	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ナデ		
256	Tr25	土師器	皿		1.5	10YR6/8	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
257	Tr25	常滑	罎				外: 5Y4/4 内: 5YR4/8 胎: 10YR6/1	密	良好	自然釉 土施	自然釉		2型式
258	Tr25	常滑	罎				外: 7.5YR5/4 胎: 10YR5/2	密	良好	ナデ	押印 染釉	横ナデ	12〜13C
259	Tr26	土師器	杯		(4.2)	1.3	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
260	Tr26	土師器	杯		(5.0)	0.8	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り後ユビ押え	
261	Tr27	土師器	柱状高台杯			2.5	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
262	Tr27	土師器	杯		(5.4)	2.4	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
263	Tr27	土師器	杯		(4.6)	1.2	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
264	Tr27	瀬美	罎				2.5Y/1	密	良好	ナデ	押印 ハツツ 染釉		胎土確認合部 染釉 赤濁 印?
265	Tr27	瀬戸	磁鉢		5.0		胎: 7.5YR3/3 胎: 2.5Y7/3	密	良好	染釉	染釉	回転ナデ	
267	Tr28	土師器	杯				7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
268	Tr28	土師器	杯			1.9	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
269	Tr28	土師器	皿			1.5	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
270	Tr28	黄磁	碗	(15.3)		2.6	胎: 7.5Y5/3 胎: 10Y5/1	密	良好	染釉	染釉		中国・龍泉窯系 13C

No	トレンチ 地区	種別	群種	口径 (cm)	高さ (cm)	軸高 (cm)	色調	胎土	焼成	調整等			備考	
										内面	外面	底部		
271	Tr28	青磁	碗				輪: 7.5Y7/3 胎: 7.5Y6/1	密	良好	染釉 染織文・片彫	染釉 回転ヘラケズリ 染織文			中国・西安窯系 12世紀後半
272	Tr28	瀬美	壁			4.2	輪: 7.5Y4/2 胎: 7.5Y6/1	密	良好	ハケ塗	ハケ塗 口縁部近し直し			2b型式
273	Tr29	青磁	小碗	(11.2)		2.6	輪: 10Y6/2 胎: 5Y6/1	密	良好	染釉 蓮線1条	染釉			中国産 170歳
274	Tr29	瀬美	壁				外: 5YR6/6 胎: 5YR6/2	密	良好	横ナデ	横ナデ			
275	Tr30	土師器	杯				7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
276	Tr30	土師器	杯		(5.0)	1.3	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外島産
277	Tr30	土師器	皿	(9.0)	5.6	1.8	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外島産
278	Tr30	土師器	杯	(10.4)	(7.4)	2.0	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外島産
279	Tr30	土師器	杯	(8.6)	(6.4)	2.2	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外島産
280	Tr31	常滑	鉢				輪: 7.5Y5/3 胎: 5Y5/1	密	良好	自然釉	自然釉			類4型式
281	Tr31	常滑	鉢				内外: 5YR4/6 胎: 5YR5/1	密	良好	横ナデ 横ナデ	横ナデ・横ナデ 自然釉			Ⅱ類6型式
282	Tr32	土師器	皿	(6.6)	(6.0)	1.8	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			外島産し縁
283	Tr33	土師器	杯				7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
284	Tr33	土師器	杯		8.0	2.0	7.5YR7/6	密	やや軟質	回転ナデ	回転ナデ			東濃産(白土原) 57歳
285	Tr34	山崎陶	碗				2.5Y7/1	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
287	Tr34	土師器	杯				7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
288	Tr34	土師器	杯				10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
289	Tr34	土師器	杯				7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			内外産にスス
290	Tr34	土師器	杯		(4.8)	1.5	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
291	Tr34	土師器	皿			2.7	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
292	Tr34	土師器	皿	(7.4)	(6.0)	1.3	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			北島産
293	Tr34	土師器	皿			1.7	7.5YR7/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
294	Tr34	青磁	碗				輪: 5G7/1 胎: 10Y7/1	密	良好	染釉 染織文	染釉 染織文			中国・龍泉窯系 A.5系
296	Tr34	常滑	片口鉢				7.5YR6/6	密	良好	ナデ	口縁部面取り 横ナデ			Ⅱ類7型式
296	Tr34	瀬戸	反輪平碗				輪: 7.5YR6/2 胎: 2.5Y5/2	密	良好	染釉	回転ヘラケズリ			後Ⅱ
297	Tr34	常滑	碗				10YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			半調整 16.4°C
300	Tr35	土師器	柱状高台杯			1.1	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
301	Tr35	土師器	杯		(6.0)	1.2	7.5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
302	Tr35	土師器	杯			2.0	7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ			
303	Tr35	常滑	壁				輪: 10Y4/2 外: 7.5YR4/4 胎: 2.5Y5/2	密	良好	自然釉	回転ナデ			4型式
304	Tr35	瀬戸・ 常滑	反輪平碗	(5.2)	2.7		輪: 10Y7/2 胎: 5Y7/2	密	良好	染釉	回転ヘラケズリ			後Ⅱ
305	Tr35	瀬戸・ 常滑	種鉢	(9.6)	3.3		輪: 5G7/1 胎: 5Y8/2	密	良好	染釉	染釉 回転ナデ 自然釉			類4 類5 類6 類7 類8 類9 類10 類11 類12 類13 類14 類15 類16 類17 類18 類19 類20 類21 類22 類23 類24 類25 類26 類27 類28 類29 類30 類31 類32 類33 類34 類35 類36 類37 類38 類39 類40 類41 類42 類43 類44 類45 類46 類47 類48 類49 類50 類51 類52 類53 類54 類55 類56 類57 類58 類59 類60 類61 類62 類63 類64 類65 類66 類67 類68 類69 類70 類71 類72 類73 類74 類75 類76 類77 類78 類79 類80 類81 類82 類83 類84 類85 類86 類87 類88 類89 類90 類91 類92 類93 類94 類95 類96 類97 類98 類99 類100

No	トレンチ 地区	種別	群種	口径 (cm)	高さ (cm)	径高 (cm)	色調	胎土	焼成	図数等			備考
										内面	外面	底面	
331	Tr39	瀬戸	磁器				軸: 7.5Y6/3 軸: 2.5Y6/2	密	良好	胎軸 一部軸ハギ	胎軸 一部露胎		底軸 後Ⅰまたは後Ⅱ
332	Tr39	瀬戸・ 美濃	小坏		8.0	3.9	軸: 5Y7/3 軸: 2.5Y7/3	密	良好	胎軸	胎軸 回転ナデ 回転ヘラケズリ 一部露胎		底軸 17世紀中頃～後半
333	Tr39	磁器	筒型碗		3.2	2.2	軸: 5Y6/2	密	良好	胎軸	胎軸 染付		肥前産 18世紀末～19世紀初頭
334	Tr40	土師器	坏				7.5YR7/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ		
335	Tr41	土師器	坏		(8.6)	1.0	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
336	Tr41	土師器	皿		(7.4)	0.5	10YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
337	Tr41	瀬戸	磁器				軸: 2.5YR3/3 軸: 10YR7/3	密	良好	胎軸 ナデ	胎軸 ナデ・自然軸		胎軸 赤澤産 近世
339	Tr42	青磁	碗		4.6	2.3	軸: 7.5Y6/1 外: 2.5Y6/2 軸: 7.5Y6/1	密	良好	胎軸 見込み片取、段取 り	胎軸 側面文 胎軸ヘラケズリ	回転ヘラケズリ 削り出し高台 露胎	中国・同安瀆系 白磁
341	Tr43	土師器	坏		(5.0)	1.2	5YR6/6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
342	Tr43	土師器	坏		(8.5)	1.7	7.5YR6/4	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	鎌倉産
343	Tr43	涅槃	甕?			3.9	軸: 7.5Y4/1 7.5Y5/3 軸: 5Y6/1	密	良好	自然軸	胎軸・自然軸?		2b型式?
344	Tr43	瀬戸・ 美濃	大型甕型 甕	14.6		5.7	軸: 7.5Y6/3 軸: 7.5Y7/1	密	良好	胎軸 ナデ	胎軸 ケズリ		胎軸 後型
345	Tr43	瀬戸・ 美濃	筒型蓋鉢	9.6		4.7	軸: 5Y5/4 軸: 5Y7/3	密	良好	胎軸 ナデ?	胎軸 ナデ?・ケズリ 一部露胎		胎軸 17世紀?
348	Tr44	涅槃	甕				外: 5Y6/2 軸: 2.5Y6/2	密	良好	ナデ・蓋て具?			
349	Tr44	瀬戸・ 美濃	蓋鉢		6.0	2.3	軸: 7.5YR3/4 軸: 2.5YR3/3	密	良好	回転ナデ	胎軸 ナデ	ケズリ 三足胎付	胎軸 17世紀中頃～後半
350	Tr44	肥前	碗				軸: 2.5Y8/3 軸: 10YR8/1	密	良好	胎軸	胎軸		胎軸 京師産 17世紀末～18世紀初頭
351	Tr44	瀬戸・ 美濃	碗		5.1	2.9	軸: 5Y8/2 軸: 2.5Y8/2	密	良好	胎軸	胎軸 ケズリ	ケズリ 削り出し高台 露胎	胎軸 18世紀
352	Tr44	磁器	御神酒徳利		6.4	2.4	軸: N8/0	密	良好	胎軸	胎軸 染付	胎軸 染付軸ハギ	肥前産 19世紀初

第2表 土器・陶磁器出土表

トレンチ	土器数	陶磁器 点数	灰釉 陶器	山茶碗	瀝夷	常滑	瀬戸・ 美濃	貿易 陶磁	南伊勢 系磁	近世 瀬戸・美濃	近世 肥前	近世 その他	近代
H25-1Tr	231												
3Tr													
2Tr	1												
H25-2Tr	2	1				1							
1Tr	54												
H25-3Tr		1								1			
H25-4Tr	3												
4Tr		1											1
5Tr													
H25 石壘	42	2			2								
選拝所表探	3	3			1	1		1					
H25-5-1Tr	2582	9						1		2			4
H25-5-2Tr	3694	21				9		2		1			3
45Tr	1965	2				2							
階段東表探		1				1							
6Tr	158	7					1	1					5
7Tr	573	2								1			1
8Tr	220												
9Tr	12												
10Tr	161	1						1					
11Tr	110												
12Tr	264	2		1									1
13Tr	50												
14Tr	959	3	1			1							1
15Tr	171	1		1									
16Tr	267	1						1					
17Tr	354	3		1			1				1		
18Tr	518												
龜屋表探	5												
19Tr	2	8			1					3	2		2
20Tr	2	3		1						2			
21Tr	21	14			1	1				1			11
22Tr	84	7				1				5	1		
23Tr	14	21			2	2				1	1		15
24Tr	82	2				1				1			
25Tr	122	4			1	2							1
26Tr	145												
27Tr	87	10		1	4	2				2			1
28Tr	210	9			3	3		3					
29Tr	18	2				1		1					
30Tr	58	1											1
31Tr	98	3				3							
32Tr	12	2											2
33Tr	89	4		1		1		2					
34Tr	310	10			4	2	1	1			2		
35Tr	54	7			1	3	1			1			1
36Tr	38	14			1	2		2	1				8
37Tr	326	5						1	1	1			2
38Tr	27	6			2	1		2		1			
39Tr	15	9			3	2	1			1	2		
40Tr	24	1			1								
41Tr	3	3				2				1			
42Tr	11	2			1			1					
43Tr	6	13			1	2	1			4			5
44Tr	1	31			1					9	7	1	13
表探	282	2											2
合計	14530	251	1	6	30	46	6	20	2	38	16	1	80

第3表 和釘計測表 () 欠損値

No.	トレンチ名	材質	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	頭部長 (cm)	頭部幅 (cm)	備考
34	25-Tr5-1	鉄	頭巻	(2.4)	0.55	0.5	0.85	0.9	先端欠
35	25-Tr5-1	鉄	折?	(3.0)	0.7	0.7	1.0	0.9	先端欠
36	25-Tr5-1	鉄	—	(3.1)	0.6	0.6	—	—	両端欠
70	25-Tr5-2	鉄	—	(2.6)	0.45	0.45	1.1	0.9	両端欠
116	Tr45	鉄	頭巻	(4.7)	0.5	0.5	1.1	0.9	先端欠
127	Tr6	鉄	—	(5.0)	0.45	0.35	—	—	両端欠
286	Tr33	鉄	—	(6.4)	0.5	0.5	—	—	頭部欠
298	Tr34	鉄	—	(2.2)	0.45	0.4	—	—	両端欠
299	Tr34	鉄	頭巻	(4.2)	0.8	0.8	0.9	1.2	先端欠
321	Tr37	鉄	頭巻	(6.2)	0.8	0.7	1.0	1.1	先端欠
322	Tr37	鉄	頭巻	(5.5)	0.5	0.55	0.9	0.7	先端欠

第4表 磁石計測表 () 欠損値

No.	トレンチ名	材質	紙面	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
11	Tr1	凝灰岩	1	(7.8)	3.0	3.3	(90.0)	両端欠
71	25-Tr5-2	凝灰岩	1	(6.9)	(3.0)	2.2	(71.0)	3面欠
113	Tr45	石灰岩	3	(3.9)	4.1	2.4	(61.0)	両端欠
114	Tr45	凝灰岩	2	(4.9)	1.8	2.2	(29.0)	両端欠
235	Tr19	凝灰岩	3	(7.8)	2.9	2.2	(68.0)	両端欠
266	Tr27	凝灰岩	1	(8.1)	3.5	5.6	(235.0)	下端欠
321	Tr36	凝灰岩	2	(9.8)	5.0	1.5	(121.0)	下端欠
346	Tr43	凝灰岩	1	(10.3)	2.9	2.8	(134.0)	下端欠
347	Tr43	凝灰岩	2	(7.0)	3.8	1.6	(51.0)	両端欠
353	Tr44	珪質砂岩	4	(9.0)	2.9	2.0	(103.0)	下端欠
354	Tr44	凝灰岩	1	(10.3)	3.1	2.4	(135.0)	下端欠
355	Tr44	凝灰岩	1	(7.8)	2.6	2.3	(66.0)	下端欠
356	Tr44	凝灰岩	2	(4.3)	(3.0)	(1.0)	(13.0)	両端欠
357	Tr44	凝灰岩	1	(4.2)	(2.5)	(1.0)	(19.0)	両端欠

第5表 銭貨計測表

No.	トレンチ名	銭名	計測値				材質	初鋳・鑄造年代 (西暦)	備考
			外径 (cm)	穿 (cm)					
				縦	横	重さ (g)			
12	Tr1	紹聖元寶*	2.40	0.65	0.60	3.05	銅	1094	
13	Tr1	菊五銭白銅貨	2.00			4.25	白銅	1890	
32	25-Tr5-1	寛永通寶	2.52	0.60	0.59	3.00	銅	1668	新寛永 寛背文
33	25-Tr5-1	寛永通寶	2.41	0.60	0.60	2.05	銅	1726	新寛永
115	Tr45	天聖元寶	2.50	0.66	0.67	2.10	銅	1021	

第四章 調査のまとめ

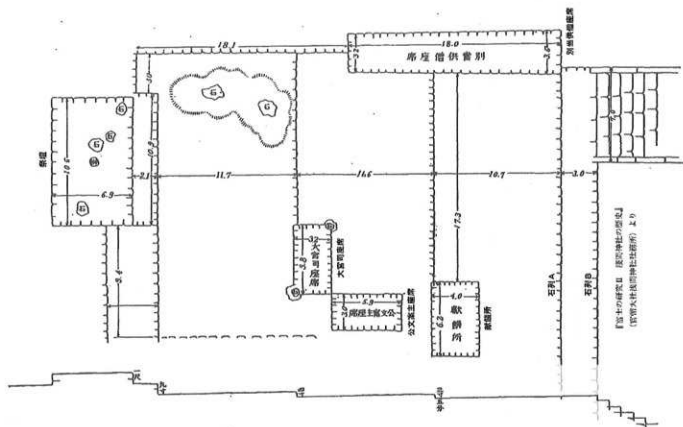
今回の調査により、山宮浅間神社遺跡の内容がある程度確認できた。トレンチ調査であるため遺構の発掘が一部に留まるなど、追加調査を検討すべき場所もあった。そこで、今回は現時点での調査結果をまとめておきたい。なお、今回の調査は一部の発掘に留まるため、今後の調査により新たな発見がある可能性は十分にあり得る。今後も山宮浅間神社遺跡では調査が行われる予定であるため、最終的な取りまとめ・判断はその調査結果に委ねたい。

遷葬所の石列について

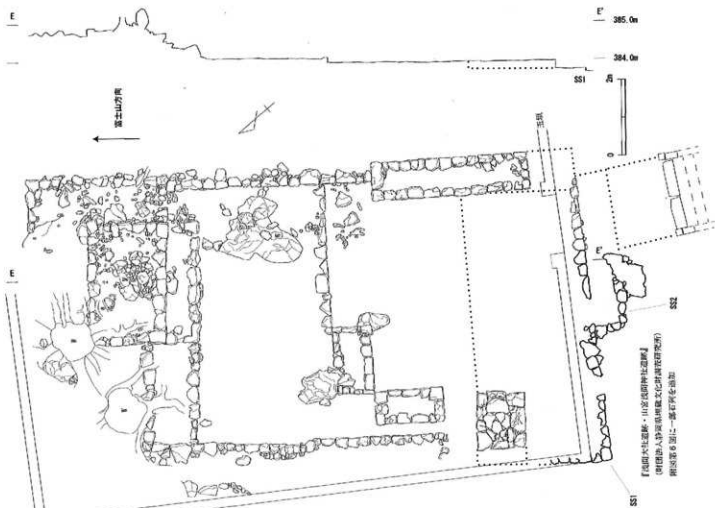
遷葬所の石列（『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡』より）と今回の調査で出土した石列（SS1・SS2）及び昭和初期の実測図（『富士の研究Ⅱ浅間神社の歴史』より）について、その配置を図43に示した。両者を比較すると、昭和初期には存在した石列が一部消滅しているものや、図示されていない新たに確認された石列もある。献饌所の西側と別当供僧座席の南側の石列の一部が取り除かれ、献饌所と別当供僧座席の間の東西に連なる石列がなくなっている。おそらく、附編で述べる昭和5年の玉垣設置の際に変更されたものと思われる。また、別当供僧座席の南端から西に連なる石列（以下「石列A」とする。）は玉垣より西側では確認できず、参道階段は数段取り除かれ、その端から西に延びる石列（以下「石列B」とする。）は一部が確認されたにすぎない。一方、SS1とSS2の南北軸の石列は今回の調査で初めて確認されたものである。

昭和初期実測図の測量が正確であり単位が尺と考えると、祭壇の大きさや石列間の距離は現在の石列の実測図とほぼ一致する。よって、それぞれの石列の配置は昭和初期から移動していないと考えられるので、SS1の東西列は石列Aであり、SS2の東西列は石列Bであるといえる。異なるのはSS1とSS2の南北列である。SS1の南北列は今回の調査で玉垣の下で発見されたことから、玉垣造成前には存在していたものと思われる。また、SS2の南北列についても同様に玉垣設置前に存在していたと考えることができる。

SS1の南北列と東西列とは構成する溶岩も同じで隙間なく接しており、同時期のものと考えられる。また、東西列の東端は昭和初期実測図の別当供僧座席の大きさから考えると当時と同じ位置にあると考えられる。よって、SS1は昭和初期からその配置は変わっていないといえる。したがって、今回の調査結果からは、SS1は昭和初期から位置は変わっておらず、玉垣の方がSS1に合わせて造られたといえる。また、石列Bの位置は、SS1との距離が昭和初期実測図の石列Aとの距離と同じであるので移動していないと考えられる。石列Bの高さは、昭和初期実測図の断面では石列Aと同じであるが、今回の調査ではSS2がSS1より10cm程度低くなっている。しかし、昭和初期実測図では石列Bの東西の高低差がわからないため、はじめから段差があったのかもしれない。断言はできない。



『富士山研究』 遷拜神社の遺跡
(京都大学民俗学研究所) より



『民間大正遺跡』 山梨県神社の遺跡
(財団法人山梨県民俗文化研究所研究) より
調査報告第一巻 野宮神社

图 43 遷拜所石列比較図

今回の調査結果からは昭和初期と異なる石列の位置を推定することができた。しかし、①SS1西端部に連続する南北列の追跡、②取り除かれた献餞所及び別当供僧座席の確認、③別当供僧座席とSS1東端部との連結部の確認、④献餞所と別当供僧座席を結ぶ石列の有無・段差の確認、⑤遥拝所全体の石列の範囲・位置・性格の確認等が今後の課題となっている。石列の軸が異なる理由の解明を含め、調査の継続が求められる。

遥拝所の造成について

今回の調査結果では、遥拝所は造成した地盤に黒褐色土層が乗り、その上に石列が乗ることがわかった。遺物の出土状況からは、遥拝所のある台地については12世紀から15世紀頃まで継続的に利用され、16世紀以降は限定的な使用に留まることが考えられる。黒褐色土層には12世紀から15世紀までの遺物が含まれているため、地盤の造成(SX1)は12世紀以降で、黒褐色土層の造成(SX2)は15世紀以降と思われるが、明確な年代は不明であり、石列と同時期のものかもはっきりしない。

造成面(SX1・SX2)の範囲・構築時期やどのような性格のものであるのかは不明であるため、石列の設置年代を含め、今後は周辺の調査の実施が求められる。

境内地の遺構分布について

境内地にはその濃淡はあるが、遺構が全体的に点在していることが判明した。境内地全域から遺物が出土しているが、その密度は場所により異なる。遥拝所のある高台では最も土師器の混入が多く、遥拝所南側から北側の鳥居までの間にも多く混入する。しかし、それより南側になるとその数を徐々に減らし南側鳥居付近ではほとんど見かけなくなり、近世・近代の陶磁器類が目立つようになる。

遥拝所は12～15世紀にかけて祭事等に継続的に利用されていたと思われるが、16世紀以降の遺物は減少する。江戸時代には山宮浅間神社は浅間大社の摂社として扱われ、両神社の間で「山宮御神幸」という祭事が行われたとされているが、当該期の遺物は少なくとも一定量の出土が認められるのは境内地の最も南側の平地のみである。

山宮浅間神社の中心地が遥拝所であることはもちろんだが、近世以前では遥拝所から北側の鳥居までの間での土地利用が盛んであったと思われる。遺物も中世を中心に土師器はもちろん中世陶磁器や和釘の出土も見られる。

特に土塁状の遺構の西側にあるTr33・34・37では中世の陶磁器が多く出土し和釘の出土もみられ、土塁に取り囲まれた土地利用が想起される。近世には山宮御神幸の神事の度に籠屋(参籠所)が仮設されたというので、周辺ではそのような土地利用がなされていたことも考えられる。

今回発見された土塁状の遺構や道状の遺構を含め、境内地には遺構が点在していることが判明している。その分布状況より、現代の境内地よりも広い範囲での遺構・遺物の分布が想定される。今後は周辺の調査を含め遺跡の分布調査の実施を検討しなければならない。

参考文献

- 桑原藤泰 1820 完成『駿河記』（足立鉄太郎校訂 1974 臨川書店再刊）
- 阿部正信 1843 完成『駿国雑志』（中川芳雄・安本博・若尾俊平編 1977 吉見書店再刊）
- 中村高平 1861 完成『駿河志料』（橋本博校訂 1969 歴史図書社再刊）
- 宮地直一・廣野三郎 1929 『富士の研究Ⅱ 浅間神社の歴史』（1973 名著出版再刊）
- 浅間神社社務所 1931 『浅間文書纂』（1971 名著刊行会再刊）
- 富士宮市史編纂委員会 1971 『富士宮市史（上巻）』
- 静岡県生活環境部資源エネルギー課 1982 『静岡県富士山麓周辺の湧水について』
- 渡井正二 1999 「山宮御神幸について」『霊峰富士』第 59 号 富士山本宮浅間大社社務所
- 富士宮市教育委員会 2000 『富士宮市遺跡地図—第 3 版—』
- 国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所 2002 『富士山の自然と社会』
- 国土地理院 2003 『火山土地条件図「富士山」』
- 富士宮市教育委員会 2005 『村山浅間神社調査報告書—遺跡範囲確認調査編—』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『浅間大社遺跡 山宮浅間神社遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2012 『富士宮市「史跡富士山」整備基本計画（富士宮市内関係文化財）』

附編 昭和初期における山宮浅間神社境内の造営について

山宮浅間神社には、明治時代以降の神社運営関係資料が保存されている。平成 24 年度、富士宮市教育委員会は、このうち明治から昭和 40 年代までを中心とする 53 点を整理した。資料群には神社境内諸施設の造営に関する会計資料が含まれており、当該時期の造営状況が判明する。資料群から境内の造営について考察する。

まず、境内の状況について確認する。「駿河国浅間神社明細書」(年不詳)に「本殿 往古ヨリ無之、寛政二年(1790)十一月書上ニモ山宮村浅間往古ヨリ無之トアリ」(括弧内は筆者による)、「宮内浅間神社巨細取調書上帳写」(明治 4 年(1871))に「本社 無御座候、榊木之木ヲ以テ神体ト奉崇」とあることから、以前から本殿はなかったと考えられる。また、「北山村神社明細帳写」(明治 19 年(1886))には「本社」、「社務所」、「井戸屋形」、「雨覆」、「神楽殿」、「幣殿」、「廊下」、「門」、「聴屋」、「玉垣」、「神饌所」、「鳥居」が「無之」と書き上げられるなか、「籠屋 間口六間・奥行二間」が記されている。なお、この建物は「宮内浅間神社巨細取調書上帳写」には「拝殿 間口六間・奥行二間」とあり、「拝殿」としても登場するものの、「御籠屋取壊並拝殿建築許可ニ付稟請」(昭和 8 年(1933))に「当社ハ古来ヨリ本殿・拝殿無之御籠屋ヲ唯一ノ建物トシテ」とあること等から「籠屋」や「参籠所(室)」の名称が主に使われていたと考えられる。また、この建物は、「駿河国浅間神社明細書」によると「創始不詳、弘化三年(1846)有志寄附ヲ以テ再興、文久元年(1861)二月氏子寄附修繕」されたものだという(括弧内は筆者による)。

さて、昭和初頭、山宮浅間神社では境内の整備が計画された。昭和 5 年(1930)4 月 30 日付の「玉垣井鳥居新築ノ儀ニ付稟請」⁶⁰には、「神域ヲ始め是等由緒アル旧跡保存ノ為メ先ツ建設物ノ第一歩トシテ玉垣井鳥居ヲ建設シ(将来拝殿等ノ新築モ致度)」とあり、玉垣・鳥居の新築申請とともに拝殿の新築計画が述べられている。この申請は同年 7 月 24 日付で静岡県より許可され、玉垣は同年 9 月 2 日起工、10 月頃竣工した。工事に際し、玉垣内には砂利を入れて地均しをし、入口の鉄扉には錠をつけた。この玉垣は、「北山村山宮村浅間神社玉垣井鳥居新設工事仕様書及設計書」⁶¹に「混泥土造 延長廿七間 花崗岩出し仕上ゲ 付属両開扉 鉄製 巾五尺二寸 金鍍紋付 一ヶ処」とあることから、現在通拝所にある玉垣と判明する。「北山村神社明細帳写」に玉垣のないことが記されており、また『富士の研究Ⅱ』(昭和 4 年(1929))の掲載写真(図版 1-2)からも玉垣のないことが確認されることから、昭和 5 年に初めて築造されたと考えられる。一方鳥居は、建築資金が不足したため翌年まで工事が延期され、昭和 6 年(1931)6 月 30 日に引き渡された。⁶²前回の仕様書に「鉄筋混泥土造 総高地上二十尺七寸 内巾十四尺 花崗岩出し仕上ゲ 老基」とあり、現在境内南入口にあるコンクリート製鳥居のことと考えられる(図版 2-1)。

次いで昭和 8 年(1933)、山宮浅間神社は「当神社ハ古来ヨリ本殿・拝殿無之御籠屋ヲ唯一ノ建物トシテ保存シ修理ニ修理ヲ加ヘ辛ジテ其ノ輪廓ヲ保チ来タリシガ、近年腐朽荒廃

セル上、昨年十一月十四日ノ暴風雨ノ為メ倒壊散乱シ復旧不能ニ相成」ったとして、「籠屋」を取り壊して跡地に「拝殿」を建設することを申請した。⁹¹倒壊した「籠屋」は、弘化3年に建造され、文久元年の修繕以降、明治42年(1909)頃の改築工事、昭和7年(1932)11月の屋根塗替など修繕を重ねてきたと考えられる。新築される「拝殿」は、「村社浅間神社御籠屋新築仕様書」によると「桁行十間・梁間三間・庇一坪、建坪三十一坪木造平家、入母屋造亜鉛鉄葺」で「参拝門」・「参籠室」・「社務所室」を備えたものであり、現在の籠屋だと判る。昭和8年(1933)4月9日に上棟式を行い、7月30日付で完成届が作成された。現在、籠屋内に上棟式記念や落成記念の写真(図版2-2)が残されている。この建築費用は、旧建物取壊費用等を含め約3,450円かかり、積立金、静岡県からの補助金、境内木売却金などで賅った。⁹²

以上のように、現在の境内景観を構成する玉垣・籠屋・鳥居は、昭和5～8年(1930～1933)にかけて造営されたことが分かった。この後も、昭和23年(1948)に鳥居前・籠屋周辺の石垣整備、同59年(1984)に籠屋屋根葺替工事が行われており、境内の維持管理が続けられてきた。⁹³

【註】(1) 山宮浅間神社運営資料19「譲与申請書ほか」所収

(2) 註(1)参照

(3) 註(1)参照

(4) 山宮浅間神社運営資料1「往復文書綴」所収

(5) 註(4)参照

(6) 註(4)参照

(7) 山宮浅間神社運営資料1「往復文書綴」所収「鳥居新築工事延期願」、同4「領収書綴」

(8) 山宮浅間神社運営資料1「往復文書綴」所収「御籠屋取壊並拝殿建築許可二付稟請」

(9) 註(4)参照

(10) 山宮浅間神社運営資料1「往復文書綴」ほか

(11) 山宮浅間神社運営資料20「会計簿」、同34「屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮一区西村)」ほか。この他にも、近年には平成24年(2012)に籠屋一部改築、同25年(2013)に手水舎新築工事が行われた。

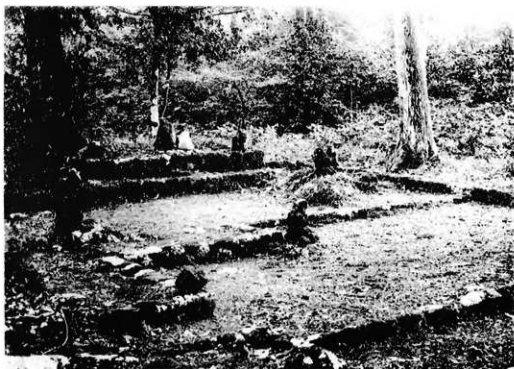
表6 山宮浅間神社 神社運営関係資料目録

No	年代	表題	差出人	請取人	数
1	明治21年～	往復文書綴			1
2	明治42年～	浅間神社々金出入帳			1
3	昭和4～7年	会計簿	浅間神社		1
4	昭和4～7年	領収書綴	浅間神社		1
5	昭和7～9年	昭和八年祭典費一切領収証			1
6	昭和7～10年	会計簿	浅間神社		1
7	昭和7～10年	領収書綴	浅間神社		1
8	昭和8年	拜殿建築証憑書類	浅間神社		1
9	昭和8年	参考書綴	浅間神社		1
10	昭和10～17年	記録	山宮浅間神社氏子總代		1
11	昭和10～17年	領収書綴	山宮浅間神社氏子總代		1
12	昭和10～12年	重要書類綴	山宮浅間神社		1
13	昭和12～21年	重要書類綴	浅間神社		1
14	昭和17～21年	領収書綴	山宮浅間神社氏子總代		1
15	昭和22～23年	昭和二十二年度会計簿	山宮浅間神社氏子總代中里隆之		1
16	昭和22～23年	山宮農業倉庫同分教場昇格関係領収証綴			1
17	昭和22年	昭和二十二年参考書類	山宮浅間神社		1
18	昭和22～23年	昭和二十二年領収証綴	山宮浅間神社		1
19	昭和23年	譲与申請書ほか			1
20	昭和23～25年	会計簿	氏子總代赤池俊雄		1
21	昭和25年	神社官有地内立木材積調査	山宮浅間神社		1
22	昭和27年	神社合併に関する御願	浅間神社宮司赤池協ほか		2
23	昭和33～35年	(山宮浅間神社運営について)			1
24	昭和34年・36年	昭和36年度山宮浅間神社演芸プログラム・昭和34年8月14日台風7号に依る山宮浅間神社被害水調査			1
25	昭和34年	財産処分承認書類ほか			2
26	昭和35年	神社等級証書	静岡県神社庁	浅間神社	1
27	昭和44～55年	領収書綴	山宮浅間神社		1
28	昭和48年	土地使用貸借契約書	山宮浅間神社氏子總代赤池義男	富士宮市長植松義忠	1
29	昭和48年	物件移転補償契約書	山宮浅間神社氏子總代赤池義男	富士宮市長植松義忠	1
30	昭和50～59年	(関係書類綴り)			1
31	昭和51年	覽書	山宮浅間神社氏子總代赤池義男	大石寺理事吉田義誠	1
32	昭和51年	土地売買契約書	山宮浅間神社氏子總代赤池義男	大石寺理事吉田義誠	1
33	昭和59年	山宮浅間神社拜殿修理寄付金			1
34	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮一区西村)			1
35	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮一区向)			1
36	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮二区中沢)			1
37	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮二区二町内)			1
38	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮一区蒲沢)			1
39	昭和59年	屋根葺替工事奉賛御芳名(山宮二区一町内上宮内・宮本・久保・籬坂)			1
40	平成元年	土地調査	浅間神社		1
41	平成元年	物件調査	浅間神社		1
42	平成4年	保存指定決定通知書・保存指定助成金交付決定通知書			2
43	平成18年	千二百年祭山宮御神幸祭関係書類			
44		証拠調査ス可キ書類			1
45		宗教法人備付帳簿			1
46		土地売買契約書			1
47		求積図面			1
48		公園享し			1
49		求積図			1
50		土地台帳写証明			6
51		立木調査			9
52		富士山本宮浅間神社風損木調査			18
53		(富士の研究・浅間文書纂写し)			4

写真図版



1. 遷拝所から富士山を望む



2. 昭和3～4年頃の遷拝所 (『富士の研究Ⅱ 浅間神社の歴史』より)

図版 2



1. 昭和6年築造の鳥居（昭和10年撮影・富士山本宮浅間大社所蔵写真）



2. 「拜殿」新築記念写真（昭和8年撮影・山宮浅間神社所蔵写真）



1. 着手前 (遷葬所前平場) (北西より)



2. 25-Tr 5-1 全体 (南東より)

図版 4



1. 25-Tr 5-1 A-A' 断面 (北西より)



2. 25-Tr 5-2 全体 (南東より)



1. SS 1・SS 2 (北西より)



2. SS 1 玉垣下南北列 (北西より)

図版 6



1. SS3 (北東より)



2. SS4・SS6 (石塁)・25-Tr4全体 (北東より)



1. SS 5 (北西より)



2. SS 6 (石塁)・25-Tr 1 全体 (北東より)

図版 8



1. SS 6 (石壘)・25-Tr 3 西側 (北東より)



2. SS 7・Tr 45 全体 (南西より)



1. S S 7・Tr45 北側 (東より)



2. S A 1・Tr28 西側 (南西より)

図版 10



1. SF 1・Tr42 中央 (北より)



2. SS8・SD1・Tr7 全体 (南東より)



1. SS9・Tr11 全体 (南東より)

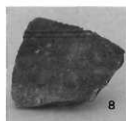


2. SD2・Tr34 全体 (南東より)

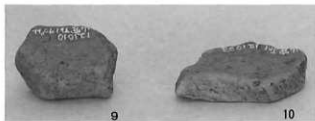
図版 12 出土遺物 1



25-Tr 1



25-Tr 2



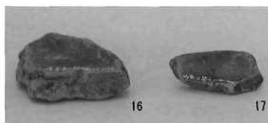
Tr 1



25-Tr 3



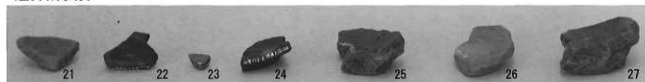
25-Tr 4



石罫



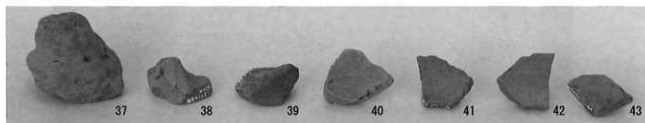
選擇所表探



25-Tr 5-1 (1)



25-Tr 5-1 (2)



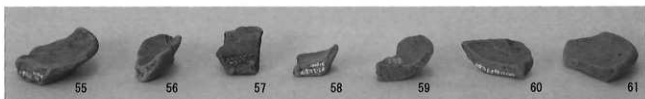
25-5-2(1)



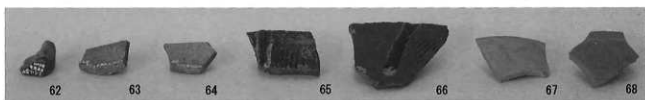
25-5-2(2)



25-5-2(3)



25-5-2(4)



25-5-2(5)



Tr45(1)



Tr45(2)



Tr45(3)

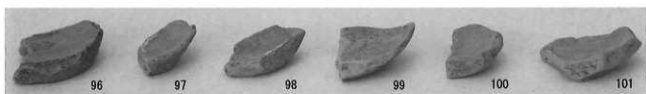
図版 14 出土遺物 3



Tr45(4)



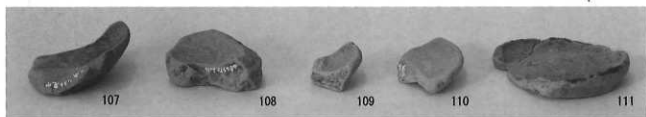
Tr45(5)



Tr45(6)



Tr45(7)



Tr45(8)

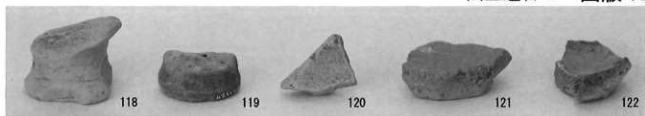


Tr45(9)

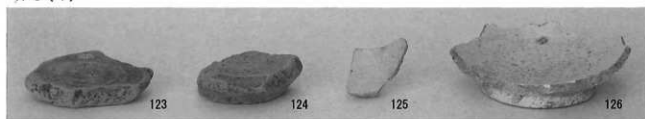


117
階段東表採

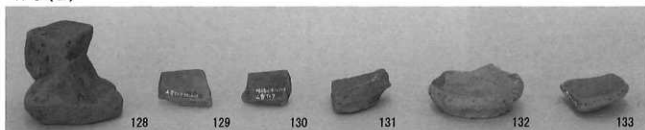




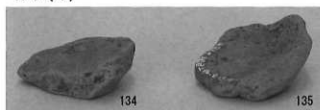
Tr 6 (1)



Tr 6 (2)



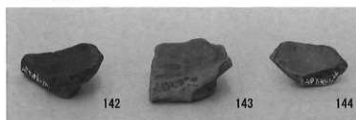
Tr 7 (1)



Tr 7 (2)



Tr 8 (1)



Tr 8 (2)



Tr 9



Tr10

図版 16 出土遺物 5



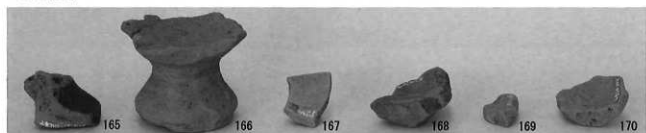
Tr11



Tr12(1)



Tr12(2)



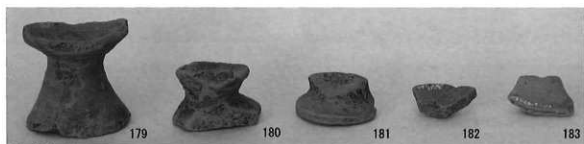
Tr13



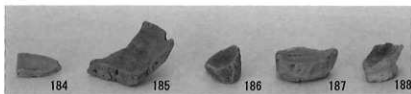
Tr14(1)



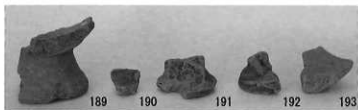
Tr14(2)



Tr15(1)



Tr15(2)



Tr16(1)



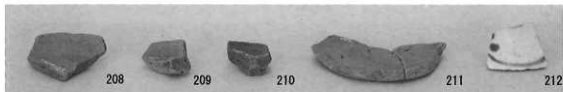
Tr16(2)



Tr16(3)



Tr17(1)



Tr17(2)



Tr18(1)

図版 18 出土遺物 7



Tr18(2)



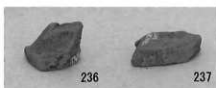
Tr18(3)



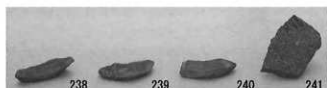
籠屋表採



Tr19



Tr20



Tr21



Tr22



Tr23



Tr24



Tr25(1)



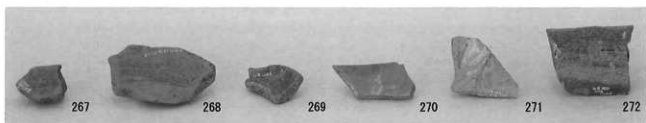
Tr25(2)



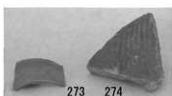
Tr26



Tr27



Tr28



Tr29



Tr31



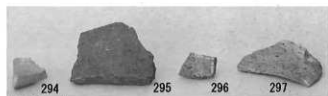
Tr32



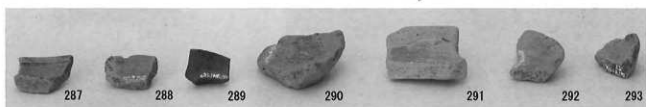
Tr30



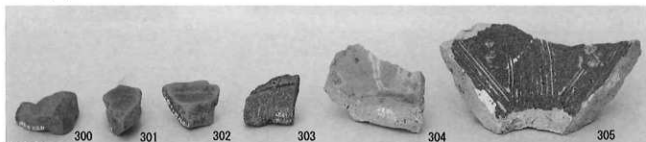
Tr33



Tr34(1)

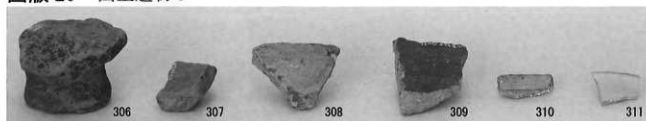


Tr34(2)

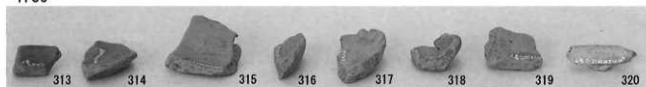


Tr35

图版 20 出土遺物 9



Tr36



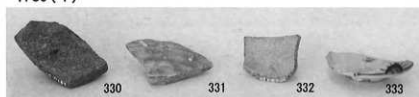
Tr37



Tr38



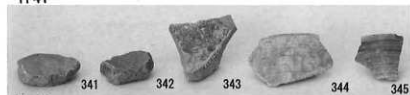
Tr39 (1)



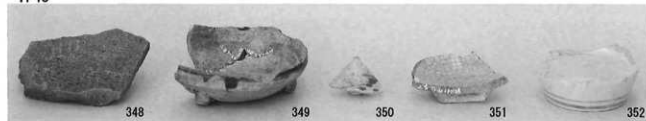
Tr39 (2)



Tr41



Tr43



Tr44

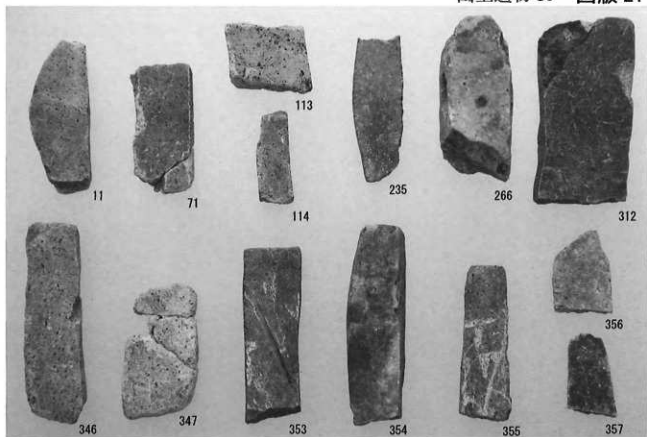


Tr40

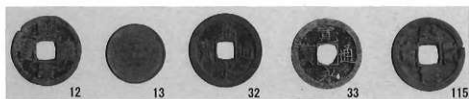
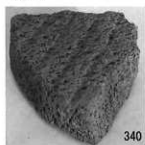


Tr42 |



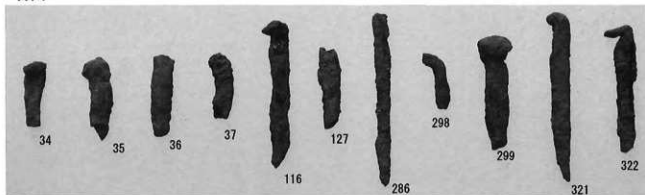


砥石



錢貨

石臼



釘



鉛玉
文鎮



玩具類

報告書抄録

ふりがな	やまみやせんげんじんじやいせき							
書名	山宮浅間神社遺跡							
副書名	史跡「富士山」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第49集							
編著者名	保竹貴幸、永田悠記、梶山沙織							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 Ⅱ0544-22-1111代							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまみやせんげん 山宮浅間 じんじやいせき 神社遺跡	やまみやせんげん 富士宮市 山宮	22207	市番号 183	35° 16' 16"	138° 38' 18"	20121001 } 20130129 20131111 } 20140320	438 m ² 200 m ²	史跡 「富士山」 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
山宮浅間 神社遺跡	社寺	平安～現代		石列・石塁・ 階段状遺構・ 土塁ほか		土師器・国産 陶磁器・貿易 陶磁器・石製 品・和釘ほか		選拝所・境内地 内外に遺構点在 12世紀～15世 紀を中心とした 土師器等が出土

富士宮市文化財調査報告書 第49集

山宮浅間神社遺跡

—史跡「富士山」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27年3月20日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111(代)

印刷 勝きうちいんさつ

〒418-0015

富士宮市舞々木町70

(0544) 27-4055(代)